行動するソーシャルワークの
アンソロジー

ソーシャルワークは境界を越える人間関係の重要性

ルース・スターク編

IFSW

行動するソーシャルワークのアンソロジー

ソーシャルワークは境界を越える：人間関係の重要性

ルース・スターク編

国際ソーシャルワーカー連盟

編者：ルース・スターク
デザイン：ムスタファ・アル・アワド
レイアウト：パスカル・ルーディン
国際ソーシャルワーカー連盟（IFSW）　発行

＊本出版物に記載された見解は、必ずしも IFSW の方針を反映するものではありません。

978-3-906820- -19-4
第 1 版　2019 年（PDF 版）

Copyright © 2019　国際ソーシャルワーカー連盟
ラインフェルデン、スイス

謝辞

ルース・スターク著

　このアンソロジーの執筆者はすべて IFSW（国際ソーシャルワーカー連盟）コミュニティのメンバーである。彼らは、2018-20 年のグローバル・アジェンダの準備のための資料を作成するにあたり、自身の取り組んでいる仕事、技術、専門知識を考察も交えて記録した。ここに描かれたソーシャルワーク実践の現実は、ソーシャルワーカーが社会開発に向けて何をもたらすかについてもっと多くを知りたいと考える同僚や他の人々に情報を提供するであろう。彼らのソーシャルワークへの惜しみない時間と情熱なくして、本書は存在しなかった。彼らの仕事を通して、読者の皆様は彼らを知り、これから出会うであろう。

　執筆にあたられたのは下記の方々である。

Sangeetha George　サンゲータ・ジョージ
　インドのベンガルールのソーシャルワーク修士課程の学生、INPSWA 会員

Sheeja Karalam　シージャ・カララム
　インドのベンガルールのソーシャルワーク准教授、INPSWA 会員

Victor Paul　ヴィクター・ポール
　インドのベンガルールのソーシャルワーク教授、INPSWA 会員

　サンゲータ・ジョージ、シージャ・カララム、ヴィクター・ポールは、ベンガルールにある CHRIST 大学の社会学およびソーシャルワーク学部のメンバーである。ソーシャルアクション研究所は、14 の異なるコミュニティで貧困状態にある女性や子どもたちのエンパワメントに取り組んでいる。

Mariko Kimura　木村真理子
　日本のソーシャルワーク教授。2010-2018 年、IFSW アジア太平洋地域会長・IFSW グローバル副会長。真理子が率いる IFSW のアジア太平洋地域は、多くの自然災害に見舞われてきた。彼女は、この地域のソーシャルワーカーたちが災害後の対応や訓練を開発することを可能にし、そのことは現在持続可能なコミュニティの再建に役立っている。彼らはこの活動におけるグローバルなリーダーである。

Graham Morgan MBE　グラハム・モーガン大英帝国五等勲爵士

スコットランド精神福祉委員会参画・参加担当官（生活体験）。2015 年の IFSW ヨーロッパセミナー及び 2018 年の IFSW 世界会議の講演者、HUG 会員。彼の大英帝国五等勲爵士は、スコットランドとその周辺国における精神保健サービスの政策と実践に、実体験からの声と専門的知識をもたらした功績に対して授与された。最新の著書『START』では、強制治療命令を受けた彼の軌跡を描いている。

George Mansary　ジョージ・マンサリー

ソーシャルワーカー、シエラレオネ・ソーシャルワーカー協会会長。ジョージは、学校や保健医療センターの建設、社会的に弱い立場にある女性のための持続可能な生計計画の策定など、農村部や都市部で社会開発プロジェクトに携わってきた。英国と南アフリカのシュタイナー学校とキャンプヒルコミュニティで働いた経験をもつ。ルース・スタークの希望幼稚園共同設立者。

Rory Truell　ローリー・トゥルエル

IFSW 事務局長。

Silvana Martinez シルヴァナ・マルティネス

2018 年から IFSW 会長。

IFSW が世界中のソーシャルワーカーやソーシャルサービスに携わる人々をつなぐ機会を提供することはこの連盟のねらいであり目的の一つである。ユニークなことに、事務局長と会長というこの 2 つの役職は、人々が地球規模のビジョンを得るための機会を提供している。そのビジョンはソーシャルワークが単に国際的な専門職であるだけでなく、社会正義と人権が認められる共同ビジョンと地球規模の運動によって、大陸を越えて人々を結びつけることができる国際的専門職であるという理解に貢献している。

Mayumi Sasaoka　笹岡眞弓

文京学院大学、石巻支援チーム・プロジェクトディレクター、日本医療社会福祉協会（現在は日本医療ソーシャルワーカー協会）会員。地震直後、壊滅的被害、喪失感や悲しみ、人々が前に進むための安全と安心の再構築の必要性、ここにソーシャルワークがある。そのプロセスの記録、分析、即時的行動と長期的解決を図ることの必要性によって、日本は大きく貢献した。彼女の仕事は、第 2 次グローバル・アジェンダ報告書でも言及されたが、その詳細を本書で紹介する。

Sriganesh Venkatanarasiah　スリガネシュ・ヴェンカタナラシア

INPSWA 事務局長。インドの貧困と差別との闘いにおいて、気候変動と環境は極めて重要である。このような広大な国で、人々を変革に巻き込むことは難しい。スリガネシュは、

インドのソーシャルワーカーと IFSW の関係構築、加盟交渉、2019 年 9 月ベンガルールで開催されるアジア太平洋 IFSW 地域会議の誘致グループの先導に尽力してきている。

Ruth Stark　ルース・スターク
　ソーシャルワーカー、2014-2018 年の IFSW 会長。主に法制度に関わる子どもたちや、強制送還に直面する人たちのために活動する実践家。

　ソーシャルワークに関するどの本にも言えることだが、熱意と誠実さをもって技術的専門知識を提供してくれた重要な人々がいる。原稿を校正してくださった**マイリ・アン・マクドナルド**さん、日本語の記事を英訳してくださった**ヴィラーグ・ヴィクトル**さん、本の表紙をデザインしてくださった**ムスタファ・アル・アワド**さん、出版準備に携わってくださった IFSW の**パスカル・ルーディン**さんのご協力とご支援に感謝申し上げる。

　最後に、その観察や考察がいまこの本の 1 頁 1 頁に見られる思考や議論、討論を形作ってきた、この本では名前のあげられていない、たくさんの**実践者たち**、**体験を通しての専門家である人たち**に心からの感謝を申し上げる。彼らの誠実さと勇気によって、「人生は希望に満ちている！」と肯定できるのである。

（謝辞：高島恭子訳）

目次

序文 3
序章　ストーリーテリング
ルース・スターク著 5
第Ｉ章　戦争及びパンデミック後の農村部コミュニティにおける家族の再統合
ジョージ・マンサリー著 １０
第２章　亡命、トラウマ、刑務所、強制送還、大陸を越えて
ルース・スターク著 ２１
第３章　私には今、自分自身のアイデンティティがある
Ｓ．カララム、Ｓ．ジョージ、木村真理子、Ｖ．ポール著 ３２
第４章　社会的養護の体験、人間関係、若者の通過儀礼
ルース・スターク著 ３９
第５章　グローバル世界における高齢化する移民
ローラ・カサル＝サンチェス著 ４６
第６章　日本の災害の余波
重層的な持続可能性とソーシャルワーク実践
笹岡眞弓著 ５３
第７章　人間関係と意思決定支援
グラハム・モーガン著 ６０
第８章　環境の持続可能性における関係性
インドにおける地方および中央政府政策に影響を与えるソーシャルワークの役割
スリガネシュ・ヴェンカタナラシア著 ６７
第９章　コンプライエンス（命令遵守）かエンゲージメント（自発的貢献）か
―文化の横断　アフリカからヨーロッパへ―
ルース・スターク著 ７２
第Ｉ０章　ラテンアメリカのソーシャルワーク
ローリー・トゥルエル、シルヴァナ・マルティネス著 ８１
第Ｉ１章　人々と貧困と政治
ルース・スターク著 ８５
第Ｉ２章　境界を越えるソーシャルワーク-未来に向けて-
ルース・スターク著 ９３
文献一覧 １０２

序文

ローリー・トゥルエル著

　ソーシャルワークの観点から見ると、「人々にパワーを」という抗議スローガンは少々誤解を招く。人々はすでにパワーを持っているが、それを十分に使う方法を知らないのかもしれない。ソーシャルワーカーとして私たちは、人々が家族、コミュニティ、社会との「関わり」を通じて権力を積極的に活用し、「正義のために行動」し、「ネットワークを拡大」し、より良い生活と共有された未来への願望を実現できるよう支援する役割と責任を認識している。

　本書のアプローチは、ソーシャルワークの役割を生きた形で示すものである。
本書は、「ソーシャルワークと社会開発のためのグローバル・アジェンダ」の第４の柱をテーマとしている。すべての物語（ストーリー）は、変化を達成するために生み出される人間関係に関連している。家族、コミュニティ、そして社会における将来の行動を鼓舞するような議論と考察を喚起するためには、さらに多くのこの種の出版物が必要なのである。

　本書は、ソーシャルワーカーや実体験を持つ人々が、機能しない直線的な枠組みに実践アプローチを詰め込むことが多すぎる従来の社会科学研究方法論に比べて、大きな利点を持つ自分たちの経験を説明できるようにしている。通常、複雑さを最小限に抑え、適応と革新の実践に常に遅れをとる「エビデンスアプローチ」に従うのではなく、次の章では、非常に複雑な状況でソーシャルワーカーが職業の原則を適用する方法を明らかにしている。
（本書は）関係を強化し、連帯を築き、人々の相互に関連する本当のパワーを実現する人々の旅を示す物語である。

　グローバルな事例のコレクションは、人生の変化するパターンと多様性を映し出すと同時に共通点を通した相互の繋がりを示す。それぞれの事例は大きく異なる状況を明らかにし、それらの事例を合わせると、ソーシャルワーク専門職のポリシー・原則である自己決定、社会正義、人権の効果的な適用が示される。

　国際ソーシャルワーカー連盟（（International Federation of Social Workers、以下「IFSW」と記す。）のコミュニティの一員であるすべての寄稿者、編集者、読者に深い感謝の意を表し、この出版物が、省察、学習、成長、行動の継続的なサイクルにおいて役割を果たすことを願っている。

　さらにソーシャルワーク専門職が他の専門職とともにその能力を発展させるにつれて、世界を社会正義へと変革し、人々の相互に関連するパワーと共有された持続可能な未来をつくる事も願っている。

ローリー･トゥルエル博士
IFSW 事務局長
2019 年３月

（序文：松永千恵子訳）

序章

ストーリーテリング

ルース･スターク著

ストーリーテリングは、平和で包摂的な社会を築く上で何が効果的で何が効果的でないかを説明するために、世代や文明を超えて使われてきた。写真、会話、音楽、本、映画、匂いを通して、人々は自分たちの観察、気持ち、感情、恐怖を伝えてきた。

IFSW 会長としての 4 年間、そしてその前の同連盟人権委員会での任期中、私はソーシャルワークの実践から多くの物語を聞く機会に恵まれた。それらは主に口承で伝えられ、記録されることはほとんどなかった。それらはソーシャルワークの現実なのである。

これらの物語によって、世界中で関係の構築が生まれた。直接の接触によって築かれたものもあれば、人々が自分たちの活動を記録して報告することによって築かれたもの、インターネットを通じて築かれたものもある。これらの関係の絡み合いと相互依存により、包括的で持続可能なコミュニティの構築を支援する上でのソーシャルワークの役割についての世界的な理解が強化された。

この冊子には、こうした物語が数多く収録されている。これらは実在の人物に関するものは、秘密保持のため名前や身元は変更されている。各章の著者は、ソーシャルワーク実践の体験のある専門家である。

この冊子は、ソーシャルワークに関する本に通常見られるものとは異なる視点を提供している。さまざまな国や地域で起こっていることの例を共有することから、国や地域間を移動し、さまざまな形でソーシャルワーク・サービスに遭遇する可能性のある人々の生活を網羅している。ソーシャルワークを国際的な専門職業というよりも地球規模の職業として捉えることは、ソーシャルワークと社会開発のためのグローバル・アジェンダ 2020-2030 の次の段階で必要となる物語の変化に影響を与えるものである。

人間関係の重要性に関するこの冊子の未発達の段階では、インスピレーションの源は 3 つあった。いずれも、人間関係とそれが人生経験に与える影響について語るストーリーテリングを使用している点が特徴的である。これらは、1 人の個人の経験に基づく個人的な例である。読者は、インスピレーションの源を自分のネットワークやコミュニティから見つけることができる。インスピレーションの源は、地方から始まり、大陸を越えて広がっている。

「Who Cares? Scotland」

「Who Cares? Scotland」 は、スコットランド全土で社会的養護や様々な支援を経験した若者や社会的養護などに携わった人々のための全国的なボランティア組織である。

社会的養護や支援の経験のある人および家族など、あらゆる人々が集まっている。社会的養護の提供方法の変革に取り組み、彼らの実体験を検証し評価する重要なアイデンティティを提供する。

本書への彼らの貢献は、市民社会における諸問題と自らの立場を明確に提示する手法にあるだけでなく、ニュージーランドの VOYCE のような他団体との関わりや最終的な責任を負う「コーポレート・ペアレント」（訳注：第４章を参照）のような政治家たちとの関わりにも見られる。また、スコットランド首相ニコラ・スタージョンが自らを「ママ達の最高責任者」と称したように、彼らはスコットランドの子どもたちなのである。

HUG

ハイランド・ユーザー・グループ (HUG) は、スコットランドで長年にわたり精神疾患を抱えて生きる文化を変えてきた数多くの「当事者 グループ」の １つである。彼らは、精神保健福祉委員会がスコットランドの法律やサービスの共同設計と共同開発に現場経験のある専門家を参加させるのに役立ってきたし、これからもそうあり続けるであろう。この頭文字は、そのような身体的な接触が有益であり、虐待的でない限り、ハグの与え合いと受け合いが人間関係において重要であることを私たちに思い出させる。この冊子の著者の １人であるグラハム・モーガンは、長年 HUG に関わっている。

Usifu Jalloh

ウシファはシエラレオネ出身のプロの語り手であり、社会変革と文化的覚醒の立役者である。シエラレオネの学校ではフランス語、中国語、ロシア語、英語など多くの言語が使われているが、村で話されている言語は学校のカリキュラムのどこにも使われていない。彼は重要なことを述べている、私たち一人一人が己の歴史を理解し、私たちのルーツを理解することは前進する上で重要である。

場面設定、ソーシャルワークそして人間関係の重要性

どのように人々の話を聞き、どのように協力するかは、知識をどのように使うかによって決まる。しかし重要なのは、言語的および非言語的を含めた真のコミュニケーションにおいてのみ、私たちは互いに関わり合うことができるということである。

国際ソーシャルワーカー連盟の憲章に採択された ４ つの目標を達成するためには、この視点をもっと広める必要がある。

ソーシャルワーカーは、独自の専門的かつ重要な貢献をする。持続可能な社会の実現を促進し、人々と地域社会が、現在および将来の世代のために潜在能力を最大限に発揮できるようにする。

（IFSW 憲章、2016 年）

それらは、

- パートナーシップ
- アクション
- ポリシー
- アドボカシー

（IFSW 憲章、2016 年）

これらすべての要素において関係性が重要な役割を果たす。

10 年前、連盟は社会福祉と社会開発のためのグローバル・アジェンダと呼ばれる野心的なプログラムに姉妹団体である国際ソーシャルワーク学校連盟（IASSW）と国際社会福祉協議会（ICSW）と共に着手した。

包括的かつ持続可能なコミュニティの建設のために専門職が貢献するものを外部の人々に示すために世界規模でエビデンスを集めることが企画された。

2 年ごとに異なるテーマがエビデンスと共に取り上げられた、エビデンスは市民社会のさまざまな主体、政治家、メディア、国際、地域、国内の組織に関するもので専門家が会話、計画、政策に参加するのに役立つ。

グローバル・アジェンダのテーマは以下の 4 つである。

- 平等
- すべての人に対する尊厳と尊重
- 持続可能な環境
- 人間関係の重要性

この最後のテーマが、この冊子の焦点となっている。この専門職の名前には、「社会的」の中心性、人々の交流、そして人間関係の重要性が暗黙のうちに含まれている。

2 年ごとに発行されるグローバル・アジェンダの報告書において、直接的なソーシャル ワークの実践から得られたエビデンスが十分に反映されていないことが指摘された。この冊子は、その不均衡を是正し、実体験を持つ人々や最前線の実践から得たことにより多くの人々が、何が効果的かを記録し、物事をより良く行う方法について考えるように促すことを目指している。

社会保護システムの共同設計

これらの物語は、個人、家族、またはコミュニティ全体で人々を変革に巻き込むために、協力することがおそらく最も重要な要素であることを示している。共同設計と共同開発、こ

こで人々は、自分が所属し、大切にされ、評価されていると感じる。貢献し、与えることの喜びを体験する。

また、社会保護システムを利用する際に人々が直面するハードルの複雑さも明らかにしている。社会保護システムの実際の経験を通じて専門家が語る声は、何が機能し、何が機能しないかを理解するプロセスの基本である。しかし、それだけではない。関与には、すべての関係者が尊厳と敬意を持って扱われることが必要であり、差別のない包括的な制度の開発に全員が平等に関与する必要がある。彼らの専門知識は、研究者、政策立案者、実務家と同様に、変化のプロセスにとって貴重である。私たちが長年にわたりグローバル ・アジェンダを構築してきた中で、この冊子では、経験豊かな専門家やソーシャル ワーカーが世界を見るレンズである独自の総合的な視点で 4 つのテーマにまとめている。

ソーシャルワーカーの役割

- ニーズを満たす
- 人々がリスクを認識し、管理できるように支援する
- 社会正義を実現するために、競合する人権を調整する

この方法は次のように説明されることが多い。

- 人々と協働して、彼らが何を変えたいのか、あるいは何を変える必要があるのかをアセスメントする
- ソーシャルワーカーはしばしば変化を起こす触媒となることが多い
- 知識とスキルの主な源は社会的な関係を通して、それぞれが専門知識を認めることである

全てこれが実際にどのように機能したかの例は、スコットランド政府が開発した登録ソーシャルワーカーのためのフレームワーク（2009 年)、に見ることができる。地元の専門家の代表であるスコットランド・ソーシャルワーカー協会（SASW）は、このガイドラインを起草したチームの一員であった。2006 年に社会福祉サービスのレビューが行われたが、それは権力と支配を是正することを目的とした市民リーダーシップをコンセプトとするもので 1980 年代から 1990 年代にかけての英国のソーシャルワークよりも社会行政を重視することで発展したモデルであった。

ソーシャルワーク - 政治的フットボール

世界中のソーシャルワーカー達は、ソーシャルワークが政治の道具として利用されていることを認識しているであろう。スコットランドで起こったことは、多くのこの知識を共有することで、専門家は市民社会や政治社会に働きかけて、より戦略的な行動をとり、社会保障に対するより倫理的なアプローチとその方法と場所、私たちが暮らす地域を、包括的で持

続可能なコミュニティへと変化させるであろう。

参加すること、ソーシャルワーク・コミュニティに力を与えること、ソーシャルワーカーと専門家が実体験を通して繋がること

これらの物語と考察の著者らは、あなた自身の経験について考える機会を与え、いかに事実を記すかだけでなく、成功や省察的な学びをどのように記録するかも考えることを促すであろう。皆さんもぜひご自身の物語をシェアしてください。今後の冊子では、ソーシャルワークから得た知識と知恵が出てきる。ソーシャルワーカーとしての私たちの生き方を改めて認識し、すべてが変化を生みだすという認識を広げる手助けをしよう。

（ストーリーテリング：松永千恵子訳）

第１章

戦争及びパンデミック後の

農村部コミュニティにおける家族の再統合

ジョージ・マンサリー著

はじめに

今日、家族の再統合と人権保障は、世界中の多くの人々にとって大きな関心事である。シエラレオネのような発展途上国の農村部では、孤児や貧困家庭の子どもが、しばしば親戚や家族の友人の養子となるが、非常に劣悪な環境で暮らすこともありうる。ソーシャルワーク実践は、持続可能で変革的な変化を達成するための包括的な社会開発計画を支えることができる。これは、虐待や搾取の対象になりやすい人々が、農村コミュニティが直面する圧倒的な課題を克服する助けとなる可能性がある。

ソーシャルワーク実践者は、人々が人間関係を通して健全で理性的な態度を身につけられるよう、意識的に支援しようとしている。協働は、個人、家族、あるいはコミュニティのレベルで人々に変革的な変化に関わるように働きかけるための最も重要な要素であると考えられている。そのため、ソーシャルワーク実践者は、人々のもとに出向き、彼らとともに暮らし、彼らを愛し、彼らに仕え、彼らが知っていることを出発点とし、彼らがもっているものを土台にしていくようにしている。

ソーシャルワーク実践者の価値は、気づかれないことが多いが、コミュニティ活動の拠り所である。何十年にもわたるソーシャルワーク実践の中で、人間関係の力は、未来への道筋を示し、ニーズを特定し、変革的な変化を達成するために何が可能かを定義するための支援的な役割を果たしてきた。

シエラレオネの農村コミュニティにおける持続可能で変革的な変革をもたらすことは、角を矯めて牛を捕まえるようなプロセスではなく、持続可能な関係を築き、農村の人々の知識、生産活動、価値観を受け入れ、尊重するという、丁寧なプロセスや手順に裏付けられたゆっくりとしたものである。

ソーシャルワーク実践の価値は、ニーズのアセスメント、プログラムのプランニングとプロジェクトの実施に表れている。家族の再統合だけでなく、懸念されるコミュニティや環境の課題に対応できる支援は、行動や態度の変化に火をつけ、シエラレオネにおいてより持続可能で変革的な変革のための条件を作り出してきた。

シエラレオネ

シエラレオネはアフリカ西海岸に位置する人口 700 万人の小国である。それに伴う諸課題も含め、10 年にわたる内戦（1990 年～2000 年）を経験した。2014 年から 2016 年にかけてエボラが猛威を振るい、多くの死者を出し、国の経済は壊滅的な打撃を受けた。2017 年に発生した土砂崩れと洪水によって、何百人もの死者、ホームレス、孤児が出た。

今回の物語では、シエラレオネ北部にある「ルース・スタークの希望」という運営コミュニティに焦点を当てる。そこには 58 万人（定住民と一時的住民）が住んでいると推定されている。家族は大規模で、平均 12 人で構成される拡大家族である。大規模家族の背景には、一夫多妻制があり、一人の男性に 3 人の妻がいることも珍しくない。家族の人数が多いことは、社会的・経済的な意味合いもあり、経済的に厳しい状況にある場合はなおさらそうである。家屋は泥レンガ、錆びた波板、ヤシ葺きでできており、互いに近接して建っている。

経済的な困難にも関わらず、いくつかの現実的で持続可能な経済活動がある。例えば、鍛冶屋では、農具や鍋などの調理器具が製造されている。

漁業は主要な経済活動であり、漁師や魚屋は社会的な組合を組織し、これらはメンバーの経済的利益やその他の利益を支えているが、課題にも直面している。漁業は造船産業を生み、その中で新しい船が建造され、古い船は修理されている。船外機付きの地元製ボートを使った海上輸送は、人や物資が様々なコミュニティ間を行き来するために役立っている。

地域内の貿易のほとんどは、農家から仕入れた野菜や果物を売る女性や少女が担っている。その他の品物や、主に米やソースなどの調理食品を売る人もいる。男性商人は、自転車やオートバイを使い、タバコ、パン、ソフトドリンクを村々で売っている。地域内には小さな商店がたくさんある。

主たる職業は農業である。稲作や家庭菜園は自給自足様式で行われているが、その生産量は持続可能なものではない。

仕立て屋は、新しい服を買う余裕のある人、あるいは古い服や中古の服を繕い、直す人のニーズを満たしている。中国製の新品は高価で、時には法外な値段になるため、古着の取引は活発である。

山羊、羊、鶏が飼育されている。餌を与えられていない家畜は、食べ物を求めて野原やゴミの山を彷徨っている。このように自由に移動できることが、その健康的な状態の要因かもしれない。

希望コミュニティ・イニシアティブの活動地域は、国土を横断し、国境を越えている。ほとんどが遠隔地で、資源に乏しい農村部の人々が住んでいる。人々のほとんどは 16 の主要民族のいずれかに属しており、地域によってばらつきがある。

僻地におけるソーシャルワーク

農村部のシエラレオネで、ジャングルの道をバイクで走り、川や小川を渡り、数キロを歩いて集落にたどり着いてから、部族長の敷地内の木の間にぶら下がっている現地製造のハンモックでの休憩はいつもリフレッシュする。爽やかな冷たい風、鳥のさえずり、忍び寄る

小さな生き物、緑豊かな植物と動物などを楽しんでいると、都市部と対照的に自然がどれほど大事にされているか、明らかである。

伝統が迎えてくれる。歌、踊り、礼儀作法によるコミュニティの集まりは、このような感動的な瞬間やコミュニティの素朴さと雰囲気を一瞬たりとも忘れさせない。農村コミュニティに耳を傾け、一緒に協働し、コミュニティの課題を特定し、それに対する意識を高め、変革的な変化を達成するための活動を紹介し、向上させていこうという意欲はますます高まっていく。

一般的な歓迎の礼儀にはどのような作法があるか、そしてそのお返しとして何が期待されるかと考えながら、始まるのをわくわくしながら待っている。彼らの物語、歌、なぞなぞ、ことわざ、笑顔、笑い、回復力の意味深さに圧倒される。彼らには、すべてが失われたわけではないという希望があり、人間関係の重要性に対する認識がある。このことも踏まえて、ここのソーシャルワーカーは、知恵が過去から導かれると信じている。われわれは、サービスを提供するコミュニティの歴史や伝統を、実践の中心的なものとして参考にしている。これらは、一緒に達成したいと切望する変革的な変化に向けて、持続可能なソーシャルアクションに取り組むための実践を改善させる知識、スキル、経験の貯蔵庫として役立つ。

人々とともに

第一歩は、ニーズを特定することであり、個人、家族、あるいはコミュニティ全体にとって実現可能なことを定義することである。「ニーズ」とは足りないことであり、実際の状態と最適な状態との間の不一致であることを念頭においている。最適な状態とは、個人、家族、コミュニティ全体にとって望ましい状態である。シエラレオネの農村部では、最適な状態を実現することは難しく、社会サービスの欠如（あるいは利用できないこと）の影響がしばしば明らかになる。

村の広場にいる私は、Ｔシャツに短パン、頑丈なブーツを履き、リュックサックには救急箱、カメラ、そしてコレラ予防、若年結婚、人身売買、児童労働、家庭内暴力、強姦、植林に関するイラスト付きの広報チラシが入っている。長老たちは彼らの権威を示す伝統的な服装を着ている。女性たちは歌って踊っている。若い少年や少女たちは、破れた服を着て、裸足で、膿がにじみ出た痛々しい足で走り回っている。全員順番で踊っている中、私も踊らざるを得なかった！

われわれは、手順を遵守して進めていく。書面の次第はないが、記憶の中で記録を残している。女性たちが率先して歌い、踊り、そして部族長がわれわれの訪問の意図を説明する･･･。完全なる沈黙に囲まれて、シーンとしていた。しかし、重要なポイントが語られるときには、歌い手たちが口を挟むこともある。今に始まったことではないが、これまでにもいくつかの組織が約束を取り付けては、それを果たしに戻ってくることはなかった。そして、総括の前に私の番が回ってきた。女性の声が聞こえない、若者の声が聞こえない、子どもの声が聞こえないというギャップが見えた。それから、お腹を空かせた子どもたちが見守る中、ご馳走

を食べ、コミュニティを視察した。一歩一歩を慎重に踏みしめなければならないことを理解している。

次に、握手とハグを必要とするすべての人（主に高齢の女性たちから何かを失ったかのように必要とされている）に挨拶するために握手し、頭を下げていく。彼女たちの生活リズムを感じ、行動のきっかけとなる。素手を使って、何人かの子どもたちの鼻水を取ってあげると、そのリズム、コメントや一言を感じる。木の下で休みながら、熱帯癌や足の痛みを簡単でありながら適切な治療で治す応急処置をしている。彼らの名前を知り、家を知り、コミュニティで何日か過ごすうちに、さわやかなココナッツ飲料、あるいは老婆から進められる伝統的な食べ物のために寄っていく。そのような交流は、歴史や、その過程の中で彼らがよく語る際立った課題など、多くのことが明らかになる。

到着後に、果たされなかった、他の組織からの以前の約束について話し合った。以前の取り組みの失敗が、彼らのわれわれに対する希望や信頼に与える影響を認識する必要があった。彼らの反応は当然批判的であったが、敬意を持ってわれわれの関与を受け入れてくれた。

現地の部族長が宣言して、子ども、女性、若者、男性、そして高齢者の代表が、それぞれの課題について発表するよう呼びかけたが、それは温かく向けられた！最初の発表者は誰になるかと心配していたが、一瞬のうちに、コミュニティの各グループが自分たちの発表者を選んだ。「ワオー」のような感じで、まさしく「ワオー」っと流れが進んだ。彼らはすでに「目が乾いている者」、すなわちみんなの代弁者となれる、勇気ある人たちを知っていた。

今こそ彼らの物語、まさしく彼らの物語を語る時である。集まりが整ったところで、歌っている女性の歌声とドラム、そしてダンスを伴った感動の波が押し寄せた。彼らにとって深刻な課題を誰もが自由に声をあげられることに対する全員の感謝の表れであった。

そう、女性代表のンタラに次いで男性代表のンファ、そしてンナディ、バトール、ギネンダイ、それぞれ若者、子ども、高齢者の代表の順番であった。全員が同じようなメッセージを発していた。それはすべて、彼らの生活するコミュニティが直面している課題にかかっていた。彼らの発表は独自性があり、内容も感情も豊かであり、現地の人々のニーズに関する現地の知と専門性が明らかになるように、目的と深みをもって語っていた。優先事項の順位付けを目標に、これらのニーズを認めるためには、人々とわれわれソーシャルワーカーが共同で再確認する必要があった。

ンタラ

ンタラは、他の多くの女性と同じように、寡婦である。2014 年のエボラ出血熱の流行時に夫を失い、数人の子どもと他の親戚の子どもが残された。貧困が蔓延する中、数人の子どもや他の家族の世話をしなければならず、彼女は絶望的に見えた。

ンタラによれば、何人かの子どもを他の親戚に引き渡して、その養育を手伝ってもらうのが伝統である。これはンタラや他の女性たちにとって嬉しいことではなかったが、子どもの世話を保障する他に選択肢はなかった。10 歳のときに両親を亡くした彼女にとって、この

ことを受け入れるのは難しかった。「子どもの頃、利用され、虐待された。5 年間、苦痛と拷問を経験した。」と彼女が語っている・・・これは、全コミュニティにおいてほとんどすべての成人に当てはまる。彼らはほとんど被害者であり、模範となった人たちの行動を繰り返すうちに、加害者になっている。ほとんどの親にとって、自分自身の過去を振り返り、子どもが他の養育者に世話されながら、どれほどの苦痛を味わっているかを理解することは難しい。このように子どもを世話する仕組みは、インフォーマルな取り決めであり、書類も必要なく、子どものニーズが満たされているかどうかを確認するためのフォローアップもなかった。子どもたちが親のケアから切り離されることを、知らせられる家族の人は少ない。

行動の呼びかけ

好奇心に満ちたソーシャルワーカーとして、われわれは多くの子どもたちがひどい状況に置かれていることと、大人たちがその影響を受けていることを目の当たりにした。コミュニティの最も重要なニーズ、そして最大の課題は、家族の再統合であった。したがって、コミュニティが行動を起こそうとする意欲に注目し、子どもたちの安全を確保し、可能であれば両親のもとに戻すうえで必要な行動を支援するための関係を構築し、強化し始めた。教育、保健医療、農業支援、レクリエーション、持続可能な生活支援サービスを提供した。これらすべてが、コミュニティと再統合家族の持続可能な将来につながるものである。

幼稚園の新しい考え方

子どもたちの帰還は実に感動的で、しわの多い顔に浮かんだ喜びと笑顔が彼らの世界を照らした。子どもたちが生活ニーズを満たすコミュニティに戻ってきたことで、コミュニティが変わった。子どもたちの成長と発達を支えるため、幼稚園の概念を考え直した。

幼稚園はしばしば、子どもの育ちを支援し、彼らを助け、親とともに成長過程のあらゆる段階を楽しめるようにするための第一歩として導入される。西洋の文化では、幼児期の体験が重要であり、家庭からより広い社会、教育へと移行していくことに言及している。しかし、ここの文脈における「children’s garden」［訳注：ここでは、保育園・幼稚園を意味する kindergarten というドイツ語由来の英単語が意図的に直訳され、使用されている］は、子育てワークショップに重点を置き、次いで学校、飲料水のための穴掘り、持続可能な生計講座、小規模農業、コミュニティオーガニゼーション、そして子どもと家族の再統合の基礎となる成人教育講座へと続く。そこには今まで資源不足があった、そして未だにある。コミュニティと助成団体との関係形成は大きな成果であったが、再統合のプロセス、就学、学習・教材、子どもとその家族の適切な生活を確保するための持続可能な生計事業、保健医療の提供、その他の生活ニーズとみなされるサービスを支援するための資源が求められている。

自分の子ども時代を振り返ると、ンタラにとっては対照的である。ンタラは、孤児で、高齢の祖母と暮らしていたという。当時は一日一食の食事を与えられていた。祖母の世話もした・・・つまり・・・調理、家の掃除、服の洗濯、村内の移動介助などをしていた。

ンタラ自身の生活と彼女の子どもたちの生活は変革した。

ニーズのアセスメント

幼稚園の取り組みの目的は、家族の再統合とコミュニティ及び環境の持続可能性の促進である。プログラムを立案するプロセスの中心はニーズアセスメントである。これは、われわれのソーシャルワーク実践を活用した問いかけ、対話、観察という形をとったもので、適切かつ十分な知識、敬意を払う態度、コミュニティとの持続可能な関係へのコミットメントを育むことに基づいた。コミュニティが自分たちのニーズを明確にし、開発プロジェクトの立案に参加できるよう支援することで、コミュニティの参加を促した。この活動は、ボランティアと彼らが仕えるコミュニティの双方に新たな学びの機会を提供し、コミュニティが実際に直面している問題や潜在的な課題に対する意識を高めることにつながった。

幼稚園の地元ボランティアと国際ボランティアは以下のことを主張する：

ニーズとは足りないことである・・・個人、コミュニティや全国民にとって好ましいとされる状態と、現状と呼ばれる真実の、あるいは現在の状況との間に不一致がある。

したがって、幼稚園は、彼らがサービスを提供する人々の基本的なニーズから出発する。コミュニティと支援者チームの合意による基本的なニーズとは、個人、グループやコミュニティのウェルビーイングが、それなしには満足のいくものにならないような物事や状態のことである。

支援者チームは、ニーズを区別した最初の主要な研究者の一人であるアブラハム・マズロー（1954 年）に、ニーズという考え方を結びつけている。彼の動機づけ理論は、階層的な配置で、個人または人に対する相対的な重要性の昇順で、ニーズの 5 つのレベルを概説している。マズローのニーズは、網羅的でも相互排他的でもないことに留意すべきである。

幼稚園コミュニティのニーズは、基礎的または基本的である。彼らは生存に必要ないくつもの必需品を欠いており、非常に困窮している状態で生活している人もいる。幼稚園コミュニティへの訪問は、農村部コミュニティにおける家族の再統合ためのプログラムを立案するプロセスの不可欠な一部となった。合意されたプロセスや手順に従って調査を実施した。立案の初期段階から地元の部族長や長老に参加してもらい、彼らの理解と支援を得るとともに、彼らとの関係を構築する必要があったため、予備会議を開催した。

時には議論が白熱することもあった。自分たちのデータが、他人の自己顕示欲や学問的な目的のための資金集めに使われる進め方や方法に対して、コミュニティが不満を表明したためである。しかし、彼らが質問に答えず、議論に参加しようとしないことは、協力の欠如と見なすべきではなく、自分たちの尊厳と尊重を否定されたと彼らが表現したことに対する反応である。

われわれのチームは、彼らの信頼を回復するために、常に安心感を与えるようにしている。彼らの状況に関心を持ち、彼らとともに幼稚園の目標と目的を達成したいと考えていた。われわれにとって、これは単なる仕事ではなく、ソーシャルワーク専門職が、これを天職とし、

アイデンティティとしている。

チームは敬意を払い、調査に踏み込む前に必ずコミュニティに声をかけ、プログラムを立案するための調査の目的を明確にして、コミュニティの意識を高め、環境、経済、社会文化、技術に関連する持続可能性の指標に関する調査の範囲を概説するなど、調査の各段階について話し合うようにした。

コミュニティがわれわれに対して自分たちの言葉で話すことを奨励し、現地コミュニティが抱える問題がその地理的な条件と密接に関連していることをコミュニティとともに認識した。われわれは、自分たちにとって何が最も役立つかについて幼稚園コミュニティが優先順位を立てられるよう支援するが、問題の複雑さや、人々とコミュニティの相互関係を過小評価することはない。

人間関係の力　－　愛を通してつくる架け橋

コミュニティのニーズを充足させるサービスや制度がないと知っていたため、自助と、農村部コミュニティの住民とヨーロッパの同僚との間のボランティア協力に焦点を当てた。そうすることで、周縁化されたコミュニティに長期的な利益をもたらす関係を築くことができた。

調査に従事する人々や関心を持つ他の同僚たちが、はるかに貧しい国々におけるソーシャルワークがどのようなものであるか、実際に肌で感じる必要があることに気づいた。そして、彼らはわれわれの信頼関係、尊重、またコミュニティのニーズを満たすために協働しようとする意欲をみて、この課題に取り組んでくれた。

ヨーロッパでの生活と、アフリカ、特にシエラレオネへの訪問と、そこでの仕事との対比は、ボランティアだけでなく、彼らが一緒に協働しているコミュニティにも大きな影響を与えた。あるボランティアはこのように言った・・・

まるで夢の世界に住んでいるようで、何が現実で何が現実でないのか分からなかった。しかし、現実は、蔓延する貧困、侮辱、機会の欠如であった。また、不利益を被る子どもたち、女性たち、若者たち、美しい森林や野生動物、自然の美味しい食べ物、音楽も現実であった。現実には、真っ暗や、安全でない飲料水も含まれていた（ペットボトル水を携帯することが嫌で、彼らの水を飲みたいと思っていた。数カ月ほど経つと、実際に飲むようになったが、最初は自殺行為と感じた）。

一日の流れを終えて、休みながら毎日を振り返ると、眠れなかった。人々の生活水準を向上させるためには、多くの困窮があり、多くの資源の活用が必要であった。自分の食料、衣類、寝具、救急箱、お金、そして知識を分かち合うことで、とりあえず始めた。アフリカの名前をもらい、大流行した。様々なコミュニティに出入りし、集会、農作業、音楽、その他の伝統的な儀式に参加した。最初はガイドと可愛らしい子どもたちと一緒にコミュニティを歩いたが、ポルトガルから来たかのようにポトと呼ばれていた（ポルトガルからシエラレオネに渡った最初の船乗りに由来する名前）。また他の人々は、白人に対するある現地の部

族の呼び名であるフォロトと私を呼んだ。やがては、より自立し、自信を持ち始めた。コミュニティに没頭し、豊かで多様な文化についてあらゆることを学びたいと思うようになった。

将来に向けた関係強化

幼稚園コミュニティが抱える問題は厳しく深刻であり、コミュニティは、貧困と侮辱が蔓延するシエラレオネの農村部における人間の生存を研究するためのワークショップとして利用することができるぐらいである。

今日におけるコミュニティとの協働は、シエラレオネの家族がしばしば悲惨な結果を招いた深刻な困難を経験してきたことを示している。コミュニティにおける家族の分離の主な特徴は、死別、貧困、不十分な食料、病気、若年結婚などである。

一部の部族の間では、父親が亡くなると、残された兄弟かその他の近い親戚が、亡くなった家族の生活保障として、寡婦と結婚して家を継ぐことがよくある習慣である。これらのコミュニティでは、男性はできるだけ多くの妻と結婚し、新しい妻の子どもをすべて養子にすることが一般的である。子どもたちを養うことはさらなる負担となり、蔓延する貧困から抜け出すことはほとんど不可能である。

母親たちがその重荷を背負い、負担する一方で、子どもたちはしばしば精神的に追い詰められ、しばしば過酷な労働を強要され、耐えがたい状況で暮らしている。

このような家族にとって、負担を軽減するための解決策はただ一つ、親族に子どもを思うように養育するように依頼することである。しかし、多くの母子が語っているように、必ずしもそうなるとは限らない：

アダムサイの物語

アダムサイの通常の一日は朝 5 時に始まる。食器洗い、家の片付け、遠くの小川から水を汲んできて残った食事を温め、近所の人のために簡単なお使いをすることが彼女の朝の仕事に含まれる。

それから、体を洗い、古びた制服を着て、ビニール袋を持って朝 7 時に学校へ向かう。学校までは 5 キロあり、1 時間後に到着する。その村から学校に通っている子どもはアダムサイだけである。一人でジャングルの中を歩かなければならず、サル、ウサギ、ヘビ、そして怖い鳥たちにも出会う。孤立した危険な場所でありながらも、アダムサイは安全で危険にも慣れていると言う。

学校は午前 8 時に始まり、午後 2 時に終わる。アダムサイの学校での教科は、数学、宗教、理科、社会、文学、英語、創造的・実用的芸術、家庭科、アウトリーチ活動などである。12 冊の練習帳、ペン、鉛筆、消しゴムが支給され、年間を通して使用している。

アダムサイの好きな教科は農業で、アウトリーチ活動として取り組んでいる。農業はコミュニティの主な生業であるため、アダムサイはほとんどの農業技術に精通しており、取り組

みと一貫として小さな農場を経営している。重労働はすべてコミュニティが行い、アダムサイは収穫時期まで世話をする。収穫で得た収益は、アダムサイと祖母の生活維持のために店に寄付される。幼稚園から支給される本以外には、アダムサイは何も持っていない。彼女は祖母と一緒に絶対的な貧困の中で暮らしている。

昼休みは遊び時間である。子どもたちは交流し、何人かの友だちが学校に持ってきた粗末な食べ物を分け合い、パン屋から支給されたパンを食べる。

宿題は放課後に行われる。アダムサイはボランティアによる課外授業に追いつくため、少し長めに居残る。現場ワーカーがいるときは、アダムサイはバイクで家まで送ってもらうこともある・・・しかし、多くの場合、一人で家まで歩かなければならない。夕食が、帰宅後、夕方の時間帯にできる。彼女の１日は午後 10 時半に終わる。

アダムサイや彼女のような子どもたちが直面する貧困と課題は圧倒的である。相当な資源不足があり、子どもたちの生活に変化をもたらすのに十分な資源を提供することは難しい。アダムサイは看護師になりたい。その理由は、多くの赤ちゃんと妊産婦が、治せる病気で頻繁に亡くなっていることである。

優先事項の順位付け

時間をかけて、われわれの活動は、将来にわたってコミュニティに利益をもたらす持続可能な生活水準の変化を支えるために設計された一連のプロジェクトを支援してきた。その中で、コミュニティが語った物語とアセスメントされたニーズに基づいて、優先事項の順位付けをしてきた。これにより、持続可能で変革的な変化を支援する一連の活動につながる包括的なプログラム立案が確保された。

優先事項の順位付けは、何千人もの弱い立場の人々に笑顔を取り戻すために必要不可欠なことになる。今日、何百もの家庭は、エボラ出血熱やその他の治療可能な病気で愛する人を失った女性が世帯主になっている。支援チームは、様々なコミュニティの住民たちの伝統に従って活動している。

ンタラやアダムサイのような物語に心が痛むが、コミュニティと西洋のパートナー間で何十年もかけて築かれた関係は、変化を受け入れようとする彼らの意欲と相まって、コミュニティが学校建設、保健医療、農業、地域力形成、持続可能な生活支援プロジェクトを開発できることを可能にした。これらの各種プロジェクトは、コミュニティの信頼を回復し、関係強化とともに、すでに稼働しているプロジェクトから資源を得ることで、より新しい取り組みを育んでいる。

今日、何百人もの生徒が、適切な家具や学習教材が整っている教室に通い、現地で養成された教師とコミュニティ・ボランティアが、子どものために最善のコミュニティ取り組みを運営している。

保健医療サービス、農業支援、技術移転への十分なアクセスがあり、コミュニティとそのパートナーの間にすでに強い関係がある。また、西部と南部の溝を埋める相互結婚も見受け

られるようになった。国際的なパートナーシップも発展し、より多くの教育機関が教員や学生を研究のために派遣し、コミュニティに利益をもたらす新たなプロジェクトを立ち上げている。

活性化したコミュニティ

学校、保健医療センター、農業支援、レクリエーション、その他の活動がすでに機能しており、家族は子どもを養育するための資源が揃っていると考え、子どもの帰還を望んだ。

ある母親はこのように言った、

子どもたちを返してもらったため、嘆き悲しむ日々は過ぎ去った。私たちは夫を亡くし、子どもたちを育てる資源がなかったから、子どもたちを奪われた。子どもたちは養育のために他の親戚に預けられたが、実際は教育も受けられず、しばしば重労働を強いられ、子どもらしい時間を過ごせなかった。子どもたちは声も上げられず、弁護者もなく、すべてを我慢しなければならなかった。耐え難い中、私たちは自分の気持ちや感情を押し殺し、子どもたちがどれほどの痛みと苦しみを味わってきたかを知り、涙を流した。

何十年経っても何も変わらなかった。私たちのほとんどはこのように育った。虐待と強制労働などの苦しみを経験しながら。ソーシャルワーカーが私たちのコミュニティに入ってきて、私たちの仲間入りをしたことで、その縛りが解かれたのは幸せそのものとなった。コミュニティが一丸となってソーシャルワーカーと一緒に厳しい訓練を受けたことは、私たちにとって大変であった。しかし、私たちの目は開いており、意識も、新しい生活様式へのモチベーションもそもそも高かった。

土地、樹木、労働力、砂、石、水、歌、踊り、家屋など、私たちの持っていたすべてのものを、変革的な変化への貢献として捧げた。友人、正確にいうと家族、あるいはソーシャルワーカーたちが、他の資材を持って来てくれた。共同で、計 14 校以上の学校を建て、いくつかの保健医療センターを設置することができた。パン屋、農場、技術訓練、成人教育、既存の建物の幼稚園への代用と新たな幼稚園の建設を行った。

幼稚園の意義は、健全な社会的交流を育み、安全で美しい居場所を幼児に提供することである。このアプローチを代表する子育てワークショップでは、社会的な出会いや生き生きとした想像力豊かな遊びを通して学ぶことで、親が子どもの身体的・情緒的な成長をどのようにサポートできるかを示している。幼稚園のアプローチは、子どもの再統合プロセスにおける自発的な変化を促した。

今日になって、子どもたちを返してほしいという私たちの願いが、幼稚園によってより向上し、促されたことを嬉しく思っている。家族内の溝を埋め、コミュニティと子どもたちの再統合を確実なものにするのは、教育、保健医療、レクリエーション、生活スキル、そして家族の所得を向上させる持続可能な生計支援へのアクセスである。

ソーシャルワーカーの人としての努力は、現場やその他の場所での彼らの行動が、何年もかけて築いてきた深い信頼関係を発展させ、維持することを通じて、持続可能で変革的な変

化をもたらし、今後もその成果が見られ、感じられるであろう。

編集者注

2016 年、幼稚園チームは IFSW の退任会長に、彼女の名前を使わせてもらえないかと手紙を書いた。この幼稚園は現在、「ルース・スタークの希望幼稚園」と呼ばれている。詳細情報はその Facebook ページ（https://www.facebook.com/Ruth-Starks-Hope-Kindergarten）で入手可能である。金銭的なやり取りは一切なかった。

（第 1 章：ヴィラーグ・ヴィクトル訳）

第２章

亡命、トラウマ、刑務所、強制送還、大陸を越えて

ルース・スターク著

アリの物語 – トラウマに苦しんだ子ども時代

アリとの出会い

刑務所で私はガラス張りの小さなオフィスである囚人を待っている。身の安全のため、刑務官の指示に従ってドアに背を向けている。もしかしたら囚人は暴力を振るうかもしれない。リスクを嫌うこの世界では、私は素早く逃げなければならない。職員がどれだけ読唇術に長けているかはわからないが、これから会う囚人が語るトラウマ的な話を聴くためのプライベートな空間に私は最も近いところに身を置くことになった。

私はこの時間、これほどまでに疑惑の目で扱われるとはどういうことなのか、また、それが、尊厳と敬意を持って扱われるという残された感覚にどのような影響を与えるかを考えさせられる。人はさまざまな状況で環境に対応する。しかし、私たちの刑務所はしばしば、そのような状況に置かれる。絶望のどん底に突き落とされ、人と関わることがより難しくなる。私は、関わり合いの最初のルールは、相手が複雑な世界のどこにいるのか、そしてその環境を知ることだと考えている。

私は 22 歳で国外退去処分に直面しているアリという囚人に会いに来た。彼は入国管理局から私たちのコミュニティにとって危険な存在であると見なされた囚人である。彼の罪は 17 歳のときに 14 歳の少女と性的関係を持ったこととされている。二人は彼女が 15 歳のときに子どもをもうけたが、彼はその子に会うことは許されていない。インタビューの準備のために 4 時間かけて読んだ書類には、彼は狡猾で子どもにとって危険であり、再犯の危険性が高いと書かれている。

彼の弁護士は私に、彼の運命を決める法廷のための報告書を作成するよう依頼してきた。彼は 4 歳のときから住んだことのない土地に強制送還されるのであろうか、それとも、13 歳のときに人身売買された国に残ることが許されるのか。前科の性質上、彼は性犯罪者名簿に登録されなければならない。性犯罪者名簿に登録され、もし彼がこの国に留まるのであれば、一生警察に監視されることになる。

この報告書は公的資金から支払われるものであり、私は専門家の証人として公平な評価を下すよう厳命されている。法廷にはすでに入国管理局による事情聴取、刑事裁判所の裁判官による判決文、地方自治体の刑事司法チームのソーシャルワーカーが作成した判決前社会背景報告書、そして彼は再犯の危険性が高いとする仮釈放評価報告書がある。厳しい内容である。

アリが部屋に入ってきた。すぐに彼が怯えているのがわかった。初対面だ。とても落ち込んでいる。無力に見える。これからの 1 時間で、彼が現在置かれている状況の中で自分自身をどのように見ているのか、そして彼が何を望んでいるのかを理解する必要がある。未来に何を望んでいるのか。私たちは一緒に、彼が他の人びとや彼自身に与える可能性のあるリスクのレベルを評価し将来への道筋を探し見つけ出す必要がある。個人的には、彼になにがしかの希望を置いておいてあげられればと思う。

アフガニスタンから英国まで、大陸と危険な海を旅した一人の人間の悲惨な物語である。その中で明らかになったのは同伴者のいない庇護を求める子どもたちのための社会保護制度が、旅路にある多くの国において、ほとんど存在しないことだ。このことは今日の世界で「ひとりぼっち」であることの真の意味を再考することを求めている。

アリの子ども時代

私はアリに、彼がどのようにしてアフガニスタンの生まれ故郷から英国の刑務所で 6 年の実刑判決を受けるに至ったのか、その経緯を話してくれるよう頼んだ。アリは 4 歳のとき、タリバンから逃れるために家族に連れられてパキスタンに行った。逃走中、彼らは発見を免れるために死体の横に横たわらねばならなかった。彼は 11 歳になるまでパキスタンで家族と暮らした。アリは、両親や妹と過ごした幸せな子ども時代だと語った。それは一生分のように、そして痛ましいほどに覚えている幸せな子ども時代だ。そして突然それは終わりを迎える。地震で家族全員が亡くなったのだ。

家族生活の終わり、11 歳

アリの父親は路面店を営んでおり、一家の収入源となっていた。父親の従業員であったサイードが、家族が亡くなった後の 2 年間、彼を引き取った。サイードが結婚を間近に控えたとき、もうアリの面倒を見ることはできないと言った。サイードはアリをアフガニスタンに連れ帰り、二人は別れを告げ、アリはイラン、トルコ、ギリシャ、イタリア、フランスを経て、最終的にローリー車で英国にたどり着き、マンチェスターに預けられ、そこからスコットランドの都市行きのバスに乗せられた。到着後、バスターミナルで声をかけた見知らぬ男にモスクに連れて行かれた。

英国への旅はトラウマ的だった。過密状態のボートで海を渡るとき、人身売買業者は彼を棒で殴ってボートにとどまらせた。彼は、海を渡る際に他の亡命希望者 18 人が溺死するのを目撃した。フランスに着くと、人身売買業者は彼を性的虐待しようとし、アリはフランス警察に相談した。警察は彼をホステルに入れたが、アリは人身売買業者から居場所を突き止められ、旅を再開すべきだと主張されたため、その場を去った。アリの徒歩、車、船、オートバイを乗り継いでの旅は、困難で危険なものであった。トラウマとなった。今日、何千人もの子どもたちが国を越えて旅をし、同じような経験をしている。

これらの経験について深く話す時間はなかったが、重要だったのは彼にとっての適切な

時期が来ることを認めることだった、もしかしたら何年も経って、彼が安全で安心できる場所にたどり着いたとき、彼にとってこの旅がどのようなものであったかを分かち合える信頼できる人が見つかるかもしれない。そのとき私たちは、危険な旅に送り出される前に、何が彼を守る助けとなったかを彼から学ぶことができるだろう。彼は途中で安全や避難場所を探そうとしたこともあった。この怯えた少年が私たちのコミュニティの闇を通り抜けるとき、安全と保護を提供するために彼と向き合うことができた人物はいたのだろうか？

養護経験のある若者になる

アリは英国に到着したとき、「同伴者のいない未成年者」というレッテルを貼られ、「保護された子ども」となった。法律により、アリは 16 歳になるまで自治体の保護下に置かれることになった。自治体には、保護された子どもたちを 16 歳になるまで準備し、支援する義務がある。地元の自治体には、保護された子どもが 19 歳になるまで、あるいは状況によっては 26 歳になるまで、教育し、支援する義務がある。そのため、最終目的地の地元のモスクから連絡が入ると、彼は児童養護施設に保護された。市は法的に彼の「コーポレート・ペアレント」となり、ソーシャルワーカーは自治体に代わって事実上の保護者の役割を担った。この関係は、世界中の多くの国で再現されているが、子どもや若者の成長と発達に大きな影響を与える。擁護経験者の多くは、生まれた家庭にとどまる子どもは、「コーポレート・ペアレント」とまったく同じようには親を変えない、と言うだろう。11 歳のときから、アリには親がいなかった。

アリは、自分が「世話になった」年月の説明に迷っているようだった。彼にとっては、多くの人々に囲まれていながら、孤独を感じているようなぼんやりとしたものだった。基本的なコミュニケーション、言葉、文化の理解、お金、お店、パキスタンとはまったく違う。まるで一生分の時間のようであった。彼の周りの職員たちは、それぞれのシフトで働いていたが、国連子どもの権利条約の保護という点で、彼が権利として期待するような親としての経験は提供できなかった。

面接の前にこのようなトラウマを抱えた 13 歳の少年のニーズに対応するためのアセスメントや支援について、私はソーシャルワークの報告書を調べた。英語を話したり理解したりする能力の評価については、何も書かれていなかった。

アリが必要としているものは、児童養護施設の他の子どもたちと同じようなものだろうという思い込みがあった。彼らもまた、家族や親しい知人から重大な危害や虐待を受けているかもしれない。祖国や慣れ親しんだものすべてから、言語的、文化的、物理的な距離に苦しんでいるわけではないのだ。

報告書には、「社会的管理」とでも呼ぶべきコメントが数多く含まれていた。アリを学校に通わせること、入国管理局への対応、また、アリがケアに応えていないように見えたり、周囲に「なじめない」ことへの苛立ちもあった。

私は、アリがトラウマの旅から何を克服できたのかを理解するのに役立ちそうなアセス

メントを探した。彼のトラウマ的な旅の後、アリが自分の体験について話すのを聞いた人はいたかどうかを教えてくれるものを探した。そうした人はいたかもしれない。しかし、それは記録されていなかった。

同じような境遇にあった人たちの話を聞いていると、幼児期のトラウマについて話せるほど相手を信頼できるようになるには、何年もかかることがわかっている。トラウマ体験の親密な知識を開示するために不可欠な信頼を築くには、時間がかかるのである。アリに関連して、このことを考えた人はいるだろうか？トラウマに耳を傾けることは、ソーシャルワーカーにとって最も難しい仕事の一つであるが、関係を築くためには不可欠なことである。

アリの現在の機能、感情的・心理的年齢の評価、そして心的外傷後ストレス障害の評価、これらすべてが書類から抜け落ちているように思えた。ケアプランには、社会的管理、封じ込め、社会的統制が見て取れた。しかし、彼という人間、彼の生きた経験の詳細が欠けていた。

Who Cares? スコットランドでは、若者たちは、成長する過程でたった一度でも重要な関係を持つことが必要で、それだけで、自分自身を信じ、生きていくだけでなく、人生を楽しむことができることを理解するようになると言われている。その関係とはアイデンティティであり、自分自身を信じることである。

学校への復帰

13 歳になったアリは新しい学校制度をどのように経験したかを話してくれた。彼の英語力はとても限られていて、彼は仲間や大人とのコミュニケーションがほとんどなかった。彼は 16 歳まで学校に行かなければならない。パキスタンでは少なくとも 2 年間は学校に通っていなかった。彼は混乱していた。彼は教育に携わることができなかった。事実上、アリの学校教育はアリが、地震で家族を失った 11 歳の時に終わっていた。アリは違う教育を受けた。アリが受けた教育は、サバイバル教育だった。

ケア提供者、若者、学校間の関係は、共同設計と共同開発によって発展させ、肯定的な構成要素を認識することができる。例えば、アリの深い喪失感や死別感を認め、トラウマがアリの学習を妨げていることを認識する。皮肉なことに、刑務所の安全で安心な環境の中で、アリはようやく学習に取り組めるようになった。英語を話し、理解することを本当に学んだのはここ刑務所であった。

児童養護施設を去る

世界におけるアリの「孤独」は、アリの世界を形作った非常に複雑な環境を理解する鍵である。肯定的な構成要素を特定することは頻繁に報告される否定的な行動を理解し、評価することよりもはるかに難しかった。アリが 16 歳になる頃には、アリは児童養護施設から、より支援が行き届かない宿泊施設に移った。その背景には児童養護施設を卒業したという

ことがあった。彼の非順応的な行動が記録されていた。

アリはアパートの一室で、ケアワーカーにサポートされながら、他の 2 人の若者と共同生活をしていた。ケアワーカーは時々立ち寄り、予算管理や家財の管理、身の回りの世話といった実務的な支援を行い、場合によっては料理の仕方を教えることもあった。幼少期に極度のトラウマを負った若者であるため、この暗い部分を通して彼に協力してくれそうな人々との関わりはないように思われた。彼には安定したピアグループや家族からの支援もなく、正式な養育者からどのような支援があったかは不明である。

アリは、安全、安定、安心が確立されていない混沌とした存在だった。

地域社会での人間関係作り

冬だった。街の中心部にはアイススケートリンクがあった。若者たちが集まる自然な場所だ。彼らはタバコを吸い、一緒に時間を過ごしソーシャルメディアでコミュニケーションをとり、互いに惹かれ合う。彼らは互いに惹かれ合い、人間関係がうまくいかなかった現実や、幼少期に経験した重大な被害や虐待のトラウマ、彼ら自身のトラウマ的な物語の疎外感によって強化される。

アリはアイスリンクで 14 歳の少女と知り合った。二人は一緒に出かけるようになった、交際に発展しても避妊はしなかった。彼女は妊娠した。彼女の家族は怒った。アリには将来性がなかったし、アリは彼らの生活圏外の出身だった。彼らは警察に訴えた。アリは未成年だったため、犯罪を犯したとして起訴された。

アリには 16 歳以下のガールフレンドがいたことが明らかになった。3 人目の少女が名乗り出た。アリは彼女とはセックスしていないと言ったが、アリは他の罪状認否とともに有罪判決を受け、禁固 6 年の判決を受け、アフガニスタンへの国外追放が勧告された。

刑務所と強制送還

犯罪は確かに犯されていた。―アリは事実に異議を唱えることはできなかった。判決前報告書には、アリが英国の法的・文化的期待について理解しているかどうかについての言及はなかった。少女が 16 歳になるまで性的関係は許されないことをアリは理解していたのだろうか。自国ではもっと早い年齢で結婚できるのに。

英国で、無知か意図によって刑務所に入り、性犯罪者登録名簿の生涯メンバーとなり、そして今、4 歳のときに家族とともに逃げ出した場所に戻される。そこには家族も友人もいないという計画だったようだ。多くの国では、ソーシャルワークを含むさまざまな専門職の専門分化が進んでおり、その結果、さまざまなアセスメントが行われている、さまざまな関係者によって、さまざまな勧告がなされる。多くの異なる意思決定者に、すべての関係者が情報を提供する。アリにとっては宝くじである。このくじ引きは、深刻な人権問題を提起する、競合する人権のバランスも含めて。何が社会正義を達成するのか？被害者、加害者、子どもにとって？

彼は娘の写真を見せてくれた。世界で唯一生きている身内であり、有罪判決のために会うことを許されていない娘である。彼は泣いている。父と娘が関係を持つことは、書類上以外ではありえないだろう。

養護経験者の視点からの関係作り

養護経験者が人間関係を構築する上で何が有効であったかを議論する際、つまり満足と幸福へのより良い道をともに見出す過程において人々は、ソーシャルワーカーがそのトラウマに耳を傾けることができるかどうかを試している。その人たちはあなたが信頼できる可能性のある人かもしれない」と判断する最初の瞬間について説明する。それは一般的に、接触のかなり初期である。最初の印象は重要である。ボディーランゲージは言葉よりもはるかに表現力がある。話すセラピーに究極の解決策があると信じている人は言語能力を共有できない人の意見に耳を傾ける必要がある。なぜなら自分の旅路を注意深く見なければならなかった人たちは、話されない言語の専門家になるからだ。ハグは信頼を伝える最も強力な方法のひとつである。しかし時にそれは虐待の前兆となることもある。経験を積んだ専門家が判断し、合図を出す。

このケアから、経験豊かな人々は少なくとも 1 つの重要性を説明する。その人は、あなたが自分自身を信じる力を育むのを助けてくれる。それは、ただ生き延びるだけでなく、人生を楽しむことができるようになるために不可欠なことなのであるリソース不足について語るとき、重要な関係の代償は何だろう。それはとても個人的な贈り物である。

アリは？

刑務所でのアリとの 1 時間に及ぶインタビューに戻り、私たちは次のように締めくくった。アリが釈放されたとき、彼にとって、そして他の人々にとって、どのようなリスクがあるのかについて語り合った。釈放には 2 つの選択肢があった。一つは英国に残るというもの、2 つ目はアフガニスタンに強制送還されることである。

刑務官がドアをノックした。時間切れだった。

専門家レポート

ある人物の生涯の一瞬のために、私たちは非常に辛い道を共に歩んできた。私は、アリの将来を左右する決定権者のために、公平な報告書を提出しなければならないと思っていた。

報告書は複雑さを伝える必要があった。アリが歩んできた道のりの大半を構成する、さまざまな要因が相互に関連し合うマトリックスであることを伝える必要があった。これは、IFSW の倫理原則の声明に明記されている専門家としてのコミットメントに基づくものである。これには、人権や社会正義に取り組むだけでなく同じように重要なのは、自分の居場所を求めている仲間を認識することである。彼の目標は、人生を支配してきたトラウマの向こう側に到達することである。

競合する要素を整理すると、法廷の観点からは、重要なのは再犯の危険性であった。犯罪の背景を理解すること、人間関係を理解することが重要である。

実践における検証

ソーシャルワーカーは、本人の話を鵜呑みにするだけではない。意思決定のために専門的な報告書を提出する場合、検証は非常に重要である。熟練した面接とアセスメントを裏付けるために、リスクアセスメントツールが使われることが増えている。インタビューが進むにつれて、アリが自分の経験について語るのを聞きながら、もっと長い間アリを知っている他の人たちとのインタビューの後で、確認しなければならないと思った。

ある報告書では、アリは加害者としての自分の役割に集中するのではなく、被害者としての役割を担っていると述べられている。通常、被害者意識は再犯の評価において重要な要素である。しかし、彼は他人の虐待行為の被害者であり、幼少期には重要な人間関係がなかった。これもリスク評価の重要な要素である。彼は心に傷を負い、感情的・心理的発達が損なわれている。

高リスクの指標として知られているこのような状況下で、私は、なぜこの人物が他者からなされた評価に違和感を感じたのか、その理由を理解する必要があった。この人物は国外退去を求める書類に書かれているような性犯罪者である。このような状況においてこそ、このようなリスク評価ツールの根拠となる研究を知り、この状況に適用できるか確かめることが重要である。

同僚とチェックアウト

刑務所を出た後、私はアリが最初に送られた刑務所で出会い、一緒に働いていたソーシャルワーカーを探し出すことができた。彼女は 1 年半にわたって彼と働いていた。彼女は最初のアセスメントで、比較的早く異常がある可能性を察知した。彼女は、犯罪が起こった背景と、彼の情緒的、心理的機能を再評価しはじめたことを教えてくれた。これは、私が初めて出会ったアリに耳を傾け、彼と協力関係を築いた人だった。彼らは、アリが他人に与えるリスクを理解していた。

彼女が取り上げた質問は、彼が若い女の子を食い物にする犯罪者なのか、それとも、新しい国、新しい文化、新しい法律、そして信用できるかどうわからないような知らない人々と闘っている、傷つきやすい若者なのか、ということだった。彼女は数カ月かけて、彼は以下のような人物だと結論づけた。純粋に自分が被害者だと感じている若者。その若者は非常に傷つきやすい。彼は恐ろしい体験から生き延び、表面的な知り合い以上の社会的関係を築くことができなかった。

彼は 11 歳のとき以来、家庭生活を知らなかった。彼女は、彼の犯罪は感情的、身体的な温もりを求めた結果だと結論づけた。

このような帰属意識やアイデンティティの欠如は、これまでの報告書にある他の要因と同様に重要であり、リスク評価ツールの結果とともに考慮される。刑務所でのグループワークやソーシャルワーカーとの個人セッションでは、アリが少女に対して略奪的であったという証拠はなかった。

彼はおそらく、社会的に彼の年齢よりも低いレベルで機能している。英国の異なる法律や文化的規範に関連して、まだ学ぶべきことがある。

刑務所への面会者をさらに調べると、アリと同年代かそれ以上であることがわかった。女性たちは皆、アリより年上だった。彼女たちの関心は性的搾取に関与しているというよりも、むしろ人身売買の被害者である脆弱な若者を心配していたようだ。

刑務所のソーシャルワーカーとの仕事は、アリにとっておそらく人生で唯一のことだった。アリは自分の複雑な人生を理解し教育への参加や、自分の行動から来るものを理解することを含め、アリが変化を遂げるのをサポートする他者と重要な協力関係を築いた。彼は、他の若者が友人であっても、セックスをするのであれば、法律上、年齢が重要であることを痛感した。

刑務所のソーシャルワーカーと働く同僚との関係、情報処理の一部を迅速に進めることができた、審判で審理されることを期待した分析に迅速に移行することができた。

法廷が最も懸念したのは、彼が他の若者に与えるリスクだった。

研究は役立つか？

刑事司法ソーシャルワークや法執行機関では、標準的なリスク評価ツールを開発し、使用するケースが増え、再犯の可能性を判断するためにリスク評価ツールが開発された。これらのツールの洗練度はさまざまである。ツールを開発するためにどのような研究が行われたか、また、どの国、文化、調査サンプル、司法管轄区がそのツールの背景となったかにもよる。その再犯のリスクを評価するための政府ガイダンスとこのツールは判決時およびアリの仮釈放申請時に使用された。このツールは質問票への回答を点数化したものである。この評価ツールは、1990 年代にスコットランドの刑務所で行われた男性に関する研究に基づいている。これは非常に優れた研究成果である。私は、白人のスコットランド人男性性犯罪者のアセスメントに、このツールをよく使ってきた。

しかし、アリが生きてきた状況との関連性はほとんどない。もちろん、このツールの使用については、政府からのガイダンスにこれがすべてのケースに適用できるものではないことの注意書きがある。ガイダンスの著者との話し合いで、私はアリのケースは、この注意書きが適用されるべきケースのひとつであったと理解している。この裁量は評価ツールの限界を理解することなく、採点メカニズムを適用した報告書作成者には関係ないと思われた。

ソーシャルワークの研究は、問題の規模について私たちに教えてくれる。このような深刻な問題が人々にとって存在することを補強する一方で、私たちはこの知識を、私たち自身の地域社会で見たり経験したりしたことと照らし合わせる。注意深く見れば、私たちは日常生

活を送る中で、影に隠れて生きている人々を見ることができる。調査によって、私たちの見解が確認されたり、明らかになったりすることはよくある。しかし、それが新しい情報であることは稀である。課題はこの情報を受け止め、私たちを取り巻く環境や仕事の状況に照らし合わせて考えることである。

これは、ソーシャルワークの研究と実践の関係の重要性を示している。実践家は、ソーシャルワーク教育で使用されている理論やモデルが、どのような根拠の上に成り立っているのかを理解できるレベルの教育を受けている必要がある。実践家は、人々の人権に影響を与えるような決断を下す手助けをするとき、彼らが使っている情報が誠実なものであることを知る必要がある。彼らはその情報を賢く使う必要がある。

研究者は、研究内容やその実践への応用を検討する際に、生活体験を通した専門家や実践者との共同設計の中で質問の組み立てを行うことで、研究者や実務家を支援することができる。このような研究における共同制作が開発されつつあり、今後の実践の高度化は政策や社会保護制度に発展させる前にその研究を評価し、変革的な変化を生み出す。

競合する人権、社会的保護と変革のバランス

ソーシャルワークの課題のひとつは、被害者であると同時に加害者でもある人々との協働である。私たちの社会構造の多くは、法律のように、個人がどちらか一方であることに焦点を当てている。これは、ソーシャルワーカーが競合する人権のバランスをとることに従事する典型的な例である。ソーシャルワーカーの役割はしばしば、人はもっと複雑であり、私たちは皆、ある時は被害者であり、ある時は加害者である可能性がある、と主張することである。人間には欠陥がある。私たちを私たらしめているこのカクテルは、私たちがどのように人間関係を築き、持続させていくかにまで波及していくのである。

社会保護制度はしばしば、社会的弱者のニーズを満たすために考案される。IFSW の政策ペーパー『社会保護制度におけるソーシャルワークの役割』（2016 年）は、依存を生み出すこのモデルに挑戦し、変革的な変化を生み出す社会保護制度を発展させるための言説を始めている。そのビジョンとは、人々が脆弱な状態から、コミュニティに参加し貢献する状態へと移行することである。このビジョンを実践するためには、ナラティブとソーシャルワークの文化を、共同制作のモデルへと変えることが必要である。それは、一人一人に示されるべき独自の尊厳と尊重を認識し、ホーリスティックな環境にある私たちの世界の複雑さを認識することである。

もしソーシャルワークが、人々が自分の人生に変化を見出すのを真剣に支援するものであるなら、私たちは、社会保護制度がどのように私たちを助けてくれるのかを批判的に検討する必要がある。私たちは、実に多様な人生経験を持つ人々と出会う機会に恵まれている。彼らは彼らの旅路を、私たちが知る以上に知っている。それは彼らのものなのである。あらゆる出会いにトラウマが伴うことは私たちのすべての現場の持つ要素である。アリにとっても同様だ。

しかし、ソーシャルワーカーの役割は、本人と直接関わるだけでなく、本人に判断を下す意思決定者、社会行政を改善しようとする政策立案者とも関わることである。この役割にはアドボカシーが不可欠であり、そのためには関係構築におけるさまざまなスキルが必要となる。

ソーシャルワークのジレンマ

トラウマ、突然の人間関係の破綻、虐待、暴力、貧困、思春期に伴う成長の痛みは、自分が何者であるかを知ること、あるいは自分が自分であるというそれ自体の権利によって価値ある人間であるという信念を持つことが自分の周りにいるすべての人々に対する無力感、堕落、恐怖につながるという複雑な混乱を招く。なぜなら、他の生きている魂を信頼する方法を知らないからだ。トラウマを経験した他の若者の証言によると、他の人との接触を確立し、人間関係を試し始める第一歩として、心の奥底にある秘密を分かち合うのは、同じような境遇にある他の若者であることが多い。彼らの励ましがあって初めて、その秘密は大人や公的立場の人々に共有されることも多い。しかし、これには時間がかかる。人間関係は慎重に築かれていく。自分の身に起こったことの専門家であるその人の生きた経験は、早すぎる過剰な開示から彼らを守ってくれるのだ。

国家の養護義務。

法律は、しばしば私たちの考え方を形成し、公的なケアを受ける子どもや若者との関係の枠組みを作る。この場合、同伴者のいない未成年者であったアリは、市町村から「被保護児童」として、助言、指導、16 歳の誕生日以降に保護されなくなった若者のため援助（「アフターケア」）の提供を期待できる。地方自治体には、19 歳までこの支援を提供し、26 歳の誕生日まで、またはそれ以降も自治体の判断で提供する義務がある。

政府の公式見解は、自治体で働くソーシャルワーカーに割り当てられた仕事の現実を覆い隠している。緊縮財政の中で、「保護された」子どもや若者のニーズを満たすため子どもや若者のニーズに応えることである。

しかし、多くのソーシャルワーカーも、仕事量の多さ、長時間労働、高度に複雑な状況に対する限られた支援によって引き起こされるストレスを認識しているはずである。デフォルトの立場は、しばしば社会管理、封じ込め、社会統制に近いソーシャルワークのスタイルになる。アリの場合、記録では、彼を学校に通わせること、彼の入国ステータスを明確にすること、そして 16 歳以降の彼を支援するための予算を捻出することに集中していた。

養護経験者と弁護士との間でますます交わされるようになり、ソーシャルワークの実践にも影響を及ぼしている会話がある。市町村が政府を代表して、養護経験者に対するケアの義務を果たしているかどうかということである。訴訟や公的な調査は、リスク回避的な実践を生み出し、チェックボックス評価を助長する。

やっと……

この 11 年間、彼の人生の半分はまったくの孤独だった。私はよく思う。彼に何が起こったのか。私たちソーシャルワーカーは、たとえ短期間であっても、人間関係が私たちに永続的な影響を与え、世界の見方を変えることがあることを、自分自身や他者に認めているだろうか。私たちは一緒に働く人々から学ぶことが多い。立場や専門的な教育が、優越感や、自分は何でも知っているという信念を助長することもある。しかし、謙虚さと内省と傾聴のスキルはとても重要である。

強制送還を求める内務省に対して、一連の重大犯罪があった。ソーシャルワーカーとして、私は犯罪が行われたことを理解していた。しかし、社会正義、競合する人権の尊重、そしてトラウマを抱えた若者の生活の複雑さを理解した上での文脈でとらえられる必要があった。

追記

2018 年 11 月、英国はキンダー輸送に乗せられた 1 万人の子どもたちが、ドイツから英国に入国することを許可した法律の 70 周年を迎えた。この 70 年間、大量の人の移動、人身売買、奴隷制度は続いてきた。世界的に見て、私たちは非効率的な社会保護制度を発展させてきた。それは、人々がコミュニティに帰属し、価値ある存在だと感じられるために必要な変革をもたらすことに失敗している。

ソーシャルワークにソーシャルを取り戻し、重要な人間関係がなければ、ソーシャルワークに着手することさえできないことを認識する時なのだろうか。

（第 2 章：桂良太郎訳）

第３章

私には今、自分自身のアイデンティティがある

「私は自身の名前で知られ、このコミュニティの重要な一員として評価され、受け入れられている」 – シャクンタラさん、インドの農村

シージャ・カララム、サンギータ・ジョージ、木村真理子、ヴィクター・ポール著

コンテクスト

歴史的にも宗教的にも、インドの女性は家族への貢献から切り離された個人として描かれることはめったにない(Rajkumar、2000)。女性のエンパワメントと経済発展は、さまざまな側面で相互に関連している。開発は、女性と男性の間の不平等を減らす上で重要な役割を果たした。女性のエンパワメントは常に、国の発展に有益であると考えられている。資源の利用可能性が増加するにつれて、女性の脆弱性が軽減された(Duflo、2012)。インドのような発展途上国の女性の地位を考慮しながら、シャクンタラさんの歩みは、バンガロールのCHRIST(大学とみなされる)センターの社会活動センター(CSA)のコミュニティ開発プロジェクトにおける女性のエンパワメントを示しており、ボランティアを促進し、開発イニシアチブを通じて社会的に責任のある市民として学生が成長できるようにしている。

2003 年から 2010 年にかけて、社会活動センター（CSA）は、カルナタカ州ベンガルール農村地区ホスコテ・タルクのジャデヘナハリ・ホブリにある 14 の村を対象にコミュニティ開発プロジェクトを実施した。このプロジェクトの主な焦点は、5 つの主要分野における子どもと女性のエンパワメントを図ることであった。

1. 幼児期のケアと栄養、
2. 子どもの教育の強化
3. 地域の健康と衛生
4. 生活向上
5. コミュニティベースの組織（CBO）の促進。

プロジェクト介入の開始時、シャクンタラさんは産前ケアと産後ケア支援プログラムの受益者の一人であった。

アマーティス・セン（1999）の言葉によれば、開発とは「自由」を増やすことである。

この章は、エンパワメントエンパワメントによって社会経済的障壁が取り除かれ、個人の成長を最大限に促進できる仕組みについて取り上げた。現代の女性に選択の自由があるかどうかを探り、コミュニティ開発プロジェクトに積極的に参加することで、シャクンタラさんのような人々をエンパワーできるかを説明している。エンパワメントのプロセスは複雑で、さまざまな関係性の中で行われている。エンパワメントを育むというこの複雑な作業には、意志とモチベーションが必要だ。この物語は、シャクンタラさんの意志とモチベーションが、どのように彼女を力づけたかを示している。

背景

シャクンタラさんは、1982 年にインドのタミル・ナードゥ州ホスールのバッデパリ村で、中流の下層階級の農家に生まれた。彼女はホスールのバグルにある公立学校で教育を修了し、優秀な成績で 10 年生を修了した。　彼女は学業を続けたかったが、両親の望みで見合い結婚によって彼女は人生のパートナーを見つけたため、それはできなかった。1998 年に彼女は夫のいるホゲートに移り、すべての女性が期待されるような普通の生活を始めた。彼女は頭が良く、良い成績を上げる能力があったにもかかわらず、学業をあきらめていた。2003 年まで彼女は専業主婦として 3 人の子どもの母親となり、家の中に閉じこもり、彼女の世界は家族だけに限られていた。彼女の義理の両親は保守的で、牛を放牧するか水を汲むとき以外は外に出ることを許さなかった。

シャクンタラさんが外の世界や地域と交流していたのは、女性たちが集まって牛の放牧中に雑談をしていたときだけだった。2003 年から 2004 年にかけて、このような会話の中で、他の女性たちは、地元の自助グループを見つけてとても助かったと話し始めた。若いシャクンタラさんはすぐにその活動を良いと思ったが、自分の大胆さに対して義理の両親がどう反応するかは重々わかっていたため、他の女性たちのグループへの参加には応じなかった。彼女は他のメンバーよりも教養があったので、彼らは彼女にグループへの参加を勧め続けた。グループのメンバーの何人かは彼女に代わって義理の両親に近づいたが、両親はシャクンタラさんが自助グループに参加することを拒否した。シャクンタラさんがグループに参加することを許可されたのは、彼女の父親が彼女を訪ね、義理の両親と提案について話し合った後のことであった。もちろん、家族の価値観を守るための規則や制限がいくつかあった。家族関係やさまざまな期待を調整していくには、時間と忍耐が必要だった。

その後何が起こったか?

シャクンタラさんは、CSA が村で推進している自助グループに参加した。彼女はグループで最も活動的なメンバーの 1 人となり、プロジェクト・スタッフが実施するトレーニングや会議に必ず参加した。中等教育修了証書を取得していたシャクンタラさんは、プロジェクト・スタッフからプロジェクトの健康管理の役割を担うよう勧められ、彼女は職務をうまくこなした。プロジェクトで得た経験、スキル、知識により、彼女は地元のプライマリ へ

ルスセンターの公認社会保健の活動家として選ばれ、コミュニティのすべての保健関連の任務に参加した。自助グループの管理、マイク ファイナンス、銀行との連携、問題解決スキル、簿記、さまざまな政府および民間サービス・プロバイダーとのネットワークに関する知識とスキル等が、彼女がすべてのタスクをよりうまく遂行するのに役立だった。CSA が彼女の生活にもたらした変化について尋ねられたとき、シャクンタラさんは、人生の変化を達成するために役立ったものについて、自分自身の評価を述べて次のように言った。

私は３人目の子どもを妊娠していて、とても弱っていたが、CSA は栄養のある食べ物で私を助けようと積極的に支援し、他の 2 人の子どもの教育も支援してくれた。何よりも、今では自分のアイデンティティを持つことができるようになった。

これは、仕事上の関係とその関係から生まれる相互の信頼と尊敬がなければ達成できなかった。

信頼関係を通じて持続可能性を構築する　プロジェクト期間の終了時、2010年６月にCSAが支援を引き上げることを決定したとき、CSA は SHG(自助グループ）から 15 人のグループリーダーを選出し、さまざまな管理スキルを訓練し、自分たちだけでプロジェクトを継続できるように責任を引き渡した。当初は苦戦していたが、今では着実に力をつけている。自助グループの連盟は協同組合法に基づいて Souhardha として登録されており、シャクンタラさんはその執行委員会メンバーの 1 人で、書記の役職に就いている。彼女はコミュニティ・オーガナイザーの立場でプロジェクト全体を管理する責任を負っており、連盟基金から毎月給与を受け取っている。

現在、彼女はプロジェクトの対象となる 12 の村すべてを訪問し、コミュニティと非常に良好な関係を築いている。彼女は、パイロット・プロジェクトと持続可能な開発を開発する上での関係の重要性をよく理解している。彼女は、自助グループ、クラスター・レベルの活動、児童活動センターなどの機能を定期的に監視している。彼女はライン部門と非常に良好な関係を築いており、貧困層に利益をもたらす計画を導入している。これらのスキルの中でも特に重要なのは、経済的安定を確保するスキルである。シャクンタラさんは、プロジェクト・ファンドからのマイクロファイナンス助成金を体系的に管理および制御している。彼女は CSA の撤退後、プロジェクトの柱となり、CSA はプロジェクトを持続可能なものにする上での彼女の効果的な役割を称賛している。

シャクンタラさんはコミュニティの重要なメンバーであり、CHRIST（大学と同等）と社会活動センターの学生とスタッフの間では、彼女の心温まる物語と実績はよく知られている。彼女は言った、

何よりも、私には今では自分のアイデンティティがある。自分の名前で知られ、このコミ

ュニティの重要な一員として評価され、受け入れられている。家族の中でも、料理をしたり、洗濯をしたり、みんなの命令に従うだけの者としてではなく、尊敬の念を持って見られるようになっている。

戻って勉強したいと思った日もあったが、今、村は私にパンチャーヤット（地方自治体）の役職を与えてくれた。私はカースト差別の偏見から逃れることができ、充実した気持ちだ。私のエネルギーは、家族、村、コミュニティの変革に注がれている。人々は私の言葉を信じ、アドバイスを求めた。私はもう、声を上げることができない追い詰められたティーンエイジャーではない。CSA とそのボランティアがいなかったら、これらすべては夢だった。

自己効率感は、シャクタラスさんが村外の人や上位の権威者とコミュニケーションをとる際の活力と、特に子どもに対する家族としての責任を果たす能力に対する自信を反映している。自分への信頼が、彼女が日々の課題に立ち向かう力となった。

家族以外の人々との交流によって彼女は強い女性となり、決意と活力に満ちた女性になった。

専門的な実践とサービス提供に関するメッセージ

自助グループとマイクロファイナンスは、インドの農村部の多くの人々の生活に影響を与えている。シャクンタラさんは、こうした取り組みの生きた事例だ。経済的自由が制限された（というよりは自由がない）少女として扱われていた状態から、何百万ドルもの資産を扱い、地域活動に積極的に関わり、中小企業を促進し、さらに多くの女性をエンパワメントに導く女性へと移行したことは、非常に注目に値する影響だ。

シャクンタラさんは、村の女性とそのコミュニティの発展において、非常に数少ない力を持つ女性の一人であり、模範的な存在だ。夫の役割も変わり、夫は妻の生涯にわたる責任を高く評価し、何の反対もなく仕事に就くことをサポートしてくれた。彼女は、CHRIST(大学と同等)の学生たちに、プロジェクトの活動、戦略、ネットワーク作りと連絡、資源活用について話し、学生の農村部のキャンプの調整を行っている。

シャクンタラさんは、今や、最も疎外された家庭と指定カースト（ヒンズー社会の最下層）出身の女性であることを誇りに思い、社会における自分の地位が劇的に上がったことを涙ながらに語った。政府機関や銀行の職員が自分を「マダム」と呼ぶとは想像もしていなかった。しかし、彼女は懸命な努力と人脈作りでこれを成し遂げた。コミュニティのメンバーは彼女を「アッカ」（姉）と呼び、それはコミュニティ内での深い尊敬のしるしである。彼女の威厳ある声は、他のリーダーやメンバーに、仕事に非常に積極的かつ誠実に取り組ませている。彼女は CSA と連盟の架け橋となり、村で実施されたすべての開発活動について報告している。

これは、CSA プロジェクトの持続可能な開発介入に関する成功事例の１つだ。マイクロファイナンスに基づくプロジェクトは、経済的に貧しい多くの女性を社会の主流へと導い

た。社会、コミュニティ、家族における彼女たちの地位は変化した。SHG について知らなかった多くの人がチームリーダーになり、今ではコミュニティの他のメンバーに影響を与えている。

シャクントラさんの話は、家族のサポートが大きな影響力を持つことを思い出させてくれた。特に夫のサポートは、SHG メンバーの人生における成功の大きな要素と考えられている。成功の原則は、基本を正しく行い、それを習慣にすることだ。この原則は、SHG に参加し、権限を与えられた農村部の女性の大多数によって支持されている。農村女性の権限拡大により、伝統的に「経済的に貧しい」とみなされてきた農村女性に対する見方が変った。彼女たちはそのレッテルから抜け出て、今ではそれぞれのコミュニティの経済開発プロジェクトの管理者となっている。

CSA は、ホスコテ、コラー、バンガロール都市部、その他の州の多くの村でコミュニティベースの開発プロジェクトを実施している。彼らは、地域住民が自らの問題に立ち向かい、自ら見つけた資源を通じてそれを克服できるよう力づけることに重点を置いている。
シャクンタラさんのような女性たちは、隠れた潜在能力を発揮し、地域社会に貢献し、多くの人々の生活に影響を与えている。ほとんどの女性は、大胆なことをして家族に迷惑にならないよう、家にいなければならないと考えている。男性だけが社会の積極的な参加者であるべきだと考えることが多い。しかし、女性たちは社会に出なければならない。そうすれば、家族、村、地域社会を変えることができ、最終的には国全体を変えることができるのだ。シャクンタラさんは次のように説明した。

女児も教育を受けなければなりません。女児には国を発展に導く特別な力と可能性があるので、女児は進歩しなければなりません。

インドでは、女の子は重荷とみなされ、社会がすでに男児と女児の地位を区別している世界に私たちは住んでいる。こうした固定観念と実用主義は、社会における女性の役割を特定する上で重要な役割を果たしている。すべての女性は貴重であり、あらゆる社会に活気をもたらしている。女性は誰からも同じように尊重されているわけではない。女性が属する各コミュニティに関連する文化的および伝統的な儀式の複雑さが、社会から疑問視されている。女の子が直面するスティグマと差別は、多くの論文で大きく取り上げられてきた。

シャクンタラさんは、インドの田舎に住む多くの女性と同じプロフィールを持っている。女の子は家族にとっての贈り物だ。家族は、彼女の感情が家族、特に家族全員の幸福につながることを心から期待している。彼女が結婚すると、シナリオは変わり、彼女は別の家族に移り住み、貢献し、感情を他の家族に広げる。彼女が自分の家にいるか、義理の両親の家にいるかに関係なく、女の子の献身は注目に値した。家にいる女性は常に敬意を持って自分の資源を出し惜しみしない。大多数の女性は家族のために現実的に考え、人生のあらゆる困難に耐え、それに立ち向かっているが、パートナーから最も認識されていない。感情的な人間

である彼女たちにとって、サポート、励まし、そして大切な人の存在は、彼女たちの性格に大きな影響を与える。彼女たちのやる気を最大限に発揮するには、エネルギーが必要だ。このエネルギーは、彼女の周りの人々によって広められている。

シャクンタラさんは、自分の成功につながる環境を周囲に築くことができた。夫と子どもたちの力強いサポートは、彼女の人生における前向きな成果の１つだ。農村の女性は、多くの場合、自分の家族の状況によって制約を受けた。シャクンタラさんの場合、彼女は物事を注意深く学び、実践する意欲を持っている。村を訪れた人々は、シャクンタラさんが人生の課題に立ち向かう勇気のある女性であるという印象を持って帰って行った。彼らの多くは、彼女を女性のエンパワメントに関する生きた手本として認識した。書物から女性のエンパワメントのイメージがつかめるかもしれないが、シャクンタラさんとの交流によって、女性がエンパワメントされる方法についてより充実した、より完全なイメージが得られる。彼女はここで歩みを止めなかった。

彼女の村の多くの農村女性が彼女の道をたどり、彼女は今やそのコミュニティの全員を率いている。長期的には、そのコミュニティは、女性たちがコミュニティの発展、特に経済発展に力を与えられる場所として認識される。コミュニティでは、技術と専門知識を養うために、さまざまなトレーニング・プログラムが組織されている。家の四方の壁の外の世界に対する認識は変わった。それは違っていて、素晴らしいものだ。

人が暮らす環境は、近隣や地域社会における人間関係に影響を与える。特に女の子にとっては、これは大きな意味を持つ。貧困の女性化は、女性だけでなく、その子どもたちにも関係している。ソーシャルワーカーの役割は、我が国の農村部の女性に働きかけ、彼女たちの生活に変化をもたらす手助けをする上で重要だ。

結論

シャクンタラさんのような励ましを必要としている女性は、我が国にもっとたくさんいる。多くの女性が自分の能力を証明する機会を望んでいる。シャクンタラさんのような女性がもっと多く現れ、社会の中でより輝かしく効率的なコミュニティを育んでくれることを願っている。この世界には、シャクンタラさんのような、決意と献身を持って働き、同時に家族の幸福を犠牲にしない女性が必要だ。彼女はまさに学ぶべき模範だ。この点での CSA の支援と努力は計り知れず、感謝すべきだ。この成果は、女性があらゆるレベルの意思決定に全面的に関与することが基本的人権であることを反映している。しかし、女性のエンパワメントは機会とチャレンジにも関連している。一家の主人は、家庭内で女性に自信を与えるかかどうか、金銭に関する話し合いへの関与から女性を隔離するかどうか、において重要な役割を果たしている。家父長制の家族制度のもとでは、家父長制でない制度のもとの女性よりもエンパワメントが難しいと思われる。

女性のエンパワメントは、女性自身に焦点を当てたものではなく、家族全員の幸福に焦点を当てたものだ。エンパワメントとは、目標を達成する力だ。各個人はユニークで、能力を

持っている。その才能を特定し、奨励するには、社会全体で時間が必要だ。私たちの環境は、私たちの周りの各人の生活に大きな影響を与えた。多くの場合で、身近な関係からの肯定的な力は、個人のモチベーションレベルに大きな影響を与えた。これは、次世代のエンパワメントに責任を持つすべてのリーダーが真剣に検討する必要がある領域だ。努力に対するささやかな感謝の気持ちは、多くの場合、家族、仕事、社会にもっと貢献しようという自信を与えるのに十分だ。個人の努力を尊重し、称えることは、彼らの努力を継続させる。

女性のエンパワメントは、社会経済の面での社会の発展を示している。女性のエンパワメントを通じて、男性と女性の両方が質的にも量的にも社会の発展に貢献していると私たちは信じている。シャクンタラさんの章では、社会におけるジェンダー関係とジェンダー役割を評価するために、家族、世帯、能力、社会レベルで私たちが用いる方法は、女性のエンパワメントの程度をどのように測定できるかを説明している。多くの女性が自分の家の四方の壁の中にとどまり続けているが、彼女たちは社会の多くの生活に影響を与えており、中には四方の壁の外で行動することで目覚ましい貢献をした人もいる。これらの女性たちは生涯を通じて常に他の人に刺激を与えてきたが、シャクンタラさんもその一人だ。

この章は、バンガロールの CHRIST（大学と同等）社会学および社会福祉学部のメンバーと、IFSW アジア太平洋 2014-18 の会長によって書かれた。

シージャ・カララム、ソーシャルワーク准教授、インド・バンガロール
サンギータ・ジョージ、 ソーシャルワーク修士課程の学生、インド・バンガロール
木村真理子、ソーシャルワーク教授、日本
ヴィクター・ポール、インド・バンガロールのソーシャルワーク教授

（第３章：加藤純一訳）

第４章

社会的養護の体験、人間関係、若者の通過儀礼

ルース・スターク著

国家による家族生活への介入が世界中で行われている。

国連子どもの権利条約のような国際条約は、どのような場合に国家が家族生活に介入すべきかを定めている。本章では、危害、ネグレクト、虐待からのケアと保護にまつわる、複雑な関係と倫理的ジレンマを検討する。

コーポレート・ペアレントの役割

親が子どもの面倒をみられないとき

第９条（親からの分離禁止）

1．締約国は、児童がその父母の意思に反してその父母から分離されないことを確保する。ただし、権限のある当局が司法の審査に従うことを条件として適用のある法律及び手続に従いその分離が児童の最善の利益のために必要であると決定する場合は、この限りでない。このような決定は、父母が児童を虐待し若しくは放置する場合又は父母が別居しており児童の居住地を決定しなければならない場合において必要となることがある。

国連子どもの権利条約（UNCRC）

国家は多くの場合、第９条の責任を自治体や NGO で働くソーシャルワーカーに委任する。クリスの物語は、世界のいろいろな場所で聞くことができるだろう。法的権限を人権の原則が満たされるように介入させることがソーシャルワークの役割であり、家庭生活のプライバシーを保護し尊重する義務が含まれる。実践者は複数の業務を同時にこなす中で多くのジレンマを抱え、バランスを取ることを求められる。

コーポレート・ペアレントという概念は、国家が子どもに対して責任を持つことに由来する。ケアを経験した者にとって、これは匿名の役割であり、愛が重要な家族とはかけ離れたものに感じられる。UNCRC の前文には次のように書かれている。

児童が、その人格の完全なかつ調和のとれた発達のため、家庭環境の下で幸福、愛情及び理解のある雰囲気の中で成長すべきであることを認め、

（UNCRC 前文）

愛される権利

愛は私たちすべてにとって重要なものであるが、子どもたち、若者たちにとっては特に重要である。それは、これがなぜ子どもの権利条約であるのかの理由でもある。愛は情緒的な幸福（well-being）を支え、人間関係を築き、それを維持する能力を養うために不可欠なものである。

生まれた元々の家族の中で世話をしてもらうことが出来ず、他の人たちと生活することを強いられる人もいる。このような環境では重要で意味のある別の人間関係が発展することも多い。

こうした人間関係は、子どもがその子にとって新しい環境におかれているとき、その子どもの周りにいる専門職の人たちにはすぐには見えないかもしれない。しかし意思決定者に助言をする重要な役割を担っているのは多くの場合専門職である。

これは、社会的養護を受けた経験のある子どもと、生まれた家族と暮らす子どもとの直接的な違いである。重要で意味のある人は、里親、専門職、ケアワーカー、児童養護施設の調理担当者かもしれない。仲間や、学校でできた友だち、学校にいる子どもの世話をする人かもしれない。誰であれ、若者は誰を信頼するかの選択を自分でする。

若者の意思決定は、誰にもコントロールすることのできない、かけがえのない領域である。社会的養護の経験者（care experienced people）が説明するように、それぞれの人間関係の質が重要な要素であり、必ずしも量ではない。人間関係の質は、一人ひとりの尊厳と尊重を深めることから始まり、信頼できる重要な関係へと発展していく。

思いのほか多くの社会的養護経験者がその後の人生の中で、居所が変わることでさらなる人間関係の喪失に遭遇すると話すだろう。このような制度的虐待はしばしば情緒的心理的な傷つきを引き起こし、個人は長年にわたってそれを抱えもつことになる。児童虐待に関する調査や子どもの死亡に関する調査には多くの社会的養護経験者の証言がある。

若者はみないくつもの経験をし、そこで誰を信頼すべきか学ぶ。それは彼らの成長の一部であるし、彼らがリスクを管理する方法を学ぶことでもある。私たちが「最善の利益」という原則の下で下す決定は、子どもが生活し成長している環境の複雑さだけを反映すればよいというわけではない。重要な人間関係を不必要に中断することが成長に悪影響を及ぼすという理解を加味する必要がある。子どもから大人への感情の旅路では、自分の将来のために何が最善と考えるかについての彼ら自身のビジョンと選択が含まれなくてはならない。

クリスの物語

クリスは 15 歳半。彼女は自分自身を危険にさらし、夜遅くまで外出し、年上の人たちから性的に搾取され、ソーシャルメディアの使い方にもリスクがあると判断されたことから、ここ 4 年間を過ごした里親委託から最近移動したばかりである。

思春期から大人への移行は、国によって異なる年齢で起こる。社会的養護を経験した若者にとってそれは同世代の仲間よりも年齢的に早いことが多い。このケースでは 16 歳、学校

を離れる年齢である。社会的養護の経験のある若者という立場から、彼女の通過儀礼は間近に迫っていた。彼女は私に、怖くて心配だけど、里親委託先にいる彼女のまわりのすべての人の中で、誰に相談したらいいのかわからないと言った。なぜこのようなことになったのか。

クリスが初めて里親のもとに預けられたのは赤ん坊のときで、生後 18 カ月で母親のもとに戻った。彼女の兄も同じ里親に委託されたが、彼はそこで過ごし、家に戻ることはなかった。クリスが 11 歳のとき、両親のアルコール依存と家庭内暴力のために、彼女がネグレクトされているのではないかと心配された。彼女は、UNCRC 第 9 条による児童保護の法的枠組みにより、同じ里親のもとに戻って兄と再会した。彼女にとって家族関係にはすでに決定的に変化していた。

彼女は 5 年を経て現在 6 人目のソーシャルワーカーがあたっている。彼女は、世話されずに放置され虐待的な中で兄弟姉妹と生きていた家庭から彼女を救ってくれた最初のソーシャルワーカーを基準にソーシャルワーカーを評価する。救出の時点で築かれた人間関係は、その後彼女が出会う人間関係の質を測る基準となった。

彼女の家族にはすでに知られている性犯罪者が何人もいて、家族の中には彼女自身の身の安全のために接触してはならない人がいた。彼女の視点から見ると、彼女が家族と経験したことの全容、現在の状況、そして何が彼女の最善の利益かについてさまざまな人が語る異なる方向付けを、ソーシャルワーカーは誰も理解していない。ここに彼女のジレンマがある。彼女は誰を信頼するのか。

11 歳のとき、彼女には家族の中で生活することがどんな感じかを話すのは難しかったし、今でも、この 5 年間に感じていることを話すことは難しい。これらはとても繊細で個人的な領域で、人々は私たちと分かち合うことができ、分かち合いたいと感じるときもある領域なのだが、信頼が築かれるには、安全と安心が確立されていなければならない。

4 年ぶりに再会した 2018 年 12 月の最初の話し合いの場で私は、彼女が家庭での生活や家庭内虐待、両親の飲酒について説明し新しい里親の家に滞在できると喜んでいたことを思い出した。そのとき彼女は「奴隷のように感じる」扱いを母親から受けたと私に話した。最近出会ったとき私がそのフレーズを覚えていたことに彼女は驚いたが、私にはどうして忘れられようか。

私たちはソーシャルワーカーとして、いつまでも心に残るようなことを耳にすることがある。彼女の表情は不機嫌から本当に認められたという笑顔に変わり、再び温かいつながりが出来た。ミーティングが終わるころには、彼女は私たちがチームで、彼女は子ども時代から大人への移行、つまり通過儀礼の旅を続けるこれからの彼女自身にとって正しい道を見つけようとしていると話していた。

国連子どもの権利条約第 3 条における最善の利益の原則

私は裁判所から任命された独立した職員としてクリスと会っている。いかなる決定も子どもや若者の最善の利益のためになされることを確保するのが私の任務である。ソーシャ

ルワークのスキルや知識だけでなく、法律や人権条約に関する実務的な知識も必要とされる、興味深い役割である。アドボカシーのスキルは、彼女の意見と私のアセスメントを法的な意思決定の言葉に置き換えるために使われる。クリスが自分に起きていることを理解していることをその都度確認しながら進めていく。アドボカシーは非常に重要である。こうした話し合いの場面はすべてが異なり、私たちはそれぞれに応じた様々な種類の関係を築いていく。すべてが相互に関連し合い、相互に依存している。実践者がこうした複雑な一連の義務と責任を果たすために、ソーシャルワーク教育と省察的実践は極めて重要な役割を担っている。

プライバシーと保護の権利の競合

さて、クリスは 16 歳になったらどうなるのだろうと思いながらも、しばらく自由奔放に過ごしていた。彼女は自然に、普通に通過儀礼に集中している。

母親と娘は 2 カ月に 1 度、監督下での面会と電話でのやりとりを続けてきた。当初は厳重に監視されていたが、最近になって別のソーシャルワーカーが、この厳重な監視は家庭生活におけるプライバシーの侵害であるとの見解を示した。このことが、いつクリスは実家に戻って暮らすのかと母親がよく口にする今の状況を作り出しているとクリスはコメントする。彼女は救助された 11 歳のときの安堵感を再び味わっているが、それが今終わりを告げようとしているかもしれないと言われている。彼女は、自分が本当に家に帰りたいのかどうかわからないと私に言う。しかし彼女はソーシャルワーカーには何も話していない。

プライバシーの尊重と保護のバランスをとることは、ソーシャルワーカーにとって日々挑戦である。競合する人権を扱うことは複雑で、多くのソーシャルワーカーの労働条件の現実では、勧告について倫理的に考える時間は限られている。身体的な保護の問題については一般的にはっきりしているが、感情の保護についてはどう援助したらよいのだろうか？

感情のジェットコースターの衝突？

この複雑なマトリックスには、2 つの重要な感情のジェットコースターがある。ひとつはクリスが、子どもから大人への旅に出る彼女を中心に描かれている。もうひとつは、彼女の母親が 4 年前に子どもたち全員の面倒を見られなくなったその影響から来るものである。クリスはこの 2 つのジェットコースターの交差するところにいる。

クリスは母親から、16 歳で家に帰れば、もうソーシャルワーカーに指図されることもなく、「普通の家族」に戻れると言われたそうだ。

まず、クリスの母親のジェットコースターをみてみよう。この 4 年間を素晴らしい家庭生活の単なる中断だったとみるには無理がある。クリスの実際の人生体験には、11 歳のときに里親のもとでなぜほっとしたのかを、いまだに正直に話すことができないという現実がある。

彼女の母親は子どもたちを自分の家で暮らす以外のどこか他の場所にやることを決して

望んではいなかったが、彼女の家庭生活に国家が介入し子どもたちが自分の世話を離れて他所で成長するのを見ることになり、それに耐えてきた。しかし今彼女は、子どもたちは家に戻るべきときだと言っている。これは単に不快な夢でまもなく終わる、と彼女は思いたい。自分の子どもたちに対する大人の責任の一端を果たしてこなかったという自分自身と地域社会からの批判を背負って彼女は生きてきた。クリスが 11 歳のときに夫が失踪し、クリスを守るために法的措置がとられた。そのことに関し、母親には失敗の責任を夫に押し付ける口実ができた。

父親は不在の間、彼は悪の権化のような存在だった。しかし、彼女の怒りと罪の意識は完全に取り除かれたわけではなく、いま自らを被害者とし、彼のせいで、子どもたち手放し、公的なケアに預けたことにしている。悲しいことに、このような状況に陥るきっかけとなった剥奪とネグレクトの連鎖が、彼女自身の両親の子ども時代から、何世代にもわたって長く続いている。母親は不安定な子ども時代を経験し、子育てに不向きで、感情的にもアンビバレントになっている。非難や被害者意識は安らぎの毛布のようなもので、変化を成功に導くためには、しばしば乗り越えなければならないハードルとなる。

では、クリスのジェットコースターはどうだろう。学校を出て若者となる通過儀礼は、すべての若者にとって手ごわいものだ。生まれた家族から離れて社会的養護を経験する人々にとって、変化をもたらす大きな課題となるような、付加的な要因を伴う。この追加要素には、国家の里親によって提供された「巣」とはいえ、家族の「巣」を離れることを模索し始めたことが含まれているだけではなく、多くの場合、「社会的養護」の理由を見つめ直すという感情的な噴火をもたらす。

その理由は、5 年前の最初の裁判の時点で検討されていた。安全で安心できる家庭が見つかり、母親との連絡も保たれている。しかし、社会的養護を受けている理由について母と娘の間で本音で語り合うことは、これまで一度もなかった。それは国家の介入を認めるという弁護士間の合意によって、裁判所で起きたことだ。それは遠い出来事であった。

安定した場所とみられるよい里親探しができた。ソーシャルワーカー達はそれぞれ、優先すべき他の危機的事案を抱えていた。感情のジェットコースターについての共同作業は行われなかった。保守と適切な維持管理がなければ、惨事が起こる。

他にプランはなかった。

現在、クリスは部屋の中の大きな象にとらわれている。誰も見たいと思わない象だ。クリスの片耳には、母親が「もう家に帰るときよ」と言っているのが聞こえる。もう片方の耳で、クリスはソーシャルワーカーが「別の場所を探します」と言うのを聞く。しかし、私たちは今何も手にしていない。空っぽなのだ。

クリスは母親とのもろい関係を壊したくないので、家に帰りたくないとは言えない。構造的な障害によって、彼女が大切な人だと思っている里親とうまく接触できないのだ。担当部門による措置は終わり、4 年間のケアで築き上げた関係も終わりとなった。彼女はシフト勤務のケア職員とのつながりをすり抜けてしまう。

クリスは宙ぶらりんの状態にある。自分についてどんな決定が下されるのか、将来に向けて本当に望むことをしようとするとき人々は自分を助けてくれるのか、誰が耳を傾けてくれるのか。彼女は混乱している。

クリスはこの通過儀礼をどう乗り切るのか？彼女が人生の重要な一歩を踏み出すとき、誰がそばにいてくれるのだろうか？コーポレート・ペアレントの役割は何か、ケアの義務と責任はどのように提供されるのか。

大人への移行のためのコーポレート・ペアレントと社会的養護経験のある家族の援助とサポート

アイデンティティが鍵

通過儀礼とは、ある地位から別の地位へ移行するプロセスのことで、一般的には、何らかの儀式、重要な誕生日、学校を卒業することなどがあり、より広いコミュニティによって認められ、支援される。子どもから大人になる過程で、クリスのアイデンティティは変化する。彼女は社会的養護経験のある若者なので、このプロセスはさらに複雑だ。家族やコミュニティという支えとなる枠組みが、重要な時期に彼女の周りで崩壊してしまったのだ。

これは著者が住んでいる場所や働いている場所に限った特殊な話ではなく、世界中で繰り返されている。

子ども時代から大人へのアイデンティティの移行を援助するために、社会的養護経験者による新しい物語が紡がれ続けている。これは広がりつつあるピアサポートの運動で、国家が将来の市民をケアし愛情を注ぐ方法を変えるようキャンペーンを展開している。ケア・コミュニティは、世界中のコーポレート・ペアレントを反映して、コ・デザイン、コ・プロダクションを通じて、若者たちのためにより良い社会的保護を作り出せることを示唆している。

通過儀礼の成功には、強い根が必要だ。社会的養護経験のある家族の中で、根となるシステムは成長し続けている。誰がケアをするのか。スコットランドとニュージーランドのVOYCEは、ニュージーランドのジャシンダ・アーデン首相とスコットランドのニコラ・スタージョン首相の援助を受け、この世界的な運動を先導している。

グローバル・ケア・ファミリーの集い（2018年10月）のようなイベントやコレクティブの誕生、経験を通して生まれる専門家たち。彼らの焦点は、若者のストレングス、経験を共有するコミュニティ、コミュニティに何か異なる重要なものをもたらす彼らの独自性にある。独自性は彼らを「普通」から排除するものではない。彼らは、自分たちはケア・ファミリーの一員であると自覚している。はっきりと思想を表現でき、自信にあふれ、積極的で、成長期に得られる人間関係の重要性を知っている。彼らの根はどんどん強くなっている。

国家と市民社会がUNCRC第9条の義務にどのように対応するかについて、今、変化を

議論すべきときである。ソーシャルワーカーは、しばしば代理人の役割を求められるが、とくに代理人の役割においてこの変化した物語を振り返ることが求められている。

ソーシャルワーカーのための省察

ソーシャルワークの多くの分野では、世界中で実体験を通した専門家の話を聞き、学ぶことが強調されている。世界ソーシャルワーク・デーでの活動からソーシャルメディア上の動画や投稿が、多くのコ・デザインやコ・プロダクションといった体験者とともに行う活動につながり、証言として政治指導者や、メディア、市民社会と共有されている。シンポジウム、メディアインタビュー、ビデオ、スペインでのオレンジタイドのようなデモ、アジアやアフリカでのコミュニティ活動は IFSW のウェブサイトで見ることができる。社会正義のための地球規模での運動が展開されている。

ソーシャルワークがこの過程にどのように関わり、実践を展開していくのかは、現在のグローバル・アジェンダのプロセスだけでなく、2020 年から 2030 年にかけて展開されるプロセスにとっても、次の課題である。

国際的な知識の交流によって、同じような仕事に対する異なるアプローチを振り返ることができる。最新のソーシャルワークの国際定義（2014 年）には、初めて先住民の知識が認められた。ここから浮かび上がってくるのは、家庭生活の変革を援助するための、これまでとは別の重要な視点である。これには、ニュージーランドの家族グループ会議とマナワナウ・プログラムが含まれる。

子どもたちを守るために家族から引き離さなければならなくなったとき、ソーシャルワーカーとして私たちは、罪悪感や非難が強力な感情として残り、悪化してしまうことを知っている。ニューヨークのデビッド・トビスのような人たちが親のアドボケイト（擁護者）と共にアメリカで行っている活動は、実体験による専門家を活用しているもので、自分の子どもの面倒をみていない親とともに、こうした感情が障壁とならずに肯定的な変化に貢献するようにするためにはどのようにこの感情に取り組めばよいのかを学ぶ助けになる。

これらは、社会的養護経験者が指摘した問題のいくつかに対処できるであろうものについて、私たちが共有できる例のほんの一部である。

私たちは、これらの要因が私たちの仕事の現実ではないことを望むかもしれないし、願うかもしれないが、全体のマトリックスがどのように組み合わされるかを考える必要がある。クリスは自分のために働くのではなく、自分とともに働くチームを望んでいる。

（第 4 章：高島恭子訳）

第５章

グローバル世界における高齢化する移民

老人の教えは世界を正しくする － ヒンディー語のことわざ

ローラ・カサル＝サンチェス著

伝統的に、気候変動と環境災害は、人々が機会を求め生き残りをかけて移動するため、移民の促進要因となってきた。若者は自国を離れ、時には年をとると出身国に戻る機会がある。しかし、他の人は、母国ではない別の国で老後を生きるか、生きることを選択する必要がある。

ヨーロッパでは、過去 40 年間で移民の数が劇的に増加している。21 世紀の最初の 20 年間で、高齢移民と民族集団の人々の数は倍増した。これは、働く移民の高齢化、家族の再統合政策、高齢者の移動性の増加、長生きする人々の人口動態の変化の結果である(Wilkins、2019 年)。この新しい人口構造は、ソーシャルワーカーとすべてのソーシャルエージェントに、高齢移民とホストコミュニティとの共生を改善し、社会的排除の状況を回避するために、文化的な感受性を持った社会政策と社会サービスを開発するよう新たな課題をもたらす。

高齢移民は、多くの場合、ホストコミュニティの高齢者のニーズとは異なる一連のニーズを提示する。特異性や文化的な障壁、孤独と孤立の状況、緊縮政策による貯蓄の減少などは、問題のほんの一部に過ぎない。これらは、高齢者が脆弱な状況で社会サービスにアクセスするのを妨げる要因の一部であり、社会的排除の状況に陥るリスクを高める。

高齢化プロセスを形作る要因は集団間でほぼ同じだが、移民固有のリスク要因が存在する。これらには、次が含まれる：移住前および移住時の健康リスクへ晒されていること、より不利な社会経済的立場、言語の壁とヘルスリテラシーの低さ、健康を求める行動に影響を与える文化的な要因、健康と生活の質に影響を与える心理社会的脆弱性と差別

(Kristiansen et al., 2016)。

多くの国で、マイノリティやエスニックグループの人々は、自分たちの文化的伝統が尊重されず、多数派の文化の価値観を統合することを余儀なくされていることを目撃する。高齢移民は通常、自分たちの伝統に強く根ざしている。彼らの文化的ルーツとの関係は、多くの場合、彼らの感情的および心理的な強さであり、彼らの生活の多くの変化を通じて、彼らを支える彼らの安全と安心である。このルーツを維持する上で、ホストコミュニティで理解されなかったり、尊重されなかったりすると、社会的排除につながる可能性がある。その結果、

これらの状況は、すべての人にさらに悪影響を及ぼし、より大きな結果をもたらす可能性がある。多くの高齢移民にとって、このような社会的排除の状況にあることは、多様性の重要性を認識していないという点で、彼らの人権の侵害と見なされる可能性がある。 ("World Forum of Non-Governmental Organization on Ageing: Final Declaration and Recommendations", 2002)

移民の背景を持つ人々やマイノリティグループ出身の人々の増加、不平等なアクセスを伴うサービスの実施、文化的な感受性に基づいた理解の欠如は、ソーシャルワーカーと老年学者にとって大きな課題を提示している。

高齢移民の排除の解決に取り組むには、単純な活性化措置では実現できず、ソーシャルワーク専門職の社会正義、尊厳、多様性、持続可能性の原則に基づいた、よりインクルーシブでホリスティクな権利の枠組みが必要である。私たちのアプローチには、人本位のサービスに向けた変革プロセスを導く横断的なポリシーを含める必要がある。それらは、移民高齢者の間の文化的および宗教的違いに基づいて、これらの違いを高齢者ケアに統合し、隔離ではなく、すべての人の財産として統合の雰囲気を促進する必要がある(Verhagen、Ros、Steunenberg & de Wit、2013)。

クリスティーナの物語　スリナムからオランダへ

クリスティーナは 1942 年にスリナムで生まれ、1964 年にオランダに到着した。過去 50 年間、人々は通常彼女に「いつ戻るのですか。」と尋ねてきたが、最近では「よく戻るのですか。」と尋ねるだけの人もいる。

クリスティーナにとって、最初の質問に対する答えは常に次のとおりだった。

わかりませんが、私はここで勉強し、働いています、むしろここでくつろいでいます。でも、はい、いつかまた帰って、去った国の人々のために働くべきだと思うんです。それが私の責任です。そして、はい、特に冬には、太陽、食べ物、大雨の後の草の匂いが恋しいです。

今日、誰かが彼女に 2 番目の質問をしたとき、クリスティーナは、彼女が頻繁にスリナムに行く理由はなく、彼女の両親はもう生きておらず、そこに兄弟や姉妹がいないこと、そして彼女の子どもと孫はオランダに住んでいる、そしてそれが、彼女が持っているすべてであると説明する。

クリスティーナにとって、オランダは彼女の場所である。彼女が次に述べているように：

両親が亡くなった後、スリナムに滞在する場所がありません。家族の負担にはなりたくない。航空券も高価で、私が去った国はもう存在せず、政治状況が変わり、経済状況が異なり、人々も変わりました。

しかし、クリスティーナにとって、彼女の人生は常に新しい国と彼女が去った国という２つの側面を持っている。彼女は常に、この二重生活は、特に最初の移民世代である 60 年代半ばに働きに来た人々にとって共通の感情であると感じてきた。遠距離でも、身近でもさまざまな関係性を日常的に維持することの重要性は、人々が互いにどのように関わり合うか、そして彼ら自身の幸福感に影響を与える。彼女の子どもと孫の家族はオランダにいて、それが彼女の現在の関係の主な焦点である。

私たちは滞在するはずはなく、永住しないだろうとよく考えていました。政府でさえ、私たちが家を買ったり、オランダ語を学んだり、医者に行ったりするために、社会的、経済的、文化的政策を策定しなければならないとは考えていませんでした。彼らは私たちをオランダ社会の一部と見なしたことがありません。

クリスティーナにとって、スリナムに残された人々の世話をするという高い道徳的義務が常に存在していた。西洋社会でのより個人主義的な生活様式と、故郷の大家族志向の構造の違いは、移民に大きな影響を与える。

いつも家で起こっていることで忙しいです。だから、私が去った美しい国への憧れはまだそこにあり、私の国でさえ私が覚えている国ではなくなり、それも変わってしまいました。かつて去った国がもう同じではなく、未来が期待していたものではないことに気づいたとき、それはここに定住するか戻るかを考え始めるときです。この選択をすることは実際には非常にストレスがかかります、なぜなら、選択がなされたときだけ、実際に未来を整理し、滞在する準備をする、あるいは戻る(再移住する)、または振り子のように行き来するための措置を講じ始めることができるのです。そして、この状況は、多くの病気、うつ病、認知症、孤独に直接関連する多くのストレスを生み出していると思います。

高齢移民の健康状態も通常悪化しており、不健康な労働状況などにより、彼らは通常、他の人々よりもはるかに早くいくつかの病気に苦しんでいる。一般的に、高齢移民が被る大きな不利益、つまり住宅、医療、福祉など、ほぼすべての分野での不利益が過小評価されている。

貧困は高齢移民に蔓延している。高齢移民の多くがそうであるように、彼らの収入はオランダの高齢者よりも低い。

オランダでは、高齢移民は、不十分な退職金の他に年金をほとんど持っていません。最低賃金を達成するために、彼らは補助を選ぶことができますが、この経済的補助には重要な制限があります。これにより、海外に滞在できる期間が最大４週間に制限されます。病気で親

戚の一人と一緒に滞在したい場合、家賃補助を失うかもしれません、それは完全な退職金を持っている高齢者には適用されないものだからです。

振り子のように祖国と頻繁に行き来することは、通常考えられているよりも多くの政府の介入と社会的影響をもたらす。例えば、海外に滞在できるのは 13 週間だけで、そうしないと給付手当を失うことになる。さらに、オランダの法律により、海外での医療費は必ずしも保険でカバーされるわけではない。

クリスティーナは、オランダで年をとることと移民であることに関するほとんどすべてのことについて、非常に豊富な知識がある。

高齢移民は通常不十分なオランダ語能力、頻繁に変わる法律や政策を理解できないため脆弱な立場になります。

高齢者ケア – 家族の責任

ヨーロッパでは、人口の高齢化は、多様性の増加と、フォーマル及びインフォーマルの高齢者ケアの構造の変化を伴う。現在の新自由主義の傾向は、高齢者ケアをするのは、個人自身、家族、コミュニティの責任であり、政府の責任ではないことをますます強調している (Lawrence & Torres, 2016)。この高齢ケアのパラダイムの変化を移民の特定のニーズに関連付けると、高齢者ソーシャルワークの介入に新たな複雑さが加わる。

地域・民族固有の知は、移住を余儀なくされた多くの人々にとって、コミュニティが尊厳と敬意を持って高齢者をケアするという文化的規範があることを私たちに教えてくれる。

高齢移民のソーシャルワークは、二重次元での介入を意味する。なぜなら専門家がホスト–ローカル要件と国際レベルの両方で高齢ソーシャルワークの実践を理解し、一人の人の生きた経験の多様性の尊重を促進し、コミュニティでの連帯の構築と人権と社会正義の原則に基づく介入を開発する必要があるためである。(Lawrence & Torres, 2016)。

高齢者ケア – コミュニティの責任

ソーシャルワークと社会開発のためのグローバル・アジェンダは、社会正義と平等なアクセスを保証するために不可欠かつ重要な部分を示している。ソーシャルワーカーは、解決策の開発とコミュニティの連帯の構築への個人、家族、コミュニティの参加を促進する。この介入分野では、ソーシャルワーカーは、社会的連帯の原則に基づいて相互統合のプロセスを開発し、地元の高齢者と高齢移民との間の人間関係を促進して、理解と異文化間の受容を改善する。これによって、高齢者は寛容的な環境、また文化的理解と個人と個人に関する文化的な環境に対する理解の下で老後を過ごすことができる。

オランダ人高齢者と高齢移民の間で長年にわたって発展してきた仲間関係の並行的な発

展は、次の世代が同じ学校に通い、同じコミュニティで生活し、独自の社会的ネットワークを築くということである。これらの第 2 世代と第 3 世代の間の仲間関係は発展しており、それぞれの両親や祖父母との関係の観点を基にして考慮する必要がある。彼らは、オランダ人高齢者と高齢移民の間の格差をどの程度理解しているのだろうか。

この相互統合と共生のプロセスにおいて、ソーシャルワーカーは対人関係の発展を促進し、高齢移民の特有のニーズを扱う明確な行動をとる。私たちは、他者とコミュニケーションを取り、交流するための架け橋を生み出し、彼らが安全で新しい環境や状況に適応し、彼ら自身の社会的および個人的な発展に積極的に関与できるようにする。

移住のストレス

移住はストレスの多い状況であり、通常は大家族からの分離を意味し、その結果、サポートが大幅に失われる。他の要因の中でも、私たちはその人が移住する年齢を考慮しなければならない。若者は社会的関係をより簡単に確立する傾向があり、負担を軽減し、健康を改善するのに役立つことができるインフォーマルなサポートネットワークを何年にもわたって維持することができる(Rote、S.2019)。

コミュニティベースの介入と社会文化的資源の利用は、人間関係の発展を促進し、高齢移民の幸福にプラスの影響を与える重要なツールである。高齢移民は通常、非常に均質な隣人や*宗教的なコミュニティ*に定住し、それが健康の低下を防ぐための支援的な人間関係、交流、社会文化的利益を発展させるための構造的基盤を提供する可能性がある。(Markides, Angel, and Peek, 2013)。

高齢移民間の人間関係を促進するためのソーシャルワークの役割の重要な要素には、解決策の開発とコミュニティの連帯の構築に、通常は介護者として機能する個人、家族、コミュニティの参加も必要である。私たちソーシャルワーカーが社会的介入を計画するとき、私たちは、社会資源の処方者の役割を引き受けるべきではなく、また、社会サービスが家族やコミュニティのメンバーが果たさなければならない役割を置き換えることはできないことを認識する必要がある(Truell, R, 2016)。

私たちが高齢移民に対するソーシャルワークの介入を促進する場合、家族の役割の変化の可能性と文化変容プロセス(異なる文化への適応を指す用語)をアセスメントする必要がある(Garrison et al., 1999)。統合について話すとき、私たちは、文化変容のプロセスについて語り、移民が自分たちの文化を放棄することなく新しい文化で効果的に機能するために経験するダイナミクスについて話す。ソーシャルワークの介入は、これらのダイナミクスが何であるかを特定する必要がある。

多様性の尊重

高齢移民は非常に多様で、非常に異質なグループであり、これはソーシャルワークの介入における重要な特徴であり、すべての人の特異性を尊重せずに、すべての高齢移民に同じア

プローチを使用して人間関係を築くことはできない。「高齢移民のグループ」について話すことができないのは、それぞれの背景や歴史が異なるからである。彼らが移住した理由は必ずしも同じではなく、受け入れ社会と交流し統合するために使用した対処メカニズムも異なる。私たちが介入を定義するとき、ニーズと条件だけではなく、ジェンダー、文化、宗教、栄養、言語、家族の状況、人生経験、生涯学習などを常に考慮すべきである。(Ministry for Intergenerational Affairs, Family, Women, and Integration of the State of North Rhine-Westphalia, 2010)。

ソーシャルワーカーとして、私たちは最も多様な分野や文化的背景を持つ人々と一緒に働いている。近年ヨーロッパ社会で起こった重要な人口動態の変化は、社会、医療、教育、福祉など、さまざまな公共サービスに直接影響を与えている。社会サービス利用者の文化的な多様性の増加は、アクセシビリティと質の高いケアを保証するために、専門家の力量と文化的感受性の向上にリンクされるべきである。私たちは、社会サービス利用者の信念と実践を社会保障制度に、またはその逆に変換するリンクであるべきである。

ソーシャルワーカーには、クライアントのシステム全体をアセスメントするスキルが必要である。無視すると、ソーシャルワーカーは、社会の変化のために働くのではなく、クライアントが変わる必要があると仮定することで、社会の抑圧に加担する可能性がある(Pinderhughes, 1989)。

ソーシャルワーカーは献身的で、文化や宗教の違いだけでなく、移民の特性、ホストコミュニティ、移住の経緯にも注意を払う。

文化的認識がなければ、ソーシャルワーカーは他の文化のクライアントと働くときに抑圧の一因となる。これは非倫理的な行為であり、クライアントに多大な損害を与える可能性がある(Sue et al., 1992)。

私たちは、高齢移民やマイノリティグループの高齢者が、元の文化の側面を維持しながら、ホストコミュニティに溶け込み、統合できると信じている。私たちは、高齢者ケアの違いを統合することに焦点を当て、可能な限り、高齢移民の利益のために、隔離ではなく、すべての人にとっての資源として統合の環境を促進する。

結論

人権の視点は、ソーシャルワーカーが個人中心の介入を開発し、個性を尊重するように促す。専門家は、公的機関と協力して、新しいガバナンスモデルを開発し、高齢移民の真の権利としての人間関係の促進と参加を保証する社会政策と実践を開発する必要がある。

高齢者ケアの新しいパラダイムは、ソーシャルワークが社会サービスの役割を再考し、

すべての人権の開発と実現にコミュニティを関与させることを通じて社会の変革を支援するという点で変化に向かって進む機会でもある。社会保障制度は、最小限の現金給付と限られた医療サービスへのアクセスを提供するだけでなく、すべての人々を支援し、コミュニティの能力と民主主義を構築する必要がある(IFSW, 2016)。

政府と市民社会は、高齢者が社会開発に貢献する能力を認識しなければならない。社会的連帯の構築は、高齢の女性と男性の文化的および民族的多様性と人生経験の尊重に基づく人間関係を促進するための基盤である。

（第５章：高嶺豊訳）

第 6 章

日本の災害の余波

笹岡眞弓著

ソーシャルワークの実践: 3「3 つの S」プロジェクト

はじめに

日本の災害時におけるソーシャルワークは、1995 年の阪神淡路大震災後に始まった。それ以前は、災害対応を支援するソーシャルワークのスキルは認識されていなかった。阪神淡路大震災後、日本医療ソーシャルワーカー協会のソーシャルワーカーの活動と学会の支援の結果、ソーシャルワーカーが災害救援で果たせる役割の影響がよりよく理解されるようになった。2011 年の東日本大震災後の災害救援におけるソーシャルワーカーの役割は大きく、地域社会と自治体によって認識された。それ以来、ソーシャルワーカーは自治体から資金援助を受け、2015 年の茨城県常総市や 2016 年の益城町などの被災地で現地支援を行ってきた。この章では、ソーシャルワーカーが、人生で最も困難な時期に人々に提供する独自の支援が認められた方法や、日本で災害に対応する際に一緒に働く人々や仲間のソーシャルワーカーとの関係の重要性について、いくつかの例を挙げて説明する。これにより、医療ソーシャルワーカーと研究者の緊密な協力関係が結ばれ、5 年間支援を提供した。この経験を生かし、東日本大震災以降の活動は 8 年間続いている。

災害救援活動が始まった当初は、石巻市の支援があった。2015 年に茨城県常総市で発生した洪水では、常総市の資金援助を受けて 2 人のソーシャルワーカーが避難所に 2 か月間駐在した。同様に、2016 年の熊本地震では、被害が大きかった益城町で、行政の支援を受けながらソーシャルワーカーが半年間活動した。

その後も、ソーシャルワーカー団体は毎年災害支援に取り組んでいる。本報告書では、7 年以上続いている東日本大震災後の支援活動を中心に取り上る。

阪神淡路大震災におけるソーシャルワーク阪神淡路大震災は 1995 年 1 月 17 日に発生した。ソーシャルワークの研究者グループは直ちに災害支援を行うことを決定し、フランス語またはアジア言語を話すスタッフを移民支援のために派遣した。数日後、人気番組で NGO の SHARE (特定非営利活動法人シェア＝国際保健協力市民の会)が医療ソーシャルワーカーを探していると紹介されたため、専門家が SHARE に連絡し、ソーシャルワーカーが仮設避難所が設けられていた六甲小学校に派遣された。これが日本で最初の災害時におけるソーシャルワーク活動となった。

日本医療社会福祉学会には関西地方に多くの役員がおり、この活動を開始した。このプロジェクトは神戸市に歓迎され、支援され、5 年間継続された。

阪神淡路大震災は寒い時期に発生し、支援が始まった六甲小学校では、風邪をひいて肺炎を発症した高齢者が多くいた。医師は、適切な病院ケアを見つけ、治療に対する患者の同意を得ることに手一杯であった。ソーシャルワーカーは、この間、多職種チームの一員として、重要な専門的役割を果たした。ソーシャルワーカーは交代で働き、その後の 3 か月間で 450 人以上の人々と面談し、ケース記録を保管し、電話により継続的なケアを確保した。

時間が経つにつれ、人々は六甲小学校の避難所から仮設住宅に移った。人々が直近の災害から立ち直り始めると、生活上の問題や家族の問題が明らかになった。これは特に、障害を持つ高齢者が多く住んでいる大和公園内に設置された仮設住宅で顕著であった。ソーシャルワークによる支援は、そこで暮らす人々へのケアの重要な部分となった。このような緊急移動の際には、各患者の同意を得る時間がなく、医師にとってジレンマとなったため、ソーシャルワーカーによる支援は、当初から多職種チームで重要な専門的役割を果たした。

この支援はソーシャルワーカーによる連携によって提供され、3 か月間で合計約 450 件の面接が行われた。ケース記録と電話を通じて継続的な実践が確保された。避難所の閉鎖後、他の問題が浮上し、仮設住宅では以前の生活上の問題がやがて明らかになった。障害を持つ高齢者が集中して暮らす大和の仮設住宅では、ソーシャルワーカーによる支援の必要性が認識された。

学会に所属する研究者及びソーシャルワーカーらは医療ソーシャルワーカー事務所を設立し、仮設住宅が閉鎖されるまでの 5 年間活動を続けた。この 5 年間の実践は、次の 4 つの R で説明される。

· 適切（Right）な人材: 保健医療サービスのソーシャルワーカーが実践的な支援を提供する上で主な役割を果たし、医師と効果的に協力した。

· 適切(Right)な時期: 活動は緊急事態後の段階で開始され、必要がなくなるまで継続された。

· 適切(Right)な場所: SHARE との協力により支援を展開することができた。これにより、一般の人々がソーシャルワークの実践の重要さを認識し、支援を必要とする人々に焦点を当てた仮設住宅の紹介を行うようになった。

· 適切(Right)な資材: 地元企業から寄付金が集められ、地元の病院が社会資源に資金を提供するための追加支援を提供した。仮設住宅にデイケアの形態を提供するためにソーシャル・アワーが開始され、住民はこれを「ソーシャルさんの部屋」と呼でいた。ジェーン・アダムスに倣い、特別なカップを用意して「非日常」の空間を作ろうとした。5 年間、数人のソーシャルワーカーが週末にソーシャルさんの部屋に滞在し、サポートを提供した。ソーシャルワーカーによって提供される安全で互いの関係を育てることを住民が大切にしていることがはっきりとわかった。

実践経験から得た学びが「4 つの R」アプローチの開発につながり、東日本大震災を含む

日本の医療ソーシャルワーカーによる災害支援の基盤となった。これは IFSW アジア太平洋地域によってさらに発展させられ、地域全体の訓練で使用されている対応方法である。

東日本大震災におけるソーシャルワーク

阪神淡路大震災の経験から、ソーシャルワーカーは一般市民との関係が極めて重要であることを理解した。2011 年に東日本大震災が発生した。被害は 1000 年に一度といっていい規模で、都市部の地殻変動と沿岸部の津波被害により、地域のインフラと人々に甚大な被害が発生した。多くの市民が地域社会を支援するために精力的に活動し、ソーシャルワーク組織は最も深刻な被害を受けた人々にできる限りの支援を提供した。

最初の被害は 2011 年 3 月 11 日に発生し、海岸線 500km 以上が破壊され、道路はひどく損壊または流され、ガソリンは不足した。福島原子力発電所のメルトダウンにより、発電所は危機的な状況に陥った。道路の使用は自衛隊車両に制限され、ソーシャルワーク組織はさらに 2 週間、より広範な支援を提供することができなかった。

石巻は特に被害が深刻だった地域である。地震発生直後、石巻赤十字病院の医療ソーシャルワーカーが生存者の情報の収集と管理、および死亡者の遺族への対応を担当した。医療ソーシャルワーカーは、通常の業務の一環として、怒りやその他の問題を抱える遺族を支援しているため、遺族に適切な支援を提供するために必要な専門的スキルを持っていた。しかし、災害の規模が大きすぎたため、ソーシャルワーカーは自分の家族の様子を確認する時間もなく、長期間にわたってほとんど不眠不休で働かなければならなかった。JASWHS を通じてより広範な支援が受けられるようになるまでに 2 週間の遅れがあったことは、災害救援活動に従事する人々に適切な支援を提供することの重要性を浮き彫りにした。ソーシャルワーカーが身を挺して、他者との関係を通じて支援を提供できるようにするためには、ソーシャルワーカー自身が支援を受ける必要がある。

石巻では状況が深刻であった。すべての専門家とコミュニティが協力しなければならなかった。ソーシャルワーカーは、保健師が配置されていた石巻市健康推進課と緊密な協力関係を築いた。この関係は、多職種連携を強化するために不可欠であった。専門機関のリーダーシップの下、チーム医療推進協議会がすでに設置されていたため、救援活動は集中的に行われ、各団体が独自の活動に従事していた。ソーシャルケアサービス実践者研究協議会への報告では、関係する専門家間での協力とコミュニケーションが不可欠であることが報告された。

地震発生直後、協会のソーシャルワーカーは、国内の他の地域の同僚と協力して、利用可能な病床を特定し、この情報をインターネットにアップロードして簡単にアクセスできるようにした。JASWHS は、必要な情報を共有するために、リハビリテーション学会とも協力した。しかし、その結果、情報が多すぎて、ソーシャルワーカーがしばしばアクセスできないことがあった。それ以来、中央政府と地方政府の間で情報を共有するための、より洗練されたシステムが確立された。

災害からの復興には時間がかかる。阪神淡路大震災では仮設住宅の閉鎖まで 5 年かかったことから、東日本大震災では少なくとも１０年はかかると予測された。災害時の指揮命令系統の混乱を避けるため、現場では JASWHS として、駐在する現地責任者のソーシャルワーカーを雇用。1 年後には現地責任者を中心に複数のソーシャルワーカーを雇用して支援にあたった。半年後には行政から人件費を支給された。また、行政への窓口として、スーパーバイザー、グループワーカー、プロジェクトディレクターなど経験豊かなソーシャルワーカーで構成された支援チームが結成された。全国から支援メンバーが集まった。

「3 つの S」プロジェクト: 安全、安全、安定

「3 つの S」プロジェクトには約 5,000 人が参加し、約 350 人のソーシャルワーカーが参加した。このうち 54 人のソーシャルワーカーが 3 回以上プロジェクトに再度参加している。現地スタッフは 15 名(うち 9 名は医療ソーシャルワーカーとして 8 年以上の経験がある)、現地ディレクターは 5 名で、平均実習日数は約 200 日である。緊急フェーズを除くと、ほとんどのソーシャルワーカーは現場でほぼ 2 年間働いていた。

東日本大震災の災害救援におけるソーシャルワークの貢献と直面した課題を整理すると、日本の災害時におけるソーシャルワークは 3 つの S と 3 つのフェーズで説明できる。

フェーズ 1:

安全（Security）: 緊急対応の維持(災害発生後 2 週間から)

4 月 1 日から、特別避難所で 70 名の障害者の被災者を支援する活動が始まった。石巻では、指揮命令系統を簡素化するため、現地の現地責任者が現場を担当した。この活動には、延べ人数 700 人のソーシャルワーカーが参加した。これは、さまざまなレベルでさまざまなタイプの関係を伴う複雑で困難な作業だった。

① 被災者の家族の安否確認
② 悲嘆ケア
③ 各種行政手続きの補助
④ 遠距離避難の同意確認
⑤ 避難所からの退去支援、避難所後の生活に関する相談
⑥ 避難所内外の関係機関との協力と連携
⑦ 避難所退去時のケースサマリーの作成

継続的な課題の 1 つは、協会が災害拠点病院の医療ソーシャルワーカーのバックアップをできないことだった。医療従事者のローテーションは通常、綿密に計画されるが、日本の医療ソーシャルワーカーは少数派であり、合意された人員配置基準がないため、「災害直後の困難な時期」という目標をサポートすることは非常に困難だった。これはサポートの基本であり、特に被災地では専門家の疲労と専門家のケアを無視することはできない。石巻では、

スーパービジョンによるケアが導入された。家を離れているソーシャルワーカーには、少なくとも月に 1 回は有給で自宅を訪問し、家族と会って数日間日常生活を体験できるようにした。さらに、国が自発的に派遣する災害医療支援チーム(DMAT)と連携できることも重要である。

これらの経験から得られた教訓は、次の通りである。

・理想的な支援を実現するためには、少なくとも 3 人のソーシャルワーカーをローテーションさせ、2～3 か月間継続的に配置することが基本である。

・また、地域に住む被災者の健康状態を調べるなど、大規模な調査を行うための人員を確保する体制も必要である。これは、国の機関の重要な役割である。

・現地に派遣されたスタッフのケアの提供にも留意する必要がある。石巻で使用されたシステムは、プロジェクトの持続可能性を考える上で重要な要素であり、現在も維持されている。

フェーズ 2

安全(Safety): 避難所を離れた後の支援、解決策の模索、ソーシャルワーカーによる安定的な配置の準備(2011 年 10 月 1 日から 2014 年 3 月 31 日まで)被災者は災害後、短期間で多くの決断を下さなければならない。その多くは被災者自身が下す決断である。避難所はどこにするのか、避難所から仮設住宅にいつ移るのか、仮設住宅はどこにあるのか、そこに誰が住むのか、復興住宅にいつ移るのか。絶え間なく続くストレスは、就職の難しさや、家が破壊されたうえに家賃を払うための資金を調達しなければならないことで、さらに悪化することがよくある。ソーシャルワーカーは、こうした課題に対処するために、人々に継続的な支援を提供する上で大きな役割を果たした。人々のニーズはそれぞれ異なり、ソーシャルワーカーは専門的スキルを使って、その人にとって何が最も重要か、そしてそれを達成するためにどのように支援できるかを特定する。その活動の例は次のとおりである。

① 大規模な支援組織と協力して、地域で暮らす被災者の生活支援プロジェクトに従事し、個人と大規模組織を結び付ける。

② 仮設住宅の近隣見守り支援者への支援と監督、人々の安心感の確保

③ 仮設住宅の課題への対応、人々が不安を感じると緊張が高まるリスクが高い

④ 「ひきこもりの子どもを持つ親の会」や「一人暮らしの男性のための会」などのグループワーク、効果的なピアサポートの開発

⑤ 市の虐待防止センターや社会福祉協議会にソーシャルワーカーを派遣し、公共部門との強力な協力機能を維持する、ソーシャルワーカーの専門スキルを活用する

⑥ 地元の NGO やその他の組織との連携、コミュニティサポートの構築

⑦ 地元のソーシャルワーカーとの勉強会の開催、リフレクティブプラクティスの活用

多くの支援組織がコミュニティで積極的に活動しており、支援を提供する用意がある。し

かし、フェーズ 2 では、災害前に存在していた問題や課題が深刻化して複雑化することが多く、ソーシャルワーカーにはより高いレベルのスキルと専門知識が求められる。

継続的な課題は、最もニーズが高い場所に熟練したソーシャルワーカーを確実に配置し、ソーシャルワーク支援の効果を実証する方法である。2012 年からは、地方自治体への月次実践レポートの提供、および地域ソーシャルワーカーのスキルレベル向上のためのトレーニング、コンサルティング、監督が行われている。

フェーズ 3:

安定性(Stability):支援範囲の拡大(2014 年 4 月 1 日から現在まで)

数年後、多くのボランティアが去り、仮設住宅で結成された入居者協会はメンバーの住宅からの退去による問題や解散に直面しており、コミュニティとメンタルヘルスに関連するいくつかの問題が拡大している。

ソーシャルワークの実践の影響が徐々に認識されるようになった結果、石巻市は仮設住宅被災者自立支援事業を計画し、その実施を JASWHS に委託した。市は専門のソーシャルワーカーに資金を提供し、十分な報酬を支払った。市は、一部の世帯が自立に困難を抱えていること、一部の単身世帯が高齢者で構成されていることを認識し、当初の計画よりもより長く仮設住宅にとどまる可能性が高いことを認識していた。この特別プロジェクトは、高齢者やその他の居住者が社会的に引きこもるリスクがある状況への対応など、必要なソーシャルワーク支援を念頭に置いて計画された。目的は、仮設住宅から復興住宅への人々の移転を支援することである。ソーシャルワーカーは、安全な復興住宅を建設するために、実体験を持つ人々と建築家や建設業者などの専門家による地域連合委員会の設立に関与した。このプロジェクトが成功したのは、そこで働くソーシャルワーカーが「自立」の一般的な理解を超えて、支援プロセスにおける自己決定の重要性を理解したからだと言える。効果的な関係を構築し、維持することが非常に重要である。

以下に、人々の家が破壊され、別の住居（多くの場合はより小さな住居）に移ったときに生じる複雑な家族問題の例を 2 つ挙げる。その場合、緊張が高まり、それまで対処できていた既存の困難がさらに悪化する。

ミホさん

同居家族は、要介護 4 の母（70）と精神疾患のある兄（障害年金 2 級受給）の 3 人家族。震災から 3 年が経ち、ミホさんは兄との同居と母の介護に疲れ果て、仮設住宅から出たいが他に住む場所がないと訴えていた。一番の悩みは、兄が世帯主であることだが、今後どう支えていけばいいのか分からないことだった。

ミホさんは兄から DV を受け徘徊するようになり、親戚とのトラブルで経済的にも困窮していた。現在は要介護度の高い家族だが、震災前は、ミホさん自身が軽度の障害を抱えながらも、広い家に何の問題もなく暮らしていた。

震災後、以前から抱えていた問題が表面化し、家族全員の生活の質に大きな影響を与えた。

アキさん

アキさんの家族は、継母（70 歳）と引きこもりの息子（30 歳）の 2 人家族。
アキさん自身も 60 歳で、保健師に誘われて、引きこもりの子どもを持つ親の集まりでソーシャルワーカーと出会った。30 年前に妻をがんで亡くした。狭い仮設住宅では家族間の争いが悪化。息子の暴力で警察が何度も介入。地元スタッフのソーシャルワーカーが、骨折した継母の入院手配や家族訴訟に介入。仮設住宅で経験したストレスは家族体制を変え、もともと複雑な状況をさらに複雑にしている。

結論

阪神淡路大震災後の被災者支援から学んだように、これらの事例は、支援を必要とする人々に直接支援を継続的に提供することだけでなく、地域福祉のビジョンとミッションについて地域住民と行政の間で十分な合意を形成することが重要であることを示している。一方、地域住民と行政の間で十分な合意を形成するには、災害直後に必要な支援活動に加えて、上記のような活動の継続に対する支援を彼らから保証してもらう必要がある。被災地での支援ニーズへの対応に取り組む際には、作業に予想よりも長い時間がかかることや、想定よりも多くのリソースが必要になる可能性があることを常に意識する必要がある。災害時におけるソーシャルワークでは、これらの課題に対応できる能力を構築することが重要である。

被災地では、生活の「再建」が急いで行われることが多い。復興住宅は「終の棲家」とみなされ、コミュニティ文化における少数派の立場にあった過去の経験の「重い扉」が備え付けられている。選択はプロセスを通じて急いで行われ、決定は、多くの場合、人々がどこに移転しなければならないかを受け入れないまま行われている。これは、復興を著しく妨げる可能性がある。この状況は、予期せず襲ってくる病気や怪我に非常に似ている。この意味で、医療ソーシャルワーカーのスキルが災害時におけるソーシャルワークに活用できる理由のひとつであると言える。時間をかけて関係を築き、発展させ、維持することが、このプロセスの鍵となる。

（第 6 章：加藤純一訳）

第７章

人間関係と意思決定支援

グラハム・モーガン著

はじめに

本章は、意思決定支援について、主に私の個人的な振り返りであると同時に、スコットランド精神保健福祉委員会においてエンゲージメント・社会参加担当官（当事者経験）として行ってきた協議を踏まえて私なりに考察したものでもある。

私は統合失調症の診断を受けており、過去 9 年間は地域治療命令に基づく強制治療を受けてきた。なお、過去 35 年間にわたり、精神保健法の規定に基づいて精神科病院への入退院を繰り返しきた。

また、本章は、強制治療の是非を論じるものではなく、強制治療のリスクがある場合や意思決定能力が損なわれていると見なされる場合に、当事者の意思決定を支援するいくつかの方法について考察するものである。主に、専門家と当事者の関係性がこれを促進するか妨げるかについて論じる。

この背景には、数年前の国連障害者権利条約（UNCRPD）がある。本条約では、私のような人々に対する強制的な治療、すなわち通常私が行う意思決定を他者が代わりに行うこと（代理意思決定）は廃止されるべきであるとされ、誰もが法的能力をもつ権利と人生で必要な意思決定をする権利を有すると認識を見直すべきであるという一般的な見解が示された。言い換えれば、精神障害を理由とした拘束はもはや選択肢として存在すべきではない。代わりに、私のような人々が自ら意思決定できるようにし、その意思決定に支援が必要な場合には、その支援が提供されるべきである。

世界中の法制度では、この理想の実現に向けた取り組みがなされている。ここスコットランドでは、代理意思決定を完全に廃止すべきという考えについてまだ完全な合意に至っていないが、人々が自身の人生と治療について可能な限り多くのコントロールできるような方法を模索している。

私の世界へようこそ

私は精神保健サービスと関わってきた 35 年間で、次々と精神保健福祉官（精神保健法に基づく治療を専門とする有資格のソーシャルワーカー）、地域精神科看護師（CPN）、精神科医と出会ってきた。ここではこれらの様々な関係性について述べる。

特に初対面時に、私を支援しようとする人々との関係は少し微妙である。その理由は分からないが、いくつかの考察が役立つかもしれない。

私は人生において苦痛を経験していることを自覚しており、うつ病、不安障害、アルコールの過剰摂取の問題を抱えている点については全面的に理解している。このような経験は対処が難しいこともあるが、多くの人々が経験するものと比べて特に顕著であるとは思わない。しかし、自分が統合失調症であるという点は、どうしても納得できない。精神科医、精神保健福祉官、看護師などの話を聞くと、頭では理解できるが、心の中では受け入れられない。私の著書『START』（2018 年）の大部分は、この問題と向き合う過程について書かれている。

多くの点で、この診断をようやく受け入れることができれば、私のケアも生活もはるかに楽になるであろうと思う。要するに、自分の核心的な信念が妄想であり、薬物療法で改善できると認めることができればということである。

私は明晰で、表現力豊かで、自信があり、それなりに知性的な人間であり、良好なコミュニケーション能力をもっている。しかし、家庭生活や内面世界はこれを反映しないことがしばしばある。家にいる時、私の沈黙に対するパートナーの絶望感に慣れている。話すきっかけとなる閃きや、頭の中の考えさえ見つけられない苦悩を痛感している。この空虚さ、この内なる虚ろさ、魂が墜落して機能停止したかのような感覚に実にうんざりしている。

笑顔を見せ、スピーチをし、様々な場面で「素敵な人だ」と言われる一方で、自分が悪魔であり、世界を破滅に導いていると考えてしまう。邪悪よりも悪い存在であると思う。このような思いが、友人、家族、知人からの褒め言葉を受け入れにくく、信じにくくさせていることを意味している。

人間関係におけるパワーとコントロール

定期的に新しいワーカーが割り当てられたり、引っ越しで生活に全く新しい支援者たちが加わったりする度に、私はいつも強い不安を抱きながら彼らの存在と向き合う。

彼らは私が気に入らないであろう、私が生き生きとした人間としてではなく、訪問スケジュールの一枠として彼らに映るであろうと考えてしまう。彼らは私を偽者に思うのではないか、私の話すことに退屈するのではないか、なぜ私に注意を払わねばならないのか疑問に思うのではないか、私の経験は彼らを嫌悪させるか、あるいは滑稽に映るのではないか、と心配する。

これには多くの理由があるに違いない。もちろん私自身の問題、私の病気（あるいは何であれ）があり、私の人生に新しく現れる人々に対する私の反応もある。そして、もちろん力関係の問題もある。強制治療命令下にある私は、ワーカーを自宅に入れることも、彼らとの面接に出席することも選択の余地がない。これまで出会った人々はすべて親切であったが、それでも私は不安を感じる。私は時々、荷物をまとめて逃げ出し、新しい名前を名乗り、医者や看護師やソーシャルワーカーとは二度と関わりたくないと思う時がある。

私のプライバシーの尊重

そしてもちろん、そうした人々に対する私のバルネラビリティ（傷つきやすさ）もある。ほとんど知らない人々に最も個人的なことを話さねばならない。一度も一緒に散歩にも行かず、食事も共にせず、友人と熱く語り合うこともない人々に、私の不安や恐怖、恥ずかしい内面生活を共有しなければならない。何か間違っているように感じる。

私は、誰かに打ち明けるには大きな覚悟を必要としている。自分の人生の良し悪しを話せる人々を、時間をかけて知り、信頼し、好きになる（そしてしばしば愛する）必要がある。そして専門家と話す時、私はある種の相互性を求めていると思う。相手が私を尊重している、状況が違えば土曜日の夜にでもパブで一緒に酒を飲むかもしれない、時には相手も私に打ち明けることがあると思うかもしれないと感じたい。私たちの関係が完全に一方通行ではないと感じたい。残念ながら、彼らとの関係の現実は一方通行である、あるいは少なくとも私にはそのように思える傾向がある。

私の中の大前提は、彼らが私に微笑み、親切に接する理由は、それが専門職として当たり前のことであるために過ぎないという捉え方である。しかし、実際には、私は彼らにとって単なる一連のケース記録、忙しいスケジュールの中の隔週の面接枠、３ヶ月に一回の 10 分間の会話、あるいは年に一度のアセスメントの対象者に過ぎないと感じている。

境界線と人間関係

私が抱くこのような思いは、私たちの関係に影響を与え、共通の人間性を覆い隠してしまう。心の中で敵意と、嫌われるのではないかという不安も抱えながら、新しい支援者を迎えている。同時に、愛され、守られ、支えられたいという、子犬のようで恥ずかしい欲求もある。彼らが私に会うことを楽しみにしている人、私の自宅から階段を降りて車のドアを開けた瞬間に彼らの意識から消え去らない人で私がありたい。

そして、正直に言えば、これは当然のことであると思う。私たちの人間の基本的な部分のように感じる。当事者の生活や感情の荒波から自信を、また当事者を虐待の可能性から守るために、支援者が専門的に振る舞い、「境界線」をもつ必要があることは理解している。しかし、専門的な振る舞いが警戒心をもち、客観的であること、感情を押し殺して人間性を共有しないことを意味するなら、どうしても屈辱と軽蔑を覚え、劣った存在、欠陥品、問題、故障品、物のように感じざるを得ない。

目指す理想は、関わる人々が誠実で、正直で、温かい存在になるという希望である。自分が尊重され、大切にされていると感じたい。私の言葉も、私の人生も、他の人々と同じようにかけがえのないものであると感じたい。

強制命令と愛

私は拘束され、治療を受けさせられる時、それが思いやりと、まさに愛をもって行われていると感じたい。それが、私の人生で大きな役割を果たす人々に対して示したい接し方である。相手の肩書きを見て、特定の振る舞いや考え方を期待されていると思いたくない。特に、

その人が私の人生に関わるかどうかについて選択の余地がない場合になおさらそうである。避けられないのは、彼らが私の最も親しい友人さえも知らない私の過去や考え、性格を知ることになるという事実である。そして、彼らがどこまで何を知るかについて、私は一切決められない。

私たちの関わりにはある種の「条件」が課されていることを承知している。例えば、もし、地域精神科看護師を、感謝を込めて急に大きく抱き締めたら、おそらく二度と会えなくなるであろう。もし、精神保健福祉官に自宅の電話番号を尋ねたら、彼女はそれを教えてくれず、おそらく高まったリスク・レベルとして報告するであろう。もし、担当の精神科医とその家族を、年に一度の感謝の気持ちとして食事のために自宅に招いたら、彼はそのようなもてなしを受け入れることが許されていないと言い訳をするであろう。

人間関係の重要性への賞賛

それでも、このチームの人々は、私を生かし、支え続けている。専門職としての境界線を越え、「ありがとう」と伝え、私たちの絆と互いへの影響を賞賛することこそ、人間らしい反応ではなかろうか。

私が実践している時、精神疾患や認知症、自閉症、学習障害などをもつ人々と、その友人や家族と関わる。私の役割は、彼らを私たちの活動や、私たちと彼らが直面している課題に巻き込むことである。

精神保健福祉委員会は、精神障害をもつ人々の権利を促進し、擁護することを目的としている。病院訪問、調査の実施、相談・情報提供の電話ラインの運営などのような活動の他に、私のような人々に関わる法律を監視し、意見を述べる役割を担っている。

意思決定支援は能力の問題

私たちが特に関心をもつテーマの一つが、拘束と意思決定支援である。過去 3 年間、私はこの問題についてスコットランド全土で精神疾患をもつ人々と協議を重ねてきた。病院、来所施設、アドボカシー事業、都市部と農村部に加えてスコットランド諸島の一部でも会議を開催してきた。

これらの協議の報告書は、近い将来に精神保健福祉委員会のウェブサイトで公開される予定である。これらが、我々の生存権や自由権のような重要な問題に関する議論に役立つとともに、精神疾患の診断を受けた数百名の人々の拘束と意思決定支援に関する見方の概観を提供することを願う。

一部の人々は、私たちがいくら支援を受けても全く意思決定ができない状況もあり得るとも述べている。つまり、病状が極めて重篤で判断力が著しく損なわれている場合、意思決定支援を試みても効果がないということである。私自身の経験からも、この意見には共感できる。例えば、空に昇る愛に満ちた霊となるために自らを焼く必要があると確信した時、自分の存在が周囲の人々の愛や希望を破壊している悪を放出していると確信した時、世界の

平和を守るために体内の血液を全て抜き取り、防空壕に保管する方法を探そうとした時などである。このような時こそ、私が生き延びる唯一の方法は、他の人々がこれらの決断を私の手から奪い取ることであると理解できる。

しかし、同時に、他のほとんどの人々と同じように、私の意思決定能力はそれほど損なわれておらず、食べたいものや観たいテレビといった判断はできないわけではない。実際、体調不良で集中観察下にある時でさえ、支援がなくてもほとんどの意思決定ができる。

ただし、支援があれば判断できる場面がしばしばある。その場合、支援がなければ判断できない。例えば、抗精神病薬を服用するかどうかを決めることは、私自身にはできない、あるいは許可されていないかもしれない。しかし、かつて私が急性期患者として入院していた時、薬剤師が服用する可能性のある抗精神病薬の種類を説明してくれた。非常に鎮静作用が強い薬はどれか、どの薬が体重増加をつながりやすいかなど、理解する手助けをしてくれた。選択肢は限られていたが、それでも選択であり、私が関与して決めた。私をよく知ってくれて信頼する人々の知識と、事前意思表明書（体調が良い時に作成した、発症時に希望する治療方針に関する文書）の内容を組み合わせることは、以前は私の意思から切り離されていたであろう意思決定の有効的な方法の一つかもしれない。

私たちにケアを提供する専門職と私たちの関係は、意思決定の方法にとって極めて重要である。入院中、面会客に疲れることもあれば、逆に面会を渇望することもある。相手を傷つけたり過度な負担をかけたりする恐れから、このような気持ちを簡単に伝えられない。明確に、自信をもって自己表現できる状態ではないためである。看護師と十分に打ち解けた関係を築けた時は、誰が面会に来るべきか助言してもらえることがある。かつて担当の精神保健福祉官は、私が友人と過ごす時間をどれほど必要としているか理解し、自ら面会を断ってでも私が友人とリラックスする機会を優先させてくれた。

この点について関係者に意見を聞いた際、彼らは非常に明確に答えていた。私たちを支援する専門職との関係性は、意思決定の方法にとって決定的であると。

あまりにも多くの人々が、専門家から見下された、軽んじられたと感じている。自分たちが劣った存在であり、自分で考える能力がないと見られていると感じている。このような場合、関係があまりにも壊れているため、意思決定支援を考えることさえ不可能である。周囲の人々が私たちの言うことを軽んじ、見下しているとすれば、果たして私たちは参加したい気持ちになれるか、そもそも私たちは意見を聞いてもらえるのか。

人間的で思いやりがあり、敬意を払うアプローチが対照的である。このようなアプローチでは、互いを同僚やパートナーとして見なし、喜んで話して信頼し合い、話すための空間と時間が与えられ、人々が私たちの視点を理解しようとする。このような状況では、はるかに多くのことが可能となり、かつては手の届かなかった多くの意思決定が可能になる。

良い意思決定支援とはどのようなものか

意思決定支援は、単なるアドボカシー活動や事前意思表明、代理権の問題ではない。むし

ろ、私たちを支援する人々の姿勢と人間性に関わる問題である。

以前、私の精神保健福祉官（MHO）の一人が、私を理解しようと少し戸惑った時、私が書いた本（START）の原稿を全て読み、私という人間を理解しようとしたことを覚えている。日常業務として求めるには少々過剰かもしれないが、私のパートナーが緊急連絡先として意見を聞かれた際、MHO が彼女に長電話で丁寧に話を聞き、尊重されていると感じた事実こそ、人々の意見を聞くために本来あるべき姿である。さらに彼女がクリスマス休暇中に私の強制入院問題に取り組んだことは、良いメッセージとなった。これによって、私の彼女と話す意欲と信頼感が深まった。

意思決定支援は知識と信頼の問題でもある。私たちは特定の人々、しばしば親密に知り尽くした身近な人々を信頼するように決める。パートナーや兄弟姉妹、両親は誰よりも信頼する存在かもしれない。自分たちに起きていることに戸惑った時、私たちが頼る相手となるかもしれない。私たちが信頼しているからこそ、自分だけではできない意思決定を助けてくれる人々かもしれない。このように私たちをよく知る人々は、私たちが言葉に苦しむ時、私たちの希望や願い、人生や治療への恐れや不安を、他者に伝える生きた事前意思表明となり得るのである。

私たちの中には、それほど親しくない人を信頼することを容易にできる人もいる。信頼の形は様々で、時には相手との親密さや互いが感じる苦痛が、意思疎通や意思決定を困難にすることもある。このような状況では、親密ではないものの、同じように深く信頼できる人々の助言が必要になるであろう。

一方、支援する専門職に対して強い信頼を寄せ、彼らに自分に関する決定を代行したり共同で行ったりすることを望む人もいる。

意思決定支援や拘束に関する人々の見解については、mwcscot.org.uk にてオンラインでより詳しく閲覧可能である。

グッド・ニュース！

最後に、私を支援する専門家たちとの関係に関する話に戻ろう。

ここ数人の地域精神科看護師（CPN）は、私が先述した恐怖を乗り越える手助けをしてくれた。私に十分な信頼を与え、私をどう思っているかについてあまり心配しなくて済むようにしてくれたのである。事前指示書の作成を手伝ってくれた CPN もいれば、私の地雷原のような人生を乗り切る手助けをしてくれた CPN、また必要な時には病院に入院させてくれた CPN もいた。そして私はこの過程を通して彼らを信頼し続けてきた。

私が最初から疑念を抱き、敵意と不安に満ちた状態で彼らに接したにもかかわらず、彼らがどのように成功したかは分からない。私の人生には、私を尊重し、意見に耳を傾け、選択肢と説明を与え、人生の基盤が崩れ、全てが混沌と不眠に陥った時に私が逃げ込む避難所となってくれる人々がいる。それは彼らの専門性であるかもしれないし、たぶん彼らが日々示す人間性そのものであるかもしれない。

今の担当地域精神科看護師は、おそらくこれまでで最高の一人であるが、当初は彼女の真意が分からなかった。彼女と私のパートナーは子どもの話、ディズニープリンセスやテーマパークの話、夜のお出かけやアムステルダムでの休暇の話をしていた。私は心の中で、「それは結構なことだが、一体何の意味があるのか」と思った。

しかし、３年経った今、私は彼女を信頼していることに気づいた。そして、それは、日常の些細な話をしてくれたり、私や家族がリラックスできるように努めてくれたりするためである。最近、時々私も会話に加わり、彼女と話す時には熱くなることもある。私は、苦労している時も順調な時も、私が何も言わなくても彼女が察することができると気づき始めている。時には（疑念が忍び込む間もなく）自ら進んで自分の気持ちを伝えることもある。そして、彼女が具体的な質問をしてくる時、私はよく正直に答えられる。

彼女が人間としての温かさと時間を惜しまず、私という人間を尊重し信頼してくれたからこそ、私も彼女をほぼ信頼できるのである。もし事態が劇的に悪化したとしても、支援が得られるだけでなく、その支援の内容に私が関与でき、彼女は私が望む支援の形を理解してくれるであろう。

私の家族と周囲の支援者たちは、私の人生に計り知れない安定をもたらしてくれた。彼らは私の考えや願い、感情を理解し、かつ対応してくれるため、今では内面的な幻想に基づいて行動するという考え自体が、遠い昔のように感じるほどである。

これは、自由が制限されているものの、豊かで満足のいく人生を送るための支援が整っていることを意味している。同時に、ほぼあらゆる意思決定を望む時にでぉ、望むことを実行する能力と手段も持ち合わせている。周りには、私をよく理解している人々とチームがいる。私が服薬に関する意思決定ができなくても、それ以外のあらゆる意思決定は望む限りできる。

そして、この中で私のソーシャルワーカーが担う役割は、重要ではあるものの小さな部分である。私は彼女と頻繁に会うわけでもなく、会う時間も短いが、彼女は私の強制治療命令の必要性について徹底的に評価してくれている。彼女は適切な質問をし、私と私の状況についてよく把握している。彼女は私が自分の権利を知っていることも承知している（私は精神保健福祉委員会が作成した『権利を心に留めるガイダンス』の策定に関わった）。それでもなお、彼女は私が不服申し立てができること、代理人や弁護士を依頼できることを保障している。そして、彼女は私の居間に座って犬と遊んだり、私を知ろうとしたりして、短い時間ではあるが、ある種の絆を築こうとしてくれている。

（第７章：ヴィラーグ・ヴィクトル訳）

第８章

環境の持続可能性における関係性

インドにおける地方および中央政府政策に影響を与えるソーシャルワークの役割

スリガネシュ・ヴェンカタナラシア著

はじめに

環境の持続可能性は、社会の結束、そして社会の発展を達成するための重要な基盤となる。世界の多くの地域で水不足にかかわる問題がみられているが、実はインドは、都市部と農村部の両方において、危機的な水不足にあえいでいる国の１つである。

森林伐採、土地の浸食、気候変動による樹木被覆の減少により、気温は著しく上昇している。この環境問題は、都市部でみられる交通渋滞によってさらに悪化している。

こうした環境の変化はすべて、都市部と農村部の両方のコミュニティに影響を及ぼしている。すなわち、農業、家庭生活、産業への影響である。これは、次ページで示す国連の持続可能な開発目標のビジョンに示されており、人々、繁栄、平和、パートナーシップ、そして地球を結びつけている。そしてその相互関係は、ソーシャルワークと社会開発のためのグローバル・アジェンダを反映している。

地球を守るソーシャルワーカーの役割

グローバル･アジェンダの最後の報告書「コミュニティと環境の持続可能性の促進（2018年）」では、環境におけるソーシャルワーカーの役割を包括的に取り上げ、変化を実現するために人々と協力する上での重要な役割に対する認識を高めた。現段階においてこのアジェンダは、「何をするか」というより、「どのように行うか」に重点を置いている。ソーシャルワークを社会に適用する際に、変革に向けた取り組みにおける、関係性の活用を検討する。

私たちの出発点は、IFSW 憲章である。

パートナーシップ：

ソーシャルワークを必要とする人々や、彼らの地域社会と共に、内的および外的なパートナーシップを積極的に構築する。それは、社会サービスが人々の本来の強みを認め、その強みに基づいて、個人、家族、地域社会の願望を満たすためである。グローバルな連帯のためのパートナーシップももちろん、他の専門家や IFSW 内でのパートナーシップの構築も必要である。

以下は、さまざまなグループや個人の具体的な実践例となる。これらは、私たちが暮らす環境に焦点を当てることによって社会的公平をもたらすための奮闘とソーシャルアクションについて説明している。

持続可能な開発目標

インドのソーシャルワーカーたちは、SDGs の 17 つの目標についてどれくらいソーシャルワークがかかわる必要があるかを議論した。その結果、ほぼすべて項目に何らかのかかわりが求められると結論づけた。

優先事項は次のとおりである。

- 貧困をなくそう
- 飢餓をゼロに
- すべての人に健康と福祉を
- 質の高い教育をみんなに
- ジェンダー平等を実現しよう
- 安全な水とトイレを世界中に
- 働きがいも経済成長も
- 人や国の不平等をなくそう
- つくる責任つかう責任
- 陸の豊かさも守ろう
- 平和と公正をすべての人に
- パートナーシップで目標を達成しよう

さらに分析すると、ソーシャルワーカーらは以下の目標にも影響を与えることが示唆されている。

- 産業と技術革新の基盤をつくろう
- 気候変動に具体的な対策を
- 海中の豊かさを守ろう

水不足の圧力: ソーシャルワークと社会開発の課題

基本的な生存を上で述べた SDGs の 3 つ目の目標である「すべての人に健康と福祉を」に言い換えると、水不足の圧力の影響は、もはや各個人に対してのみならずコミュニティ全体の問題となってくる。つまり、特定の個人に対するソーシャルワークにとどまらず、コミュニティソーシャルワークやコミュニティ開発と連携し、機能しなければならない分野と

いえる。ソーシャルワーカーは、目の前の人々をとりまく状況を分析しながら、また、彼らと協働しながら、さまざまな関係性について熟慮しなければならない。すなわち、実体験をもつ当事者、さまざまな機関の職員、政治家など、市民社会で展開される多様な人間関係である。この分野におけるリスクは決して小さくない。水不足の圧力への対応が十分でなければ、気候変動による自然災害によって、大規模な移住をせざる得ない人々が大量に発生することになるだろう。

問題の規模

近年の分析によれば、巨大インフラプロジェクト、産業、都市化、鉱業、廃棄物、不適切な管理、農地の拡張などが示すように、環境には極度の負荷がかかっている。それがゆえ、湖や川の消失、不安定な降雨量、極端な干ばつや洪水、水不足、不衛生な環境など、水不足の圧力についての具体的な問題には枚挙にいとまがない。都市部では、交通、住宅、仕事などのあらゆる面でその影響が見られ、結果、生活の質の低下につながっているといえる。

現在、SDGs の 6 つ目の目標である「安全な水とトイレを世界中に」の達成のために、山、森林、湿地、川、帯水層、湖などの水に関連する生態系を保護および回復するための取り組みが、2020 年にむけて進行している。「安全な水とトイレを世界中に」は土地のマネジメントに関する SDGs の 15 番目の目標、「陸の豊かさも守ろう」を補完するもので、陸上生態系の保護、回復、持続可能な利用の促進、森林の持続可能な管理、砂漠化への対処、土地の劣化をくい止めて開拓すること、生物多様性の損失の阻止を目的としている。環境は相互に関連しているため、ソーシャルワーカーがもつ総合的な視点は、SDGs の達成に大いに貢献するといえる。

ウシリガギ・ハシル - 呼吸のための緑

このプロジェクトは、ソーシャルワーカーによって開始された。環境保護について若者を教育しつつ彼らの参加を得て、4 つの地区(コラー、チッカバラプラ、トゥマクル、ベングラウルの田舎)の共有地に 99 本の樹木を植えることとした。

このプロジェクトの事業規模は、2 年間にわたって約 1 万種類の苗木を植えることであった。丘陵地帯や乾燥地帯ではシードボール（種子、粘土、水を混ぜて作られたボール）が使用され、地元のコミュニティの協力によって労働力が提供された。

苗木の植樹:

コミュニティの人々を巻き込むために、水の保全を促進する公共教育プログラムなど、さまざまなアプローチが使用された。プロジェクトの拡大にともなってより多くの人々がかかわるようになり、「ユーカリの森」を求めるサイレントマーチの開催などにつながるなど、コミュニティはさらに活発化した。

「ユーカリの森」を求めるサイレントマーチ:（写真）

これによりコミュニティは、単一栽培の悪影響に関する研究の支援や、希少な水資源の管理に積極的に関わるようになっていった。

環境や水についてのリテラシーと、川を復活させるための闘い

ブームタイ・バラガ- 母なる大地の親族

ブームタイ・バラガは、水の保全とアルカヴァティ川の復活に焦点を当てている。その目的は、環境のための文化的革命を達成することである。

彼は、伝統的な「物語の語り」を活用して人々を引き込み、コミュニティを巻き込み、関係を構築して保全に取り組んでいる。路上での語りや歌を通じて、水と水域、木と森林、廃棄物管理、天然資源に対する地域および国の政策と実践、態度の変化などの問題に取り組んでいる。この取り組みに参加することで、個人の自立と自己決定が促進され、協働して問題と向き合い、協働して解決に向かえるという自信が生まれるといえる。そして、持続可能なコミュニティをサポートするコミュニティの責任が育まれる。

さまざまな関係性を通じて、この地域活動はソーシャルワーカーらの後押しによって支えられている。この地域活動は、NGO、CSR、政府、地域社会に認められているが、人々はこのような活動へのソーシャルワーカーらの後押しを通して、社会的な変革をもたらすソーシャルワークにはさまざまな形態があることを知る。

都市部コミュニティと環境の持続可能性：

バンガロールのキリスト教大学ソーシャルワーク学部によると、マプニティ（市民、役人、企業を結集して公共問題の解決を支援する、都市向けのソーシャルテクノロジープラットフォームのこと）による取り組みの１つとして、バンガロールの交通渋滞問題があげられる。急速な都市化により、住宅の過密化、交通公害、そして急増する人口に対応できないインフラ問題が発生した。

このような状況で、ソーシャルワーカーたちは自らのスキルを、IFSW 憲章のもう１つの目的のために活用してきた。

アドボカシー：

社会正義と個人、グループ、市民の文化的な人権を、世界、地域、国家レベルで擁護すること。専門的なソーシャルワークの価値、基準、倫理、人権、認識、養成と労働条件を擁護すること。

アドボカシーには、中央政府、州政府、市役所とのさまざまな関係性がひどく重要となる。これらの機関はそれぞれ独自の方法で互いに関係しあっているので、ソーシャルワーカー

たちはそれらを十分に考慮しなければならない。汚職や腐敗のない政策、法律、プログラム、プロジェクトをすすめていくためには、ソーシャルワーカーたちはそのような関係性を避けて通れない。そして最終的に、実体験を持つ専門家とともに取り組むアドボカシー活動を通じて、社会の変革が促進されるのである。したがってこれらの関係の誠実さは、変革の基礎となるのである。

SDGs の 3 つ目の目標である「すべての人に健康と福祉を」を強調するために、いくつかの実用的な提案がなされた。それは、交通渋滞の緩和と移動支援に重点を置いた生活の質にかかわる提案であった。ソーシャルワーカーによるアドボカシーの活動結果として提案された主要なアイデアは、次のとおりである。

- 携帯電話基地局ネットワークからの電話密度（電話回線）
- 市バスやその他の車両への GPS の搭載
- 警察による交通カメラの交差点への設置
- リアルタイムの交通状況の統合的な表示
- SMS102 による違反報告
- 事故多発地点のマッピング
- バンガロール交通情報システム
- 交通管理センター
- 歩道のための予算

ソーシャルワークの介入により、利害関係者は問題を自らの責任として捉える力を得た。それにより、利害関係者の間で問題に対する気づきが高まった。ソーシャルワーカーは、アクションリサーチを活用して、コミュニティ主導の地域変革を支援した。

結論

私たちはいくつかの結論に達した。まず、問題を特定し解決するには、農村部の若者とコミュニティの参加が鍵となることが明らかとなった。また、利害関係者の参加によって、問題に対する最適な解決策を導きやすくなることがわかった。

ソーシャルワーク手法の適用が効果的であることの十分なエビデンスはあるが、アドボカシーとロビー活動には、さらなるフォローアップが求められよう。

私たちは現在、他のコミュニティでもこのモデルを適用する準備を進めている。さらに、将来的な有効活用や評価のために、これまでの私たちの経験を文書にまとめたいと考えている。

（第８章：渡辺修宏訳）

第９章

コンプライエンス（命令遵守）かエンゲージメント（自発的貢献）か

―文化の横断　アフリカからヨーロッパへ―

ルース・スターク著

はじめに

移民が世界的な規模になってきたことにより、ソーシャルワークへの国際的なアプローチにおけるパラダイムの変更や知識の変化が起こってきた。

伝統的に、国を超えたソーシャルワークの実践の多様性については、文化が異なればアプローチも異なることが認識されてきた。それは個人から集合体に至るすべての局面でいえることである。個人中心のやり方への集中は、時として社会的アクションを中心とするやり方と異なるとみなされてきた。

大陸を超えて移動することは民族固有の地球問題となっている。それに伴い多くの教育や医療や社会の問題も移動する。それらの一つが、他者からの危害の危険にさらされている人を保護することである。国や居住地の中だけで保護するとことから、保護の内容を文化の違いや強制的移民の問題にまで広げるという考えは、現在のソーシャルワークの教育と実践を変えなければならないことを意味している。

国や文化を超えて移動する人々は、ソーシャルワークが掲げる様々なアプーチを体験することになるので、それらに関するエキスパートであるといえる。この章では、ある家族の移住の旅とその挑戦を見ていく。この家族は尊厳と尊敬と多様性を認める文化に移住してそこで関係を築こうと努力した。人は恐ろしい行動から逃れ、安全と安心を実感し、さらに平和で持続可能な地域社会に遭遇したときにのみ変化が可能であることを示している。

その家族は、平和と安全と安定を求めて世界を移動した。彼らの物語をとおして、個人と国家、コンプライエンス（命令遵守）と（あるいは）エンゲージメント（自発的貢献）、個人による虐待とシステムによる虐待の相互関係を検査することができる。また文化の多様性を学ぶ必要とその多様性による自分たちの変化にどう向き合うかが明らかにされる。またソーシャルワーカーの役割は虐待からの保護と予防にあることも明らかにされる。またミクロ、メゾ、マクロのソーシャルワーカーの役割の全体についての考察が進められる。

ミーティングでは、ソーシャルワーク全体の挑戦とスーパービジョンの問題と実践へのサポートが明らかにされた。それに加えて、社会保護システムを変えるために働いている他

の活動家とソーシャルワーカーがどのような積極的関係をもつ努力を行っているかが示された。

国際的な概念枠組み

IFSW は憲章、ソーシャルワークのグローバル定義、倫理原則についての国際宣言の三本柱により、実践が直面する諸問題を検証するための概念上の枠組みを提供する。

それは様々な議論を経て発展した。二つの姉妹団体である IASSW と IFSW との間においては、家族関係でもおこりうるように、一連の議論の後にようやく長年をかけて同意に至ったといういきさつがある。IASSW と IFSW が中心定義と倫理原則宣言の合意に達するために数年を要したことは、その仕事がいかに難しいかを示している。しかし、それらは今や完成し、グローバルな目標として合意され、専門職の基準とされている。

それと関連して、専門職への期待から、サービスをつくりだすために異なる職種の人々との関係がスタートしている。政府や政策立案者やその同じ政府と契約を結んでいる社会開発を目指す NGO や国際機関は、自分たちの資金が最もよく使われているかどうかを評価する個人や団体と複雑なマトリックスを形成している。

児童保護は多くの国で、地域社会におけるソーシャルワーカーの役割を考慮して政府が行わない仕事の主たるものとなっている。児童保護は一人一人の子どもとその権利に基づいてなされる。このことは国連による子どもの権利条約が批准されたことにより、より顕著となった。子どもを保護する義務は家族にあり、両親が自分たちの子どもに対する義務と責任を果たせないときにのみ国家が家族を代理する（第 3 条)。国によっては警察がより重要な役割を持っているところもある。最終的にはいまだ児童保護のシステムができていない国も存在している。これらの国は他の国の失敗を見てそこから学ぶことができるので最も幸運であるといえる。

倫理的背景

一般的に子どもや家族と直接にかかわる仕事をしていて、実践において関係を用いているソーシャルワーカーは、家族生活への介入にはしばしば倫理的なジレンマを伴う深刻で複雑な問題があることを心得ている。仕事において家族と地域

住民の権利が相いれないようなこともある。すべてのソーシャルワーカーの最初の目的は危害を受けることから保護し、危害を予防することである。このような信頼関係をつくる時に特に重要なのは、例えば両親が大人と子どもの接触についての文化的許容限度の一線を越えてしまったような場合に両親のもつ緊張や秘密を和らげるように支援することである。これは時として虐待についての調査者の意見と折り合わないことがある。意見書は結論的にそこで体験されたことを専門家に見せるためにつくられるが、国がソーシャルワーカーに付与しているパワーやコントロールとの葛藤もそこには存在している。

これらの双方の認識の違いは、ソーシャルワーカーが何をしても非難の対象となる。それが子どもの死や虐待に関する公の調査であればことによりはっきりと示されることになり、文化への嫌悪を増大させる危険がある。こうした状況の中で、「ケースマネジメント」が専門職の言語として主流となってきたことにより、ソーシャルワーカーも信頼関係を築く共同の仕事にかかわるようになってきている。われわれがもし倫理に基づく実践をさらに発展させたいと思うのであれば、ソーシャルワークのこのようなやり方を再検討する時に来ていると考えられる。

ソーシャルワークとガバナンス

ソーシャルワークの概念枠組みのもう一つの目的は、不安定な経済状況、独裁者、汚職、少数の金持ちと多数の貧者の間の極端なギャップへの対応を目指すことであった。問題を個人の問題としてではなく、集団の問題として見ることである。直面している環境で体験することに政治的な変化による解決が直接につながっている。これがしばしば市民暴動や移民の増大を引き起こす。人々とそのコミュニティへの弾圧は、新自由主義政策とその解決方法の結果であったので、それへの対策として集団的抗議が行われ、貧困と不平等をなくすために変化をもたらすような解決方法が求められている。

簡単ではないパラドックス

簡単ではないパラドックスをもたらすソーシャルワーカーの役割に関するこれらの異なる３つの視点についてはあまりオープンに議論されてこなかったが、実践者の思考や熟慮をたびたび虜にしてきた。今やこれらの異なる視点が相互に排他的なものかどうかについて専門職が議論する時が来ている。ソーシャルワークの目的の範囲を定める究極的な原則は、危害から人々を守り、すべての人に尊厳と尊敬を与えるだけではなく、インクルーシブで平和で、個人が決定できる、持続可能なコミュニティの発展をもたらすものでなければならない。

人々の選択か自己決定か

自分と家族の安全と安心をどのように確実にするかについて、人は個人的に決定する。葛藤や差別のために他の国への移住をせざるを得なくなる。そこは自分たちが育った国とは言語も文化も法律も異なっているであろう。こうした状況は近年、ラテンアメリカやヨーロッパやアフリカや中東やアジアで示された。彼らは自分たちのホームから逃げ出す決断をしたことによるトラウマを体験しているがそれだけではなく、彼らが飛び込む新しい世界は、彼らに対して、できるだけ早く、移民に関する行政のハードルを飛び越えるための術を学ぶ能力を要求する。それはほとんどの場合、家族や友人からの支援がなく、貧しい窮乏した地位から始めなければならない。

家族生活への国の介入

家族が自分の国から他の国へ移動するときに、家族のプライバシーへの国の介入についてそれぞれ違った介入の方法を体験している。

それに関する権限の多くは、国連の子どもの権利に関する条約に義務を負う国の政府から警察やソーシャルワーカーや児童保護の機関に委託される。どのように履行されるかは地域の解釈によるが、場合によっては国がガイドラインを定めている場合もある。

第３条

１　子どもにかかわるすべての活動は、それらが、公的あるいは民間福祉機関によるものであっても、裁判所や行政機関や法的団体が行うものであっても、第一に子どもの最善の利益が考慮されなければならない。

２　国家は、子どものウェルビーイングに必要な保護と世話を保障し、両親や法的後見人や子どもに法的責任を負うその他の個人の権利と義務を尊重し、必要なすべての法的、行政的政策を用意しなければならない。

３　国家は、子どものケアや保護にかかわる施設やサービスや担当部署が、特に子どもの安全と医療の分野で、また職員の数とさらに適切なスーパービジョンについて権威ある基準を満たしているということを保証しなければならない。

同時に国家は、両親がソーシャルワークや子どもの保護機関にかかわれるような支援を進める。

第 18 条

１　国家は、両親が子どものしつけや発達について共同の責任をもっているという原則を国が認めているということを、最大の努力をもって保証する。両親または法的後見人は、子どもの教育と発達の第一の責任者である。子どもの最善の利益こそが国家の最大の関心事である。

２　現行の条約が述べている権利の保障を促進するために、国家は両親と法的後見人が子どもを養育する責任を果たすことができるように適切な支援を提供し、子どもの保護のための施設や部署やサービスを発達させなければならない。

３　国家は、働く両親の子どもに、彼らに適した児童保護サービスと担当部局によるサービスを受ける権利があることを保証するために、あらゆる適切な制度を用意しなければならない。

UNCRC のこの 2 つの条文の中にすでにソーシャルワーク実践にとってのパラドックスを見ることができる。よく考えられた実践なしにこれらの条文を取り扱うのは危険である。ソーシャルワークの実践者だけにではなく、ソーシャルワークでわれわれがかかわる人にとってもダメージを与えることになる。危機の状況下では、生涯に及ぶ結果を考慮しないで危機に対する短期間の評価を行いがちである。それを防ぐためには発展を続けていかなければならない。

コンプライエンス（命令遵守）かエンゲージメント（自発的貢献）か

保護と予防を行うというソーシャルワーカーの役割を履行するためには、社会政策と実践のどちらにも関連しているコンプライエンスとエンゲージメントのパラダイムについてはっきりした理解をもつことがなによりも必要である。

ムボゲー家

ある若いカップルは、彼らの家族が彼らの結婚と子どもを産むことを許さなかったので、アフリカの自分たちの出身国から脱出した。女性はキリスト教徒で、男性はイスラム教徒であった。彼らが出会ったのは彼女が市民暴動から逃れ、自分の村に進軍する戦車を避けるために国境を越えて来たときである。16 年の間に子どもが 6 人生まれた。その間に彼らは貧困とホームレスと拘留と移民事務所の命令による UK 周辺のいろいろな都市への強制的移動を体験した。そしてようやく UK の中にとどまることが許可された。彼らはいろいろな機関で多くの体験をした。その対応は特別に素晴らしいものから非常に良くないものまで広い範囲にわたった。子どもたちのうち 2 人は自閉症スペクトラムと診断された。

移動が許可されると彼らは UK 内の他の地方の都市に移った。そこは法律も教育制度も違っていて、さらに、その土地の人やコミュニティと交わるためにはその土地の言語も習得しなければならなかった。ある自治体から別の自治体に移動するというこの難民希望の家族の典型的な背景があるにもかかわらず子どもの保護の問題が集中的に取り上げられた。私は裁判所が下す法的な決定が子どもの最大の利益を考慮したものであることを保証するために委託を受けていて、裁判の事例において子どもの保護についての調査を行うことにより、裁判事例に参加していた。

子どもの保護に関するこの物語はこの家族が新しいに都市に越してきてから 1 年後から始まる。当時家族は今とは別のより混雑した仮の住居に住み、新しい学校に通っていた。子どもたちは地域の文化の変化に苦しんだ。それは彼らの学校生活に影響を与えた。友達グループからのサポートが変化し、もう一度作り直さなければならなくなった。学校では、多分人種的な理由からいじめを体験した。彼らが両親に話し、学校に訴えたが、取り上げられる様子はなかった。この家族の環境の中で、すべての社会的ファクターが重荷となり、ストレスのレベルが高まった。ある日、子どもたちのうちの一人が悲惨な状態で学校に現れた。彼

女は言いつけられた用事の一つをしなかった理由で母親から叩かれたと語った。児童保護システムが適用されることになった。その子どもと彼女のきょうだいの何人かが教室から呼び出されて警察の関係者とソーシャルワーカーの面接を受けることになった。そのプロセスは政府のガイドラインに沿って行われた。教室から呼び出されたことで子どもたちへの聴取がすぐに他の子どもたちの注意をひくことになり、友達からも質問されて、運動場に人が集まってきた。

子どもたちはそれまで一度も会ったことのない警察官やソーシャルワーカーの面接を受けることになった。それはビデオにとられ、12か月後、虐待あるいは危害を受けた事実があったかどうかを確認するための裁判で開示された。それぞれの面接の最後に子どもたちは一人ずつ家にいて幸せと安心が感じられるかどうかが聞かれた。これは子どもたちが自発的に答えることができる唯一の質問であった。彼らは肯定的な答えをした。何か月もたってから子どもたちはその体験がどれほど恐ろしかったかを私に話してくれた。面接の間中どの子どもも非常に居心地が悪そうに見えた。質問にどう答えるべきかを迷っているようであった。それは真実を話したくないという理由からではなく、質問を理解することが困難だったからである。子どもたちはすぐに他のことや室内で起こる出来事に気を散らしてしまった。彼らはそれまでビデオで撮影されたという経験がなかった。

両親にこのことは２０日後まで知らされなかった。その間に両親は理由を尋ねることなく、子どもたちを診察に連れて行った。親にはその診察が彼らが子どもたちに危害を加えたかどうかを確定するためであるということは知らされていなかった。診察の結果は確定的なものではなかった。打撲や切り傷は遊びの中でも起こりうる。傷あともはっきり説明がつくようなものではなく、比較的軽いものであった。

政府によるガイドラインはシステムがとるべき過程について非常に明確に述べている。ガイドラインは完全に非個別的なものである。法システムが人権を擁護できるものであるために、その後のいかなる法的プロセスにおいても、証拠はそのままで扱わなければならない。子どもに対する危害があったかどうかについての最初の報告の時点から、ソーシャルワーカーは、彼らのコンプライエンスに関する調査とアセスメントは行ったが、非常にストレスが多く困難な生活環境の中で、両親としての責任を果たさなければならない人のエンゲージメントに関する調査とアセスメントは行っていなかった。子どもの側からみても親の立側からみてもその過程は不可解なものであった。彼らは不安と疑いをもつようになった。最初、彼らは非常に協力的であると報告されていたが、過程が進行するにつれて懐疑的になり、彼らは自分たちのプライバシーをより隠すようになった。

その年には重大な危機は続いていて、その時の状況が記録されていたので、裁判の開始の日程が計画されるようになった。信頼関係の欠如は最初の調査の段階からあった。それはソーシャルワーカーと家族の間の対立に発展していた。その状況は続き、最終的には、行き詰まりを認めざるを得ないとこにまで至った。ソーシャルワーカーは、ワーカーと家族はもはや一緒に仕事ができないような地点に到達してしまったと感じた。両親とワーカーとの間

には非難が飛び交い、子どもを保護するために考えられたはずのシステムは不安をもたらすものになった。メゾとマクロ・レベルのシステムからの虐待は、われわれが日常の仕事の渦に飲み込まれていたために見落とされた。

面接が行われていた年に家族は引っ越しをした。その家は前のように混雑するものではなかった。子どもたちは新しい学校に転校した。人種的な差別は減った。また前の年まで非常に落ち込んでいた母親は、今や地域のグループに参加し、英語を学ぶようになり、新しい学校や住宅の管理人からは優しい、子どもの世話をよくする人と見られるようになった。

裁判の過程が進むにしたがって、別の専門家達が子どもについて異なるアセスメントを行っていることが明らかになった。新しい学校は子ども達全員についても、また子ども達に対する親の愛や世話についても、非常に積極的に見ていた。教頭は次のように述べている。私も子どもが幸福そうで、子どもらしいケアを受けているとことを知った。これは、ソーシャルワーカーが子どもや家族と関係を持つことができずに、彼らについてのネガティブな事実を述べ、またそれを誇張して伝えたので、ソーシャルワーカーの子どもや家族との関係づくりに失敗したことに対する過剰な補償といえるものであったに違いない。

幸いにもその後家族はその都市の別の地域の永住できる住居に移ることになったので、ソーシャルワーカーの変更が確定した。しかしながら、もし違った方法がとられていたのであれば、あの疑いに満ちた不安な一年間は避けられたのでなかっただろうか。

私の見解と担当したソーシャルワーカーの見解との違いについての上司（senior manager）との振り返りの中で、上司はこのような振り返りの話し合いがもてたことを感謝した。私が反省しているのは、多くの同僚は反省的な実践のために時間を取れなかったり、それを優先していないということである。多くのソーシャルワーカーの実践でそのための時間と場所が失われている。

システム、法的プロセス、人権と社会正義　―ソーシャルワーカーの役割―

われわれが居心地のいい今の場所から飛びだすことができるならば、そこで得られる知識は素晴らしい学びのための道具になる。最初に問いただすべきことは、ミクロ・レベルでわれわれが何をどのように行うかということだけではなく、最前線にいる実践者に対するサポートやスーパービジョンの基礎についても正さなければならない。われわれ専門職として自分たちの視野をメゾやマクロの領域にまで高めなければならない。ひとびとを変化による参加の道へと招くことを困難にしている、専門職をとりまく障害について検討しなければならない。

ミクロ・レベル

ミクロ・レベルでしっかり確かめなければならないのは、われわれがどのように子どもたちやその家族に向き合ってきたかということである。彼らは自分たちが体験したことのエキスパートであるということを尊重すべきである。われわれはムボゲー家と一度は信頼関

係をもつことができた。彼らはアフリカから UK にやって来て、そこで尊厳と尊敬をもって扱われなかった時の苦しみの物語を分かち合ってくれた。

環境が急激に変化した最初の 18 年間に、家族が一緒にいられるためにどれだけ頑張ったかを認め、また最初に彼らが自分たちが生まれた国を離れた時や、その後、庇護が得られるだろうと期待したにもかかわらず、住む家や地域からの移動を余儀なくされ、貧困と欠乏を味わうことになった、移動の生活の中で味わったストレスとトラウマを認めることができていたなら事態は大きく変わっていたであろう。危害を加えるような事態を防ぐことができる援助関係がスタートできたかもしれない。

彼らは、自分たちの文化では問題にならない事実が裁判所で証拠として取り上げられたことに苦しんでいた。彼らが夕食を床に座って食べることに関して、ソーシャルワーカーはその事実を侮辱的なニュアンスで説明した。アフリカではごく当たり前のことが、異常であると説明された。こうした「違い」をきっかけにして、とくに子ども達との関係を築くことが困難になった。大人たちの仕事についての記録は素晴らしいものであり、地域への貢献を果たし、子ども達の幸せで笑顔あふれる家庭をつくっていたことなどがすべてが認められなかった。

仕事のプレッシャーが大きくなり、緊張がオーバーワークのソーシャルワーカーワーに防衛的な態度を取らせるようになると、他人からみたワーカーのイメージは傲慢で、専門的ではないようであった。日程が立て込んでいることを理由にして、簡略化が行われたり、面接やアセスメントは、人々が尊厳に欠けていると感じるような場所で行われたり、彼らの旅の歴史と今抱えている問題や希望や願望についての文脈についての聴取がされなかった。

生涯の旅を通して体験してきたトラウマの自覚は、自分たちの生活に立ちいってくる専門職に何を伝え、何を伝えないかの選択に影響を与えるであろう。危害や虐待の犠牲になっている子どもや大人は他人を信用することに慎重であるから、彼らの話を時間をかけて傾聴する謙虚さこそが関係を築く際に役立つものとなる。すでに彼らはより権力があり、コントロールする地位にある人と信頼についての最初の経験をしてきたのかもしれない。彼らが権威あると感じる人物に出会うと、彼らの目の前にはそのイメージが浮かんで来るのかもしれない。

メゾとマクロ・レベル

メゾとマクロ・レベルについて考察するならば、われわれはコンプライエンスとエンゲージメントとの間で関係をどのようにマネージすべきか。また、ソーシャルワーカーへの行政や雇用者からの期待についての説明責任と、持続的な変化をもたらす援助計画への参加を可能とするために必要な信頼関係を築くこととどのようにマネージすべきであろうか。人権に関するわれわれの干渉を点検しバランスを取らせようとする法システムとどうかかわるか。こうした外部からの影響は日常の仕事にどれだけ影響を与えるものか。一方で、システムが妨害的で虐待的な時に、われわれはアドボカシーという役割をどこまで広げること

きるか。

われわれはもう一度矛盾にぶつかる。一方で、われわれは人々に対して尊厳と尊敬を持って仕事をしていきたいのであるが、他方で、雇用主と政府から、危害を加える原因があるとされる人への調査やアセスメントが委託されている。すべての仕事において直接的な援助関係がみられたのは、予想される援助計画がコンプライエンスの概念や期待に合わせて作られる場合であり、エンゲージメントに合わせたものではなかった。ここでは倫理原則と倫理規範に関する国際文書が誠実な実践のための基本的な指針とならなければならない。

残念なことに、ガイドラインに関する記述や解釈も、ソーシャルワーカーに求められる矛盾した役割の認識に欠けているために、それが倫理的なジレンマの原因となっている。信頼関係を築くことと、証拠に何らかのよくない影響を与えないような客観性との間で綱渡りのような仕事をしているソーシャルワーカーは、すでに国や自治体のための権威ある人物像の役割を引き受けているのである。

社会的保護システム

これはわれわれに社会保護システムの検討への道を示している。それは社会保護システムを依存へと導くような救済の手段としてではなく、変化のための触媒となるようなソーシャルワーカーの役割の可能性を考えていくことである。社会保護システムにおけるソーシャルワーカーの役割に関する IFSW の政策声明（2016）は、ソーシャルワーカーに、「不平等を少なくして社会正義を確立することにより社会的な変化をもたらすような」実践を行うように励ましている。それは次のことを意味している。

社会保護システムは予防的で持続可能な効果をもつものでなければならない。個人や家族や地域社会の回復力を強化し、生活の危機に対応する能力を高めるものでなければならない。

政策は、ミクロ・レベルでも、政府や生活に関連した行政の政策と実践に影響を与えるようなマクロ・レベルでも、個人と家族と地域社会の利益と一致するように努める。どの国でもどの地方でも、この一致のバランスには社会と環境と文化の状況が反映される。

世界的な挑戦

社会的保護についてのこうした政策の適応が拡大すると、われわれの目の前には世界的なチャレンジや国や地方の境界を越えての移住という言葉が現れるようになった。個人、家族あるいはコミュニティが、国境を越えて安全と救済を求めることを余儀なくされたときに、どれほど多くの社会的保護システムを通らなければならないか。これに関しては 2020～2030 のグローバルアジェンでさらに詳しく見ていくことになるであろう。

（第９章：春見静子訳）

第１０章

ラテンアメリカのソーシャルワーク

ローリー・トゥルエル、シルヴァナ・マルティネス著

ラテンアメリカのソーシャルワークは、長く活気のある重要な歴史があるが、言葉の壁があるため、英語の文献ではその成果の紹介は限られている。グローバルな理解のさらなる妨げとなっているのは、ソーシャルワークの学術誌などの出版物が、コミュニティや社会、そしてそれらを超えた専門職の貢献に対する理解よりも、しばしば理論的・学術的な執筆活動に焦点をおいていることがある。

本章は、コスタリカ、エルサルバドル、キューバ、アルゼンチンにおける実例を取り上げる。それぞれのビネットの内容は、その実践の拠点である場所やコミュニティにおいて、本章の著者との直接の協議に基づいている。これらの事例は、貧困や資源の著しい不足といった背景を浮き彫りにしている。また、広範囲にわたる様々な人間関係はソーシャルワーカーの知恵、コミットメント、心温かさ、情熱、さらにはラテンアメリカのソーシャルワークが社会変革や社会正義に関する専門職のコミットメントと政治的な視点によって特徴づけられていることを描いている。

コスタリカ

国連と政府の援助によって人口の 38%が極度の貧困のまま続いた数十年の歴史をもつコスタリカのソーシャルワーカーは、国のダイナミクスを「援助」から持続可能な開発の仕組みに変えるために協働してきた。社会保障制度に関する彼らの分析結果は、政府の様々な部署を、「持続可能な開発のための人々との協働」という共通目標に向けて団結させる新法を提案して成長させるキャンペーンへとつながった。

この新しい法律は、プエンテ・アル・デサロロ（開発への架け橋）と呼ばれており、人権と、政府機関とコミュニティが協力して社会問題に取り組み、人々とコミュニティがその希望を叶えるよう共同で支援するというコミットメントに基づいている。

コスタリカのスラム街で働くクリスティアン・ロドリゲス・バランテスは、この法律が実際にどのように機能しているかを次のように説明している。彼によれば、「三層のモデルが基盤となっており、第一層では、すべての人々が自分の社会サービスの形成に関わるように働きかける。コミュニティは自分たちで解決策を見出す。これによって、人々が団結し、通常のサービスを超えた発想が生まれる。彼らは、暴力をなくすためのプログラム、子どもから大人にわたる女性のためのコミュニティ全体に広がるエンパワメント憲章、薬物防止クリニック、すべての世代のための基本的な学校教育などを求めている。選択肢を与えられる

と、人々はそれを選ぶことができる」。

第二層は能力の向上と創出を意味し、IT 研修、英語、子育てなどのコミュニティ教育プログラムを含む。「多くの人々にとって、教育は日常生活の一部となる」とバランテスは言う。

第三層は経済的自立で、雇用創出のためにビジネス界との協力が含まれている。「すべてのスラム街で起業支援が提供されている。人々は種を蒔き、育て、物を作る方法を知っており、様々なスキルをもっている。彼らが必要としているのはこれらのスキルの日常を超えた活用方法で、望みはビジネス計画スキルを身につけることである。」

本法は 2016 年に導入されたばかりであるが、調査では、翌年までに多次元貧困指数が41%削減されたことが明らかになっている。これは、政府や国連の追加資金なしで達成された。この成功に欠かせなかったのは、コミュニティに耳を傾け、何が変わるべきかをコミュニティが自ら分析するための援助であった。このように、変革プロセスにおける主体性に起因した原動力がコミュニティを変えた。

エルサルバドル

世界最大の暴力団問題を抱え、殺人率が最も高いエルサルバドルのソーシャルワーク実践は容易ではない。何万人もの子どもが保護者に捨てられ、虐待され、人身売買され、臓器摘出され、医療や教育サービスへのアクセスを拒否されている。

その社会的な背景は、25 年前に終結し、多くの人々が家を捨て、暴力と貧困から逃れる原因となった内戦にまで遡る。戦争中、多くの子どもたちが少年兵にさせられたが、その負の遺産は今日でも全国的に感じることができる。

相当な危険にも関わらず、エルサルバドルのソーシャルワーカーは問題に立ち向かっている。彼らは、警察が怖くて立ち入れないようなコミュニティで実践している。虐待され、自暴自棄になっている子どもに接触するため、暴力団のリーダーと交渉し、毎日命を危険に晒している。「選択の余地はない。」と現地のソーシャルワーカーが言っている。「私たちが何かをするか、子どもたちが殺されるまで搾取され続ける酷い生活を送るかのいずれかになる。」

2018 年、首都サンサルバドルにあるサルバドル児童青少年総合発達支援センターというソーシャルワーク主導の支援機関を訪問する機会があった。以前は表面的な援助を提供するだけで、社会問題の根本的な要因を無視していたこの支援機関を、ソーシャルワーカーは4 年かけて変えてきた。

現在、子どもたちを生みの親とつなげ、子どもの社会的・経済的な発達及びウェルビーイングについて家族に助言する様々なプログラムを提供している。ソーシャルワーカーの説明では、「親が自分の人生のコントロールを取り戻すように支援をする間、子どもにはしばしば、拡大家族のもとで一時的なケアを提供しなければならない。」

センターではコミュニティ・セラピーに取り組んでおり、人々が自分自身やコミュニティ

で起きている問題、そしてそれらの解決方法について話し合う安全な場を提供している。ソーシャルワーカーはそのプロセスのファシリテーターを担い、すべての参加者が尊重され、かつ敬意を払い、学び、貢献することを保証している。

エルサルバドルのソーシャルワーカーは、トラウマを抱えた青少年の支援プログラムも展開しているが、若者の自己決定権を認めているため、参加を希望する者だけに提供している。さらに、自分の人生を自分でコントロールできるようになるための教育プログラム、職業訓練、特別講座も主催している。ソーシャルワーカーの説明によれば、「これらのプログラムでは人々の語りを促す。『話をしなければ、病気になる。』とここではよく言うようにしている。」

「子どもだけでなく、コミュニティ全体のための変革や変化に焦点をおいている。」

キューバ

サーモン色とティール（青緑）色に塗られた家々が立ち並ぶ通りに、かつては裕福な植民地時代の行政官が住んでいたカサ・デル・アブエロがある。現在は、近隣の高齢者に無料のデイサービスを提供するソーシャルワーク支援のコミュニティセンターである。

カサ・デル・アブエロ（祖父母の家）は、ソビエト連邦の崩壊とアメリカの経済制裁によって国の経済が破綻した後、フィデル・カストロがキューバ人にケアと支援を提供するための社会改革の一環として設立した最初のこの種の施設である。

温かみのあるパステルカラーの建物と、湿度の高いカリブ海の風になびくキューバ国旗は、中で出会った心優しい人柄とよく一致している。89 歳になる会員のフリオは、植民地時代の邸宅を改造した館内を案内してくれた。彼女の説明によると、このコミュニティ主導の取り組みは、毎日、朝食と政治についてのディスカッションから始まる。次には、運動教室が続く。「長生きの秘訣は活動的な心と体である」と彼女は言う。

フィデル・カストロは、社会的にケアの初期取り組みの一環として、2000 年に本センターを開設した。カストロは、すべてのコミュニティにソーシャルワーカーを配置し、住民 1,500 人に対してソーシャルワーカー 1 人以上の割合を目指した。

なお、ソーシャルワーカーは、年 2 回の社会診断報告書を作成する責任ももっており、これらの報告書は地方及び全国行政に対して各担当コミュニティのニーズを知らせている。その結果、全年齢層の人々が保健医療や教育を受けられるように支援するためのケアプログラムの増設や資源の再編成が行われることも多い。

フリオによれば、「ソーシャルワーカーは、ここにいる一人ひとりとその家族との関係を築いて支えてくれている。もし家族がいないとしても、このセンターでは、新しい家族の一員であると感じられるように支援してくれている。」

キューバ・ソーシャルワーカー協会の職員は、この仕事の重要性と社会的な課題の背景について詳しく説明してくれた。高齢化はキューバ社会にとって重要な問題であると指摘した。革命以来、キューバの平均寿命は 20 歳以上延びたが、国際経済において孤立している

ため、キューバは高齢者人口とその全国民を支えるための資源の大幅な不足とも闘い続けている。したがって、健康、社会的なウェルビーイング、尊厳のレベルを維持するために、コミュニティ内の相互関係性を構築して支援するソーシャルワーク・モデルは、重要な要素となっている。カサ・デル・アブエロの 89 歳のメンバーも、これに全面的に同意している。

アルゼンチン

アルゼンチンの人々は苦労をよく知っている。植民地主義、外国による操作的な介入、独裁政権、政治的腐敗などの負の遺産は、朽ち果てた建物、壊れた車、公共交通機関の欠如に反映されている。例えばリオ・ネグロでは、貧困人口が 50%にも達しており、これらの問題は地方部の場合さらに深刻化している。リオ・ネグロや類似の州のソーシャルワーカーは、実践対象だけではなく、生活実態としてもこのような厳しい現実と向き合わざるを得ない。

ロカ総合病院のソーシャルワーク事務所を訪ねたが、そこにはソーシャルワーカーが自宅から持ってきたテーブルやその他の家具が置かれていた（もともとは架台の上に横たわっている古いドアしかなかった）。すべてのパソコン機材だけでなく、ペンキの剥げた天井に吊るされた電球もソーシャルワーカーが自宅から職場に持ち込んでいるものである。

ソーシャルワーカーによれば、ここは働きやすい労働環境ではなく、管理者や他の専門職はしばしばソーシャルワーカーの役割を理解していない。「人々が暴力の被害者として病院に搬送される際、医療的な対応と合わせて、家族やコミュニティへの社会的な介入まで含まないと、人々は何度も何度も運ばれてきて、その度に壊れていき、より多くの人々が傷ついてしまう」とソーシャルワーカーが語っている。

以上のような課題に直面しながらも、リオ・ネグロの保健医療ソーシャルワーカーは、雇用主や他の専門職の期待に逆らって、保健医療サービスの利用資格アセスメントに反対してきた。ソーシャルワーカーは次ように説明した。「誰にでも保健医療サービスを受ける人権があるため、差別的な仕組みに加担することを拒否した。」専門職運動を展開し、利用資格審査に参加しないことで、ソーシャルワーカーは専門職の倫理原則に基づいて行動した結果、現在は州の全住民が公的な保健医療を平等に受けられるようになっている。

これらの実例はどれも、ソーシャルワーク原則の具現化を力強く描いている。社会正義、自己決定、アドボカシー、そして人権が、すべての介入の特徴である。それぞれが、共同設計や共同策定が求められる様々な関係の複雑な多層性をよく表わしている。これらは、社会保障制度がいかに人々の生活を変革し、安心して暮らせる、安全で持続可能なコミュニティづくりを支援するために活用できるかを示す強力な実例である。

ソーシャルワーカーが専門性を発揮しているラテンアメリカの全コミュニティには、まだまだ数え切れないほどの実例がある。専門性と知識を共有するための言語や出版要件の課題を克服する解決策が今後も見出されること、また世界がこれらの実例から学び、交流するあらゆる機会をもつことを願っている。

（第１０章：ヴィラーグ・ヴィクトル訳）

第 11 章

人々と貧困と政治

ルース・スターク著

はじめに

マリアの物語は、ミクロ、メゾ、マクロの各レベルにおけるソーシャルワークの役割についてさらなる考察を促すものである。それは、「ソーシャルワークと社会開発のためのグローバル・アジェンダ」（2020～2030 年）を次の段階へ展開する中で、専門職が考慮すべき様々なタイプの関係性についての議論を提起するものである。

BBC ワールドサービスのラジオ番組で、仕事を求めてコロンビアに向かうためにベネズエラの街のバスターミナルにたどり着いたマリアの旅が紹介された。彼女は、自分と子どもたちの生活のために、毎晩そのバスターミナルから出発する 500 人のうちの 1 人だった。彼女は、自分と子どもたちが生活をしていくために、大陸を渡る多くの人々の一人である。彼女がおかれている状況は、過激主義、ポピュリズム、そして政治における傲慢さが、人々に与える影響を示す例として紹介されていた。それらは、貧困と困窮という現状を乗り越え魅力のあるコミュニティ開発に向けた変革をもたらす社会的保護の基盤の提供を妨げるものである。

マリア

3 人の子どもたちを友人に預け、マリアはバスに乗り込んだ。彼女は子どもたちを養うためにコロンビアで仕事を探し、仕事が見つかったら子どもたちを自分のもとに呼び寄せ一緒に暮らしたいと考えている。マリアは賢明であり必死でもある。

マリアと彼女の家族が抱えている極度の貧困は、その地域で暮らす成人の平均体重が食糧不足により過去 1 年間に少なくとも 10 キロ減少していることからも分かる。この体重減少の分布は不均等で貧困層に偏っている。多くの貧困層と少数の富裕層との格差は日々拡大している。

マリアの夫は最近、末っ子の養子縁組が決まったときに彼女のもとを去った。末っ子を妊娠し、無事出産するまでの費用は養父母が負担してくれた。そのおかげで家族全員を養うことができたが、そのお金も今は途絶えてしまった。このインタビューでは、母親や兄弟姉妹への感情面の影響や、夫への影響については言及されなかった。しかし、世界中のソーシャルワーカー達は、養子縁組が、公然にであれ密かにであれ、強制されて行われた場合には子どもたちや大人たちへ甚大な影響を与え得ることを知っている。養子縁組には養子縁組された人のアイデンティティが法的に変更されるという側面があり、それは別離以上の意味

を持つ。このことは、養子縁組後のサービスや司法、メンタルヘルスのサービスの場で働いてきたソーシャルワーカーによってよく認識されている。この法的なアイデンティティの変化は、家族の別離の悲しみと喪失感に拍車をかけ、家族一人ひとりにも家族の成員全体にも負担を増大させる。

隣国コロンビアではベネズエラからの難民にある程度の援助が行われているが、絶え間ない移民の波により、今や保健、教育、シェルターといった資源は危機的状況に達している。そのため、自国民の要求に応えることに苦労する国の内部では緊張が走っている。ラテンアメリカの一部の国では、特にベネズエラのパスポートを保持する人々への援助をすでに制限している。次の選挙が迫る中、緊縮財政の中でポピュリストの要求に応えようとする政治指導者たちは、将来の政治的地位を確保するために、しばしば配給制を行い資源へのアクセスを制限する。

マリアの物語は、ラテンアメリカだけでなく、世界のあらゆる地域に様々なレベルで存在している。彼女の体験談は、個人の経験がいかに世界的な問題と絡み合っているかを明確に示している。ソーシャルワークの活動は、個人レベルでも必要だが、貧富の差が拡大し、社会の陰に隠された人々が直面する問題を浮き彫りにする社会活動レベルでも必要である。それが効果的であるためには、ソーシャル・アクションソーシャルアクションは社会的な抗議以上のものでなければならない。

移住と金と政治....

多くの移民や、安全を求めて逃れる人々を表す言葉が、そのナラティブを決定づける。移民、不法移民、避難民、難民申請者とされることは、現に市民権を保持していない人とされる。彼らは社会保障制度から取り残され、それ以下で生存する。

アフリカ、アジア、中東、ヨーロッパでは、難民キャンプとされるテント張りの大規模な町や都市が新たに作られている。このような中立のオアシス（oases of neutrality）に取り残された人々は、独自の社会インフラ、サービス、経済、コミュニティを形成している。それらは、旅行ガイドや観光地としては紹介されない街である。

このような避難の聖所（heartlands of sanctuary）は、気候変動によって悪化する政治的不安定や紛争、戦争、自然災害のために生じている。それらは世界の中での新しいコミュニティの形成につながるが、未だ世界から孤立している。政治的不安定や権力と支配の乱用が、こうした事態の根底にあることが多い。私たちは土地、鉱物資源、石油の不適切な管理と濫用、そして破壊兵器への投資と取引によって支えられている経済を目の当たりにしている。腐敗が蔓延しているところでは、援助はシニシズムの対象となる。私たち地球の慎重な管理は、気候変動や汚染の問題だけでなく、生命を支える資源にかかわる問題でもある。包括的で持続可能な地域社会の発展は普遍的な課題であり、ソーシャルワークが果たす役割のひとつである。

社会開発におけるソーシャルワークの役割

マリアの状況のミクロ分析から、我々はソーシャルワーク実践にとって非常に重要なメゾとマクロの分析に移った。

ソーシャルワーカーや、実際の経験を持つ人々や、その他のパートナーたちは持続可能な開発に際して触媒の機能を持っている。それらの人々は挑発的で、私たちが当たり前としてきたナラティブの一部を変えようとしている。社会変革のために協働することは、他の種類の関係性を発展させることになるが、それは必ずしもポジティブなものばかりではない。

グループワーク理論やリーダーシップ・プログラムが氾濫し、あたかもこれらが変革への近道であるかのようにプロジェクトがつくられる。それらは短期間で行われ、さらに短期的な評価がなされるため、「即効性のある解決策」が常に可能であるという考えにつながってしまう。

貧困に苦しむ地域に住む人々の多くが、「援助ではなく、仕事による自立（trade）を」と言う。これは、実際の経験を持つ人々のフラストレーションを表している。前述の通り、マリアは社会的保護を得るためではなく仕事を得るためにコロンビアに移住しようとしている。保護を求める人々は仕事に従事することは、新しいコミュニティへ入るための出発点で、新しい人間関係を築くための基盤であると感じている。

人々が変化のプロセスの主体となることは、持続可能な変化に参画する人となる鍵である。アンガス・ディートン(2013)らはアジア、特にインドの例を挙げ、人々を貧困から脱却させるためには「仕事による自立（trade）であり、援助ではない」と述べている。

2017 年 12 月に北京で行われた、中国の民生大臣と IFSW 会長との会談において、経済の健全性を維持するためには国の社会的健全性が不可欠であるということが確認された。ソーシャルワーカーはこの分析に驚くであろうか。否、ただしそれを提起したのが政治家であったことに驚いたのであろう。

大臣にとっての重要な問題は、ケアと保護を必要とする人々を支えるインフラを備えた地域社会の開発のために、中央集権的なシステムの中に地域コミュニティをどのように関与させるかということであった。中国が行ってきた経済成長における変則的変革は、包括的な地域コミュニティを基盤とした社会保護の仕組みに人々を参画させるには至っていない。

それはすべての IFSW の加盟国において、健全な社会環境を支援するためには貧困や緊縮財政や貿易や予算などが影響しているという、IFSW 内部でのいくつかの議論と一致するものである。2014 年と 2016 年の総会では、国際貿易協定に焦点が当てられた。アメリカでトランプ大統領が当選した際に一部の合意が破棄されたため、この協定は遂行することはなかった。しかし、このプロセスにおいて、社会的健全性と経済的健全性の相互関係について大きな問題を提起した。社会的健全性と経済的健全性のバランスをどのように達成するかについての議論は依然として続いており、おそらくグローバル・アジェンダの次の段階のテーマとなるのではないか。

リーダーシップと変革

ワーキンググループでの人々の関係性の活用方法と並んで、起業家や経済学者の示す例は異なる視点を提供する。フレッド・コフマン（2018）はリーダーシップと変化について、「起業の旅は崖から飛び降り、降りる途中で飛行機を組み立てることから始まる」と述べる。時に、「ソーシャルワークの仕事は、一緒に崖から飛び降りるようなものだ！」と思える。例えば、マリアは自らの信念に基づいて行動し、ビジョンがある。彼女は変化の主体性をもっているが、私たちが考えなければならないのは、マリアと子どもたちの新しい生活のためにソーシャルワーカーとして一緒に取り組むチームの一員となるかどうか、またどのようにその一員となるかということである。

ソーシャルワークと政治の関係、そして環境の理解

社会・経済政策は、マクロ・レベルでの社会発展の推進力である。国内政治や国際政治は複雑であり、これらについて多くのことが述べられてきたし、今後も述べられるであろう。マリアと一緒に取り組む可能性のあるソーシャルワーカーとして、マリアの新しい生活に影響をあたえる政治的背景を理解する必要がある。これには、彼女自身や子どもたちのための社会的保護の制度利用も含まれる可能性がある。マリアの人生は不安定な政治情勢の下で営まれる。このことは彼女自身や、直接的もしくは間接的に出会う可能性のあるソーシャルワーカーや社会開発を担うワーカーにも影響を与えるだろう。彼女の場合、母国は政治的混乱に陥っているため、より大きな希望をもたらしてくれると期待する隣国に避難している。これら各国の政治家がもつ視座は、提供する社会保護と変革に影響を与えるだろう。

各国間の移動

マリアは隣国コロンビアに避難の場と仕事を求めた。2018 年 8 月、BBC ワールドの「Hard Talk」のインタビューで、コロンビアのイバン・ドゥケ大統領は、ベネズエラから渡航する人々を追い返すことはないと主張したが、国境を越える移民問題自体については国際的な問題と捉えていた。例えば、ベネズエラの政治的変革こそ、人々がベネズエラにとどまる希望を取り戻すための鍵であることを示唆している。インタビューアーができるかぎりコロンビアへの移民の影響という潜在的な国内問題に焦点を当てようとしたにもかかわらず、大統領はこの点に何度も立ち戻った。彼は、緊張が高まることを避けるため、コロンビアで受け入れることのできる移民の人数には限りがあることに触れたくなかった。その 2 か月後、コロンビアにおいて援助を受けられるのはパスポートを所持する正式な身分証明書のある人々に限定された。自国の問題に取り組むことは、他国の問題の解決方法に焦点を当てるより難しい。

ベネズエラで新たな選挙が実施されれば、人々は避難する必要がなくなるという考えは、タンカーのように方向転換するのに時間がかかる現在のベネズエラの経済的荒廃を認識していないものであった。

世界の多くの地域で、選挙プロセスが監視の対象となっている。不正な投票や選挙中の暴力がメディアによる放送で明らかにされている。南米の様々な国々では他の多くの地域と同様に内戦、汚職、麻薬、犯罪が歴史的、政治的な争いを激化させてきた。市民社会が変革にかかわるためには、リーダーシップの質そして権力と支配の乱用をなくすことがとても重要である。

2019 年のはじめに北米主導の国際的な介入が開始された。ドナルド・トランプの指導下におけるアメリカの外交政策の不安定さは、壁の建設に意欲を示す孤立主義から他国への介入へと揺れ動く矛盾を示し、政治的安定につながるものではなかった。

資源と貿易は、この変動の推進力に影響を与えている。しかし、世界中の国々でよく見られるように、市民社会の現実は、民兵組織、軍隊、警察、そして政治家間の力の不均衡といった国内の権力構造から強い影響を受ける。政治的空白があると、軍隊が権力と支配力を握ることが多い。ソーシャルワークのプロセスと同様、持続可能な変化は、外から押し付けられるのではなく、内部からもたらされなければならない。IFSW は 2019 年 2 月 4 日の声明で、この視点を明確に打ち出している。

国際的な視点

自国を追われることや、自然災害に見舞われることなどにより、人々は常に世界中を渡ってきた。そのような移動は追われる人々が通る国々で問題視され、そして人々はその国の国民よりも人間的に低く扱われた。この（私たち全員による）見落としは、私たちが意図せずして、一部の人々の命の価値を他の人々より高く置いていることを意味し、これにより人々が移動するきっかけとなった重大な精神的・身体的虐待を見過すごしたり、気づかなくすることがある。

戦争の惨禍と人々の避難は 1945 年の国連設立につながり、1948 年 12 月 10 日の人権宣言において人々の権利が国際的に合意された。国連は、持続可能な開発目標を通じて地球の存続のために皆が協力しなければならないという認識へと少しずつ前進させてきた。しかし、私たちは今なお２０世紀の古い問題、すなわち権力と支配の乱用と闘っている。“困難な状況に直面した時、人は現状に立ち戻る傾向があるが、その後信念を持った飛躍が次の段階へと導いてくれる”。(Donald Schon, 1973)

抑圧されていると感じる人々に「私はあなたの苦痛を理解して、その苦痛を癒すことができる」と約束するようなポピュリズムの台頭により、複雑な問題に対して安易な解決策が提起される結果となった。これら複雑な問題を簡単に解決できないことによるフラストレーションが、世界中で二極化した政治の台頭につながっている。

政治的発展におけるソーシャルワークの役割

ソーシャルワークの主な原理には人権と社会正義が含まれており、ソーシャルワーカーは個人のミクロ・レベルの問題だけでなく、こうしたマクロ・レベルでの問題解決の一端を

担う役割がある。

ソーシャルワーカーは、マリアのような状況に対して、いくつかのレベルでかかわることができる。ミクロ・レベルから見ると、マリアはすでに貧困と苦難を経験しているだけでなく、多くの人がトラウマによって無力化してしまうようなレベルの悲しみや喪失感にも向き合っている。しかし、その中で彼女にはビジョンと行動力がある。ある時点で、彼女はサポートや内省する時間、自分自身の幸福感を得る場を必要とする（これは、彼女が自分の子どもや家族の心の健康を支えるために重要である）。現在の彼女の状況では、生きていくために、これらを家族や地域社会から離れた場所で行わなければならない。そのような心の奥底にある葛藤を他の人と分かち合うことは、技術、知識そして人とのかかわりについての専門知識を持ち、代弁するソーシャルワーカーとの関係の中に見出される。政治家や権力とリーダーシップを持つ人々はマリアのような人々が経験していることを知る必要があり、いずれマリアの投票を求めるだろう。

しかし、ソーシャルワーカーは、人々が生活する環境が人々の生き方に大きな影響を与えることも認識している。グローバル・アジェンダの最終段階では、変革をもたらすためにメゾ・レベルとマクロ・レベルでの介入が必要となることの根拠が集められた。

ソーシャルワーカーは政治的議論という大きな舞台ではなく、紛争解決に静かに関与することが多い。そして政治的に関与するための準備は通常、ソーシャルワークの訓練や実践の一部ではない。（実践や教育の場には一部の“急進的な”ソーシャルワーカーが存在するが、ソーシャルワークの実践が政府によって資金提供されている国々では、過大な介入として抑制されることが多い）。しかし、もし貧困や政府の姿勢が社会的に孤立し発言力を持たない人々へ与える影響を目の当たりにしたならば、ソーシャルワーカーは行動を起こす必要があるのではないだろうか。メゾとマクロ・レベルにおける行動は、減少している国もあれば、拡大している国もある。世界全体で 300 万人のソーシャルワーカーが共に行動することで、社会正義を推進する強力な声を持つことができる。おそらく、パートナーシップの中でソーシャルワークの声を発展させることが、多くの人々にとって効果的であろう。

IFSW は、社会的保護におけるソーシャルワークの役割に関する政策開発（2016）で主導的な役割を果たしてきた。これは社会全体の広範な議論や専門的な言説に取り入れられる必要がある。国連によると多くの国で、国民の 60%以上が極度の貧困の中で生活している。大きな変化を達成するためには、短期的な解決策としての援助、チャリティと慈善活動から、革新的で持続可能な変化を達成するための世界的、地域的、そして個人の社会的責任というナラティブに焦点を当てる必要がある。

普遍的な倫理原則

グローバル化が国境を揺るがす中で、この変化を実現するためには市民社会が相互依存という倫理原則を理解し支持することが必要である。本質的にソーシャルワークは国境を

越えて活動するものであり、問題解決に主導的な役割を果たさなければならない。2018 年 12 月に日本で開催された会議において、IFSW のローリー・トゥルエル事務局長は、ソーシャルワークの役割のこの側面について提議した。端的に言えば、IFSW/IASSW の倫理原則に関する声明（2018）は、専門職の枠を超えた普遍性を持っている。現在一部の政治指導者は、従来から政府組織の縦割り構造に存在するギャップを埋めることで、社会的健康という課題に取り組もうとしている。ニュージーランドのジャシンダ・アーダーン首相は、ダボスで開催された世界経済フォーラム(2019)の討論会で次のように述べている。

> 現在の気候変動の脅威以上に、私たちの幸福を脅かすものがあるだろうか？GDP はあなたの国の繁栄を示すかもしれないが、環境を悪化させ、CO2 排出を助長しているのであれば、それは繁栄ではない。
> 今年初めて、私たちはウェルビーイングに関する予算を組み、成長のための成長だけではなく、国民の全体としての幸福やメンタルヘルスはどうなのか、、、環境はどうなのかを踏まえた意思決定を行う考えを盛り込んだ。これらは、私たちの成功の真の指標となるものです。

このような全体的な思考と政治的戦略は、包括的で持続可能なコミュニティ開発を補完し、促進するものであり、世界中の政治指導者と話し合うソーシャルワーカーが推進すべきモデルの一例である。

倫理が取り組む人々の関係性に与える影響

人々がソーシャルワーク専門職となる主な理由として挙げられるのは「社会に変化をもたらすこと」で、それは、様々なレベルで展開される。しかし、そのような変化を生み出すために行う取り組みには、核となる倫理原則が存在する。ソーシャルワーク専門職には、マリアとマリアの家族のような人々が、同じ人間として尊厳と尊敬をもって扱われるよう、様々なレベルで取り組む責任がある。これは、ソーシャルワークにおける倫理原則のグローバル声明（2018）の第一原則である。マリアの自己決定権（原則 4）と、家族や地域社会における人々との関係を享受する権利（原則 5）は尊重されなければならない。

第二の原則は人権、第三の原則は社会正義である。これら 2 つの原則は個人と市民社会との相互作用を表している。その複雑さにより、ソーシャルワーカーは例えば子どものニーズがその親のニーズと異なる場合など相反する人権上の問題に直面することになる。

ソーシャルワーカーが共有する個人や家族の悩みは非常にデリケートなものであり、プライバシーを尊重すること（原則 6、8）と、人々を一人の人間として全体的に捉えることが必要である。このアプローチにより、問題への表面的な解決策ではなく実質的で本質的な変化をもたらすことができる。マリアの人生には多くの問題があり、それらはすべて相互に関連している。

これらすべてにおいて、ソーシャルワーク専門職は誠実さを持って行動することが求められている（原則 9）。この原則には、ソーシャルワーカーが人々を危害や虐待から守るために 130 の国家および市民社会から与えられる固有の権限とコントロールする力について、理解することが含まれる。

協働によるデザインと協働による創造

この章は、ラテンアメリカのある国の一人の若い女性の物語から始まった。彼女がかかえるような虐待、貧困、排除、生き残ること、精神的、身体的そして感情的健康などにかかわる問題は社会の健全さが回復するにつれて、ソーシャルワークの介入につながる可能性がある。

それは、私たちが互いに関連し合っていることの議論へと展開され、そのうえで私たちの環境や地球との相互のつながりに焦点が当てられた。私たちはソーシャルワークの視点から、ミクロ、メゾ、マクロにおける検証を行った。

避難民となった人々から新たなコミュニティが形成されるというパラドックスを提起し、そして権力と支配の乱用が人々の生活にもたらす深刻な影響について論じた。

最後に、「ソーシャルワークにおける倫理原則のグローバル声明」についての省察で締めくくる。

マリアの物語は、グローバル・アジェンダを構成する平等、尊重、環境、そして人間関係を結びつけるものである。それは、ソーシャルワーク専門職が、次の 10 年の発展に向かうための複雑な課題を描き出している。

その目的は、人々と協働して変革をもたらし、全ての人にとってインクルーシブで持続可能なコミュニティを創造するために倫理原則を明確にし、倫理原則に基づいて行動することである。これは、ソーシャルワーク専門職や共に課題に取り組む人々にとっての個人としてそして集団としての挑戦である。

協働によるデザインと協働による創造というビジョンは、私たちが効果的な変化を実現する方法を根本的に変える可能性がある。

（第 11 章：木村潤訳）

第１２章

境界を越えるソーシャルワーク-未来に向けて-

ルース・スターク著

この最終章では、これまでの物語、省察・内省、構造的な諸問題や、ソーシャルワークの声、ソーシャルワーカーへの支援、これからのソーシャルワークの諸課題など、それら全部を絡み合わせながら私なりの考えをまとめてみたい。

ストーリーテリング(物語の伝言)

世界のどこで働いていようとも、ソーシャルワークは、これらすべての物語のバリエーションの中にその居場所を見つけることができる。これらは、人生において困難に直面している実在の人々と、彼/彼女らと共働するソーシャルワーカーに関わる物語であり、私たちが共に育む特別な関係性の中でその物語が存在している。このような関係性から私たちは、人々を被害者意識や依存から、私たち全員が共に暮らす地域社会の完全な貢献者へと人生を変容させることを可能にさせ、お互いに励ましあえる関係性が生まれるのである。

実践の多様性、様々なニーズへの対応、様々な対応の提供は、他の専門分野では見られないものがある。私たちは、社会保障の提供を含む、社会の健康の構築と社会の開発に焦点を当てている。そしてこれらが私たちのソーシャルワーカーとしての専門職の独自性でもある。

ソーシャルワーカーとして、またソーシャルワーク教育者として、私たちがしていることはローカルなことではあるが、ローカルな知識をリージョナル・グローバルに共有することは、私たちが互いに学び合い、持続可能なコミュニティの開発を支えるためのスキル、知識と専門性を提供する能力を高めることを意味している。人々は個々に、そして集団として、自分たちのビジョンを実現するための道を切り開いている。そして、私たちは彼/彼女らの旅に同行し、彼/彼女らの物語の一部に加わることを光栄に思う。生きた体験の専門家（訳注：当事者）の声はますます強くなり、専門職や市民社会はそれに耳を傾け、私たち自身の実践を未来のために適応さようとしている。

物語を通して国際的に知識を共有するという、新たな次元が広がりつつある。そのためには、専門職がパラダイムシフトを起こし、グローバル化を拒否するのではなく、受け入れる必要性が生まれる。気候変動、戦争、政治的多様性、自然災害、不平等といった課題は、人権と社会正義に対する専門職のコミットメントと相まって、私たちとともにあり、私たちはそれらに応えていかなければならないのである。

人間関係とケースマネジメント−嫌いなもの−

ケースマネジメントという概念は、ソーシャルワーカーからではなく、臨床医から借りたマネジメントの視点から、ソーシャルワークの言説に入り込んできたものである。このような非人間的な言葉を使うことで、タコツボ思考を助長・促進し、人間関係の利用を妨げているといえるかもしれない。もっとも乏しい資源がもたらす感情的な影響に対処する実践者にとっては、ある程度の保護になるかもしれない。

これは他の章でもっと早く取り上げることができたかもしれないが、専門職の人間性を失わせるような言葉の使い方が蔓延しているようである。この用語の廃止を将来的に検討することが、専門職への問いかけとして私がここに提起したい事柄でもある。

この用語は、年齢を問わず、施設、ケアホーム、刑務所、または血縁の家族と同居できない人であれば、どこにいても適用される。

例えば、施設入所時に、「ケース管理」を行う際に、重要な意味を持つ人々を除外することはあまりにも簡単である。例えば、保護経験のある若者にとって、それは里親が雇用されているか、給与が支払われているか、その若者を家族に含めているかといった議論に象徴されている。

たとえその養育者が日々の世話に直接関わらなくなったとしても、若者にとっては重要な存在であることに変わりはない。思春期の子どもは親を試すことが多く、保護経験のある子どもの場合、この大人への通過点はさらに不安定なものになる。多くの場合、若者は成長するにつれ、家族の外に慰めを求めるようになる。家族は非常に強い相互依存関係にある。若者は、その強烈な養育の温室の外にいる人たちとの関係を確認する必要性がある。少なくとも１年ごとにソーシャルワーカーが変わる保護経験者にとっては、耳を傾ける相手を見つけることは特に難しい。

高齢者が衰えるにつれ、他者への依存は同様の感情の混乱を伴うようになる。

居場所の崩壊に対応するために急がねばならないことは、別の安全な居場所を見つけることである。それはしばしば、便宜的な選択肢として家族を再評価したり、苦悩する人のために別の匿名の居場所を見つけたりすることにつながる。このような危機的状況にあるとき、その人は自分の身に起こっていることすべてを言葉で伝えることが難しいかもしれないが、パニックを「行動に移す」危機への対応を急ぐあまり、その人が経験している悲しみや喪失感に時間を割くことがどれだけあるだろうか。これらはすべて正常な感情であるにも関わらず。

このような場合、その人のマイナス面ばかりが強調され、ストレングスがどんどん埋もれてしまうことがよくある。

ソーシャルワーク、ソーシャルワーク教育、社会政策 − グローバル・アジェンダ −

社会開発におけるソーシャルワークの役割を示す「グローバル・アジェンダ」の展開のこの段階が終わりに近づくにつれ、私たちは、これまでのサービス提供モデルを超えて、また

国境を越えて、グローバル化した世界において、新たに私たちの専門職が社会開発に貢献できる事とは何なのかについて話し合う必要性が生まれてきた。

ソーシャルワークの発展(歴史)を理解すること

ソーシャルワークの将来を見据える上で、内省的学習は、私たちの実践の有益な部分を将来へと引き継ぎ、障壁を取り除くのに役立つであろう。

私たちが養成教育を受け、実践してきた自国において、ソーシャルワークがどのように発展してきたかを理解することから始めることが肝要である。ソーシャルワークは通常、国民経済や、長年にわたり様々な政府から選ばれてきた政策策定者たちの政治的意志、あるいは政府の行政部門として発展してきた。

一部の国では、宗教団体や NGO セクターの機能としてソーシャルワークは発展してきた。さらに最近では、北米で先駆的に始まった民間開業の成長が、他の大陸にまで拡大している。このようなサービス提供の複雑さの中で、ソーシャルワークは変化し、適応しているが、市民社会を支える経済的・政治的なインフラに依存したままである。これらの関係は、各当事者の責任の所在が異なるため、常に全般的なレベルと中間的なレベルで作用しあう複雑な関係下に置かれている。

ソーシャルワークの政治的関係

ソーシャルワークと政治は、何世代にもわたって絡み合ってきた。その愛憎関係は、社会開発、人権、社会正義に与えられる優先順位によって決まる。

マグナ・カルタ、憲法、人権宣言、ECHR(欧州人権裁判所)のような政治的条約にもかかわらず、政府は変革的な社会構造を構築するよりも、むしろ社会開発を規制しようとしてきた。マルクス主義は、異なる立場から、共産主義のプロセスを通じて、社会が資本主義モデルから社会主義社会モデルへと変容し、被抑圧者と抑圧者の対立に終止符が打たれ、「各々がその能力に応じて」から、「各々がその必要性に応じて」へと変革が起こると提唱してきた。

トマス・モアは 15 世紀に『ユートピア』という本を書きあげた。この本は、社会主義が前向きな目標であるだけでなく、実現可能かどうかという、今日でも続いている議論を引き起こしている。ギリシャ文明、インカ文明、ローマ文明、アッシリア文明、ビザンチウム文明、殷王朝文明など、哲学者たちが「理想の社会」について議論してきた。このアンソロジーは、そのような重い問題を解決するものではなく、単に内省を促し、人々に光を当て彼/彼女らが尊厳と尊重を経験できるよう、現在よりも良いものを達成するための将来への計画や行動を喚起することを目的としている。

ソーシャルワークの立ち位置は、普遍的な権利としての人権と社会正義という複雑なマトリクス(基盤)の中にある。私たちの闘いは、私たちが競合する人権とともに生きていることを理解し、説明することであり、ある人の社会正義の見方が別の人とは異なるかもしれな

いことを評価することでもある。

この非常に複雑なパラダイムに対して、ソーシャルワークは進化し、発展してきた。また歴史的には慈善と博愛から生じたニーズを特定し満たしてきた。これは、選挙で選ばれた民主主義であろうと独裁的な政治体制であろうと、普遍的なことである。ソーシャルワークの実践は、抗議や行動を通じて社会的ニーズに対する集団的闘争に焦点を当てることから始まったかもしれないが、多くの場合、時間をかけて個人のニーズに集中するように形成され、発展していく。

コミュニティ開発の政治的背景

対照的に、コミュニティ開発は企画者から始まる傾向があり、人々は彼/彼女らのビジョンに従うことを期待されている。スウェーデンにおける福祉国家の発展にしても、中国における中央政府による国家計画の発展にしても、政治的・経済的レベルでのガバナンスの変化を通じて、彼/彼女らはコミュニティとオープンに対話するようになった。スウェーデンではナショナリズムや右派政治が、中国では過去 20 年間の経済発展が、貧困から力強さへと私たちを導いた。

どちらのモデルも、社会サービス・システムを、変化への関与ではなく、コンプライアンスを重視して発展させる傾向がある。これは、管理者、政治家、実践者のフラストレーションにつながるが、何よりも人々が大きなフラストレーションを感じるのは、これらのシステムが「助けてあげる」ために設置されたものであるということである。というのも、その原動力は内的なものではなく、外的なものだからである。内部ではなく外部だからである。自動車製造における外から取り入れた内燃機関の変化によって一変したように！

国際労働機関（ILO）は、社会保障制度の原動力となった。数十年にわたる努力の結果、1952 年の社会保障（最低基準）条約（第 102 号）に基づき、普遍的な基準を設定する 2012 年の宣言 202 号が出された。IFSW は、包摂的で持続可能な開発を発展させるための変化を生み出すのではなく、現状維持の依存モデルを強化するという点で、遵守レベルを設定するという構成に異議を唱えてきた。IFSW の政策文書の『社会保障におけるソーシャルワークの役割』（2016 年）において、この課題が説明されている。これは、変化をどのように達成するかについての議論の始まりに過ぎず、前進を遂げるためには、その政策を行動に移す必要性がある。

社会的、経済的、政治的発展はすべて相互に関連している。イギリスでは、クレメント・アトリーが『ソーシャルワーカー』（1920 年）の中で、ソーシャルワーカーの役割を、変革のための社会的扇動者を包含するものとして記述し、そして、彼はこの相互関係を理解した。ジェーン・アダムス（Jane Addams, 1907）も同様に、女性が選挙権を求めると同時に慈善活動や博愛活動でより重要な役割を果たしていた当時、経済、市民社会、政治における女性の役割は、持続的な地域社会の発展を達成する上で重要であり、また不可欠であるとして行動したのである。

ソーシャルワーク教育

ソーシャルワーク教育における現在の言説は、ソーシャルワークの実践と政策立案のためのジレンマと並行して、また連携して考えるべき興味深いパラダイムを提供している。

ソーシャルワーク教育の確立は、世界中の大学で様々な 100 周年を迎えようとしている。研究と、社会変革を達成するための最善の方法についての理論的概念を発展させるのと同時に、これらの機関の多くは、実践から教育への情報を取り入れる慈善的な集団を発展させ、運営してきた。ジェーン・アダムスの著作と実践の展開は、ハル・ハウスと切っても切れない関係にある。政府が新しいグローバル・システムに沿った社会保障システムを構築するにつれて、これらのセツルメントは、地方自治体や中央政府が運営する、あるいは少なくともその費用を負担する社会サービス組織によって凌駕されるようになった。インフラストラクチャーの変化が、社会行政や社会工学を主とするサービスの発展に役立ったということなのだろうか。

ソーシャルワーク教育者が現在直面しているパラドックスの一つは、彼/彼女らは誰のために存在しているのか、ということである。専門職なのか、高等教育機関なのか、ソーシャルワーク・サービスに携わる人々なのか、市民社会なのか。「笛吹きに金を払うものが曲を注文する（訳注：金を出す者に決定権がある）」という言葉が思い浮かぶ。近年、ラテンアメリカの大学において、学問分野としてのソーシャルワークが保健医療系に位置づけられた際、ユネスコとの議論や討議があった。他の地域では、ソーシャルワークは教育学、社会政策学、社会学、心理学と結びついたり、大学組織の様々なタコツボを通して広がっていたりする。科学の一分野とされることもあれば、人文科学の一分野とされることもある。応用専門職として、ソーシャルワークを伝統的な学問分野の一つに限定することは難しいのである。このパラドックスは、全人的なアプローチを用いることで最大の成果をあげるソーシャルワーカーのビジョンと合致する。

高等教育機関は現在、学生獲得をめぐる世界的な競争の中にある。多くの国々で、資格取得後最初の 2 年間におけるソーシャルワーカー卒業生の離職率は、現在約 33%である。ソーシャルワーカーは、多くの国々で政治家が管理する公的資金によって賄われている。これはしばしば直接的あるいは NGO への委託契約による社会管理の方法である。100 年を経た今、ソーシャルワークと社会開発の進むべき道について、政治家、政策立案者、市民社会とともに、生きた体験を持つ専門家、ソーシャルワーク実践者、そして教育者として考え直すべき時が到来してきたようである。

ソーシャルワーク教育の課題は、高等教育分野における大学のニーズに応えるだけでなく、専門職が、社会開発、社会的、経済的、政治的健全性にとっても重要な、外の世界におけるより広範な応用範囲と課題を持っていることを認識することである。学生たちは、自分たちの世界を変えるためにこの課程に入学するのである。

ソーシャルワーク研究

ソーシャルワーク研究は、大学組織内、政府部門、または評価業務において行われる傾向がある。何が効果的かを明らかにするために、研究を行うことは重要である。その研究に不可欠なのは、問うべき重要な質問課題を形成するところにある。

ニュージーランドのジャシンダ・アーデン（Jacinda Arden）首相は、自国に倫理的に包摂された社会を作るために、財政的措置と並行して福祉的措置を導入しようとしている。ソーシャルワーク研究は、この政策の成果を評価する手助けに焦点を当てなければならない。これらは現実世界である。文献調査をしたり、教科書を書いたり、政府や政策立案者に助言を与えたりする際、そのエビデンスは実践の草の根にどれだけ近いところにあるのだろうか？経験を通じた専門家は、どれくらいの頻度で質問を投げかけているのだろうか？誰がどのような目的のために研究費を出しているのであろうか。

現在の研究を利用しようとするソーシャルワーク実践者にとっての最大の問題の一つは、現在の研究トピックや研究を支配している短期的でタコツボ化された見方である。しかし、実践の現実は非常に複雑な状況下におかれている。政策に反映される研究がどのように形成されるかを振り返る時でもある。例えば、政府の縦割り組織から委託された研究は、実際の問題を複雑にしている。同じ家族やコミュニティの異なるメンバーに影響を与える競合する政策や実践は、社会内の分断につながっている。それは、関与よりもむしろ遵守を促している。コンプライアンスが根本的な問題に対処できない場合、フラストレーションは分極化と対立につながるのである。

1928 年

ソーシャルワークに関する第 1 回国際会議が 1928 年にパリで開かれ、国際ソーシャルワーカー連盟の設立が合意された。実践、教育、政策を発展させるために、三つの委員会が設置された。

その後、世界大戦を挟み、1950 年代にかけてその糸が拾い上げられたが、その頃には 一つではなく、三つの別々の組織になっていた。今日、これらの組織は IASSW（教育）、ICSW（政策）、IFSW（実践）となっている。1958 年、IFSW はそのパートナーとともに雑誌『International Social Work』を発行したが、それぞれのアイデンティティと組織体制は維持したままであった。

二つの世界大戦の出来事が、世界的に異なるタイプの政治を動かしていた。国連の成立と人権宣言は、新たな政治的構築物を打ち立てた。グローバル化が誕生したのである。その構築物は、経済における世界的な関与のルール、各人の尊厳と尊重、そして国際条約や条約の策定において締約国が内外にどのように振る舞うべきかという側面に関するこの新しい集団への加盟基準を発展させた。

1959 年、IFSW は国連経済社会理事会（ECOSOC）の諮問資格が与えられた。これは、戦後の難民危機におけるソーシャルワークの成功に導くものであった。

自分の裏庭から始まる

このアンソロジーに収められているそれぞれの物語は、一枚のスナップショットから始まり、やがて生涯へと展開していく。それはまるで、長編映画の予告編を見るようである。生きた体験の専門家、ソーシャルワーク実践者、政策策定者、そしてソーシャルワーク教育者が、建設的な関係の中で一つになることは、私たちの専門職の発展において、いつにもまして重要なことである。世界ソーシャルワーク・デー・ニューヨーク（2018 年）で強調された教育、政策、実践の間のこのギャップは、エベレストの氷河のように見えるかもしれないが、今こそ越えなければならない。

ソーシャルワーカーが、例えばアリ（第２章）と、マリアの生きざまと、あるいはムゴベ一家の状況(第 11 章)と、どのように関連させていけるかは、要するに私たちみんなが注目しなければならない事柄の代表例なのである。私たちの専門外の人々や 1928 年の先人たちに対して、なぜ私たちが一つの専門職において三つの国際団体を持つのかを理解することは、社会開発の構築を支援するというソーシャルワークが直面する真の課題から目をそらすような関係維持のためのレイヤー(層)を重ね合わせることになるのである。

ソーシャルワーカーへの支援

良い実践の鍵であるソーシャルワーカーの健康を守るための資源は、予算減少を担当する管理職たちによって真っ先に無視される。ソーシャルワーカーのサービスを利用する人々は、自分自身が良い状態にある人と関わりを持とうとする。彼/彼女らは、燃え尽きたソーシャルワーカーとは関わろうとはしない。

常にリスク回避の欠陥モデルで仕事をすることは、成功の秘訣ではない。競合する人権の連続に直面したとき、社会正義を達成するために常に努力することは困難である。スーパービジョンと支援は、高水準のサービスを維持するために不可欠なものだと多くの雇用主は考えているが、予算が減少していたり限られていたりすると、やはり他のニーズが優先される。支援が監視に変わってしまうことがあまりにも多いのである。

危機という現実的な問題から距離を置くことで、計画や行動に全員の意見や提案を取り入れることができる。感情の起伏に常に対処するためには、内省と支持的な話し合いや指導の時間が必要である。倫理的実践の複雑さには、共同設計、共同生産、誠実な意思決定のための健全な作業実践が必要である。

リスク回避的で階層的な管理構造における 1-1 モデルの腐敗は、変化のための内省的で専門的な関与を促進するよりも、むしろ指示による服従に向かいがちである。興味深いことに、SCIE(文献引索ﾌｧｲﾙ)が 2013 年に行った調査によると、このモデルが発展したサービスを利用する人々は、スーパービジョンを疑いの目で見ているという。彼/彼女らは、自分たちが参加できない意思決定の場を認識している。

いくつかの国では、ソーシャルワークの士気と公共イメージを高めるために、表彰式が盛

んである。授賞式がうまく機能すれば、その効果は大きい。しかし、ソーシャルワークよりもソーシャルケアを評価する方が簡単であり、ケアモデルが優位に立つようなケースでは、ソーシャルワーカーによる変革に向けた共同作業は影を潜めることになる。

2019 年 2 月、国際ソーシャルワーカー連盟（IFSW）とバース・スパ大学健康認知センター（アルスター大学ソーシャルワーク学科と連携）は、世界中のソーシャルワーカーの日常的な労働環境にスポットライトを当てることを目的とした、新しい研究パートナーシップの基礎となる覚書に合意した。これは実践者の将来形成を手助けする歓迎すべき取り組みである。

ソーシャルワーカーの声

ソーシャルワークの社会的イメージは、ソーシャルワーカーが専門職団体や職場でプライベートに語る問題として長い間取り上げられてきた。ソーシャルワーカーは一般的に「自分のことを褒める」ことには消極的であるが、これは「変化をもたらす」ためにこの職業に就く多くの人々の動機を考えれば理解することができる。彼/彼女らは静かに仕事をやり遂げようと試みるが、むしろそれで仕事を失ってしまうはめになる。

守秘義務の原則によってこれらの物語を語ることをためらうことになる。しかし本来ならばこれらの物語はしばしば個々の実践者に仕事をし続ける意志を与えている。そしてこれはそもそも離職が多いソーシャルワーク・コミュニティの中で起きていることである。この沈黙の中で、私たちはコミュニティの結束を支える職業の価値を伝えることができてはいない。

これは逆効果で、政府は教育や医療サービスでは国民が容認しない方法で社会インフラへの公共支出を簡単に削減することができてしまう。私たちが直面している矛盾について公に沈黙していることは、強力で持続可能なコミュニティを支える社会的健康の構築と維持におけるソーシャルワークの重要な役割について、市民社会や政策策定者と十分に話し合うことを妨げることにつながっているのである。

私たちの課題の一つは、より開かれた社会的対話に参加することでより良い関係を築くことにある。役に立つかもしれない議論としては、次のようなものが挙げられる。

- ソーシャルワークの「語り」としての価値をしっかりと読み解くこと。これには人間関係に対する新しいアプローチが必要になる。
- ソーシャルワークの役割について話し合い、社会の健康が経済の健全性の発展に不可欠であることを認識する。家族を養い、社会経済に貢献するためには、人々は良好な状態になければならない。
- ソーシャルワークを、それが潜む「思いやり」や慈善事業のイメージの影から、地域社会の最も複雑な問題の現実を明らかにするものへと移行する。

・ ソーシャルワーカーの鋭い分析力に焦点を当て、人々が生活環境に関する横断的な知識に基づいて、自分たちの生活をどのように変えたいかを自問し、変化のための選択を行えるようにする。
・ ソーシャルワーク教育によって支えられる知的および個人的な対人スキルの開発がいかに重要であるかを説明する。
・ ソーシャルワークの実践と、生きた体験の専門家となった人々が協力して、複雑な世界に対してより洗練された功明なアプローチをどのように開発できるかを示す。
・ グローバルに変化する世界において、平和的・持続可能かつ進化するコミュニティを規制するために民主的に発展してきた法律や規制に定められた義務と責任の文脈において、個人のニーズと希望によってもたらされるパラドックスを乗り越えるために、新しいパラダイムを進化させる必要性がある。

メゾおよびマクロ・レベルの影響を考慮しながら、ミクロ・レベルでの疎外、不信、排除を避けるために人々の話に耳を傾け、関与することが重要である。人々は文化間の移行の複雑さに巻き込まれる仕組みを探ろうとする。気候変動、紛争、貧困などにより、故郷を離れざるを得ない人々が増えるにつれ、私たちの新しい発展途上のコミュニティは、私たち全員が楽しめる平和で生産的な環境の基盤となるが、これがどのように起こるかはトラウマになる可能性もある。ソーシャルワークは、各個人を考慮し尊重するだけでなく、私たちの世界でどのように結束を築くことができるかを理解する文脈でこれを行うために、パラダイムシフトを行う必要性がある。関係構築は、人権と社会正義を尊重しながら、個人とコミュニティの間の結束を築くための自然的な要素なのである。

最終メモ

今後、IFSW において、各地域でこれらの証拠となるものが収集され、ソーシャルワーカーとして私たちが世界に何をもたらすかが示されるであろう。世界中の実践者と生きた体験の専門家の両方の同僚が、私たちの共同設計と共同制作を強化するために、いくつかの初期の物語を共有してきた。私たちは皆、変化をもたらすためにここに結集しているのである。

追記

ソーシャルワークの専門職は、ジェーン・アダムスとクレム・アトリーの著作を再検討すべき時が来ている。彼/彼女らは、内省的な実践を用いて変化を実現するソーシャル・アジテーター(社会的指導者)の役割を、平和で包摂的な持続可能なコミュニティの構築を支援するなかで重要な役割と見なす専門職の形成に努めてきた人々なのである。

（第 12 章：桂良太郎訳）

文献一覧

第 1 章
Maslow, A. H. (1943). A Theory of Human Motivation. Psychological Review, 50(4), 370-96.
Maslow, A. H. (1954). Motivation and personality. New York: Harper and Row.

第 2 章 https://www.ifsw.org/the-role-of-social-work-in-social-protectionsystems-the-universal-right-to-social-protection/

Shakespeare W, *The Merchant of Venice, in the Complete Works of William Shakespeare*,
http://www.gov.scot/Publications/2004/03/19113/34720

第 3 章 Deivam, M (2008). *Self – Help groups in Tamilnadu : An identity for women empowerment* : The Indian Journal of Political Science. Vol.LXIX, No.1, Jan-Mar.

Duflo, Esther. (2012), *"Women empowerment and Economic Development"*, Journal of Economic Literature, Vol.50, No.4, pp. 1051-1079. American Economic Association Publication.

Kumar, Raj. (2000), *"Violence against women"*, Anmol Publications, Pvt. Ltd, New Delhi.

Sen, A (1999) *Development as Freedom*, New York: Alfred A. Knopf.
http://csa.christuniversity.in

第 4 章 http://www.gov.scot/Publications/2004/03/19113/34720

第 5 章 Active ageing of migrant elders good practice in Europe. Ministry for Intergenerational Affairs, Family, Women and Integration of the State of North Rhine-Westphalia. (2010). *Active Ageing of Migrant Elders Good Practice in Europe*.

Ageing. (2019). Retrieved from http://www.un.org/en/sections/issuesdepth/ageing/ [Accessed 21 Feb. 2019].

Ifsw.org. (2016). *IFSW Statement from The Solidarity Symposium on Social Work and Austerity | International Federation of Social Workers.* [online] Available at: http://ifsw.org/news/ifsw-statement-from-the-solidaritysymposium-on-social-work-and-austerity// [Accessed 24 Feb. 2019].

Kristiansen, M., Razum, O., Tezcan-Güntekin, H., & Krasnik, A. (2016). Aging and health among migrants in a European perspective. *Public Health Reviews*, 37(1). doi: 10.1186/s40985-016-0036-1

Lawrence, S., & Torres, S. (2016). *Older people and migration*. London: Routledge.

Markides, Kyriakos & Angel, Ronald & Peek, M.K.. (2013). Aging, health, and families in the hispanic population: Evolution of a paradigm. Kinship and Cohort in an Aging Society: From Generation to Generation. 314-332.

Rote, S. (2019). Aging, Social Relationships, and Health among Older Immigrants | American Society on Aging. Retrieved from https://www.asaging.org/blog/aging-social-relationships-and-healthamong-older-immigrants [Accessed 23 Feb. 2019].

Truell, R. (2016). *It is time to focus on the rights at the heart of social work. The Guardian*. [online] Available at:

https://www.theguardian.com/socialcare-network/2016/dec/09/it-is-time-to-focus-on-the-human-rights-atthe-heart-of-social-work
[Accessed 21 Feb. 2019].

Verhagen, I., Ros, W., Steunenberg, B., & de Wit, N. (2013). Culturally sensitive care for elderly immigrants through ethnic community health workers: design and development of a community based intervention programme in the Netherlands. *BMC Public Health*, 13(1). doi: 10.1186/1471-2458-13-227

Wilkins, D. (2019). Past, Present, Future. Retrieved from https://www.priae.org/index.php?option=com_content&view=article&id=62&Itemid=88
[Accessed 24 Feb. 2019].

World Forum of Non-Governmental Organization on Ageing: Final Declaration and Recommendatios. (2002). *Revista Española De Geriatría Y Gerontología*, 37(52), 66-72.

第 7 章 Morgan, G (2108) *Start*, Fledgling Press

Mental Welfare Commission Scotland (2016) Good Practice Guide, https://www.mwcscot.org.uk/media/348023/mwc_sdm_draft_gp_guide_10__post_board__jw_final.pdf

https://www.mwcscot.org.uk/rights-in-mind/

https://www.mwcscot.org.uk/the-law/mental-health-act/independent-advocacy/

https://www.mwcscot.org.uk/get-help/getting-treatment/advance-statements/

https://www.mwcscot.org.uk/law-and-rights/adults-incapacity-act#280

第 8 章 https://www.whocaresscotland.org/who-we-are/blog/when-it-comes-to-supporting-care-experienced-people-dont-forget-the-nod/
(1/9/18)

www.whocaresscotland.org/who-we-are/blog/nobodys-child/
(13.9.18)

https://www.whocaresscotland.org/what-we-do/campaigns/global-care-family-gathering/
October 2018

https://www.bbc.co.uk/news/uk-scotland-46564865
(December 2018)

https://www.ifsw.org/the-mana-whanau-programme/
(December 2018)

第 9 章 IFSW Constitution (2016) https://www.ifsw.org/wp-content/uploads/ifswcdn/assets/ifsw_10741-10.pdf

Global Agenda for Social Work and Social Development: 3rd Report
Promoting Community and Environmental Sustainability 2016 ed David Jones

第 11 章 Deaton, Angus The Great Escape: *Health, Wealth, and the Origins of Inequality* Princeton University 2013

Kofman, Fred The Meaning Revolution: *The Power of Transcendent Leadership* WM Allan 2018

Schon, D *Beyond the Stable State*, Norton & Co (1973)

https://www.weforum.org/agenda/2019/01/jacinda-ardern

https://www.bbc.co.uk/iplayer/episode/b0bgfz3c/hardtalk-ivan-duquepresident-of-colombia

https://www.ifsw.org/for-democracy-social-justice-and-the-end-of-international-manipulation-in-venezuela/

第 12 章 Jane Addams, "Utilization of Women in City Government", Chapter 7 in *Newer Ideals of Peace*, New York: Macmillan (1907)

Clement Attlee The Social Worker originally published 1920; Classic Reprints, Forgotten Books reprinted 2018

訳者一覧及び訳者プロフィール（五十音順）

ヴィラーグ・ヴィクトル　　（第１章、第７章、第１０章）

日本社会事業大学准教授・福祉計画学科長

日本ソーシャルワーカー協会理事・国際副委員長

加藤 純一　　（第３章、第６章）

新宿区柏木地区民生委員・児童委員協議会副会長

日本ソーシャルワーカー協会監事・国際委員

桂 良太郎　　（第２章、第１２章）

日越大学(ﾊﾉｲ国家大学)大学院非常勤講師

日本ソーシャルワーカー協会国際委員（海外研修担当）

木村 潤　　（第１１章）

国際医療福祉大学 医療福祉・マネジメント学科 助教

日本ソーシャルワーカー協会国際委員

高島 恭子　　（謝辞、第４章、裏表紙）

埼玉県立大学　保健医療福祉学部准教授

日本ソーシャルワーカー協会理事・国際委員

高嶺 豊　　（第５章）

特定非営利活動法人エンパワメント沖縄・理事長

日本ソーシャルワーカー協会副会長・国際委員

春見 静子　　（第９章）

上智大学名誉教授

日本ソーシャルワーカー協会監事・国際委員

松永 千恵子　　（序文、序章）

群馬医療福祉大学　特任教授

日本ソーシャルワーカー協会理事・国際委員長

渡辺 修宏　　（第８章）

国際医療福祉大学

日本ソーシャルワーカー協会国際委員

行動するソーシャルワークのアンソロジー

ソーシャルワークは境界を越える：人間関係の重要性

編者：ルース・スターク
デザイン：ムスタファ・アル・アワド
レイアウト：パスカル・ルーディン
国際ソーシャルワーカー連盟（IFSW）　発行
978-3-906820- -19-4
第１版　2019 年（PDF 版）
Copyright © 2019　国際ソーシャルワーカー連盟
ラインフェルデン、スイス
＊本出版物に記載された見解は、必ずしも IFSW の方針を反映するものではありません。

翻訳：日本ソーシャルワーカー協会 国際委員会
第１版　2026 年（PDF 版）

発　行　日　令和　年　月　日
発　行　者　特定非営利活動法人　日本ソーシャルワーカー協会
発行責任者　保良　昌徳
〒１６０－０００８　東京都新宿区四谷三栄町３番７号
森山ビル西館４階４０１
電　話　03－5913－8871
ＦＡＸ　03－5913－8872
メール　jasw@jasw.jp

（裏表紙）

ソーシャルワークは、人々がともに社会開発を創造するところに生ずる。

本書のアプローチは、ソーシャルワークの役割を生き生きと描くものである。本書はソーシャルワークと社会開発のためのグローバル・アジェンダの第四の柱をテーマとしている。
すべての物語は、変化を達成するために生み出される人間関係に関連している。

人々の物語を語り、その経験を記述し、省察的実践を用いることは、機能しない直線的な枠組みに実践的アプローチを詰め込むことが多すぎる従来の社会科学研究方法論に比べて、大きな利点を持つ。複雑さをいつも最小に見積もり、適応と革新の実践に遅れをとることが常である「エビデンスアプローチ」に従うのではなく、ソーシャルワーカーが非常に複雑な状況の下で専門職の原則を適用していることを、本アンソロジーは明らかにしている。人間関係の強化、連帯の構築、そして人々が真に相互に依存し合うパワーの実現こそが、この本の核心である。

さらに多くのこの種の出版物が必要とされている。これらは議論と省察を起こし、家族やコミュニティ、社会とともにとる未来の活動に生命を吹き込むことだろう。